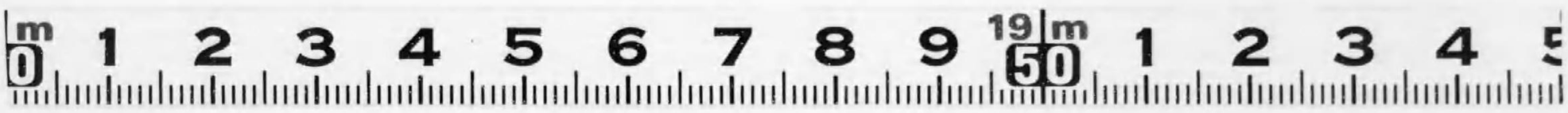

無斷轉載 版權所有 翻印必究

特109
800

義士銘々傳

大正
8. 9. 6
内交

目次

一、天恩枯骨に及ぶ四十七士の面目……一
二、蛇は寸にして人を呑む久馬の器量……一〇
三、論語讀みの論語知らず、久馬の頓智……二〇
四、賴母の願望叶ひ久馬大石の養子となる……二九
五、大智は愚内藏助晝行燈の異名を受く……三八
六、晝行燈の功名大石の山鹿送り……四八
七、大敵と見て恐れず内藏助山鹿の門人を諭す……五七
八、男でござる天野屋利兵衛の俠骨……六六
九、松野河内守利兵衛の鐵石心に感ず……七六
一〇、勿骨類と爲し不破數右衛門の退身……八五
一一、主家の變事を聞き數右衛門江戸乘込み……九四
一二、數右衛門金に窮し恩賜の羽織を脫ぐ……一〇五

三一、數右衛門の誠忠芝居小屋の騒動……一一四
一四、勿骨者竹林唯七燕子花の異名……一二四
一五、淺野屋敷御前試合唯七の大言……一三四
一六、唯七の氣合和久半太夫の勇氣を挫く……一四三
一七、匹夫の殉死唯七其の忠に感ず……一五三
一八、母の死に感憤して唯七愈々復讐の念固し……一六一
一九、大高源吾腹切魚の由來……一七〇
二〇、源吾義を守り貸金の請求……一七八
二一、豪傑大酒を好む中山安兵衛の江戸荒し……一八七
二二、咱嘩安兵衛葬式安兵衛飲んだ安兵衛……一九八
二三、細井廣澤安兵衛の胸中を見破る……二〇七
二四、廣澤四十七士の義擧を助く……二一七
二五、堀部安兵衛永代橋の訣別……二二七

二六、內藏助の內意を受け毛利小平太の後備へ……二三七
二七、毛利小平太の割腹烈女お富の貞操……二四七
二八、槍板倉と弓淺野村松三太夫の弓術……二五四
二九、勇士の譽れ村松父子の手際腹……二六五
三〇、間者の苦心岡野金右衛門の武骨……二七五
三一、岡野金右衛門の繪圖面取り義士の勇躍……二八四
三二、戀は曲者寺阪吉右衛門の不義……二九二
三三、吉田忠左衛門の涙々吉右衛門の驚愕……三〇一
三四、舊恩を忘れず吉右衛門夫婦の義心……三一二
三五、お輕の身賣り忠左衛門の仕官……三二二
三六、橫川勘平義心を隱し叔父夫婦を欺く……三三三
三七、遲れ馳の功名勘平の一番槍……三四四
三八、主從三世親子は一世牙野三平の割腹……三五四

目次

三九、大石内蔵助南部阪雪の別れ……三六三
四〇、味方を欺く大石の遠謀深慮……三七二
四一、手打蕎麦屋浪士の勢ゾ揃ひ……三八二
四二、時は來れり吉良邸撃入り……三九二
四三、浪士の奮闘、撃入り其二……三九九
四四、堀部竹林兩士奥殿へ斬り込む……四〇六
四五、大石内蔵助鳥井利右衛門を討取る……四二〇
四六、義士の討入り首尾よく本懐を達す……四三三
四七、義士の引揚げ武士道の亀鑑……四四六
四八、泉岳寺の焼香、首の受取書……四五九
四九、義士の四家預け、内蔵助十八ケ條申開き……四六九
五〇、武士道の精華、義士の辭世及び切腹……四八五

目次終

元祿快擧

義士銘々傳

雪花山人著

一、天恩枯骨に及ぶ四十七士の面目

勘忍のなる勘忍は誰もする、成らぬ勘忍するが勘忍、我國武士道の精華こして誇り、眞髓こして賞し、詩に歌に詠じ、劇壇に上し、忠孝二道の大義を宣揚して、千古に美名を遺した赤穂四十七士は、何れも成らぬ勘忍をして、首尾よく其の本懐を達したのであつた、實に其の行動の忠勇義烈なる、鬼神も爲めに泣くの概があつた、左ればにや明治元年十月、時の明治天皇陛下、始めて東京に行幸あらせ給ひし折、同年十一月、ワザ〳〵勅使を高輪泉岳寺に遣はされ、畏

れ多くも左の勅語を下し賜はつた。

汝良雄等固執主從之義復仇死于法百世之下使人感奮興起
朕深嘉賞焉今幸東京因遣使權辨事藤原獻吊汝等之墓且賜
金幣

宣

明治元年十一月五日

四十七士泉下の靈も、皇恩の深厚なるに感泣したであらう、天恩枯骨に及ぶこは實に此の事である。

茲に常陸の笠間で五万三千石、淺野采女正長重、本家は霞ケ關に屋敷のある藝備兩國の大守淺野安藝守、先祖の大功によつて、五万三千石を隱居料として常州笠間に下された、處が采女正長重、公儀へ無斷で、堀浚ひをしたこいふので其の咎めに仍つて國替へこなつた、之れは德川家康公の建國百ヶ條のうちにあ

る、即ち德川家の憲法だから仕方がない、其處で今度變つて來た處は播州の赤穗、來て見るこ城がない、城のない處を昔は陣屋こ云つたものだ、采女正長重殊の外殘念に心得、何うかして城を築きたいこいふ考へから、家老で大器量人の大石賴母に相談した、賴母は胸を叩いて引受け、苦心慘憺、奔走盡力の結果海濱に近いから、海上防禦こいふ名義で以つて、城普請許可こなつた、然し普請金は淺野家自辨たるべき事、素より公儀の補助を仰ぐ精神でなかつた、淺野家の懷中から出金して、出來上つたのが、即ち赤穗の城であつた、自分の金で自分が拵へたのだから、念には念を入れ、十分手が屆いて居るので、小さくはあるが、日本名城のうちに數へられた位ひ、處が城普請で大層金が要つた、賴母は智惠を絞り、塩濱運上こいふ事を思ひついて、城普請の埋草が出來た、斯んな譯だから淺野家は次第に裕福こなる、表高は五万三千石だが、內高は十五万石位ひはあつたこいふ、然るに此の城代家老大石賴母は、年四十に余つて、

夫婦の間に子が出來ない、之れが一つの苦の種、何うかして立派な養子を貰ひたいと思つて居るが、何んしろ千五百石で城代家老の家を繼がせる養子だから文武兩道に秀でた人物でなければならぬ、註文が難かしいから、ナカ〳〵之れこいふものがない、然るに其の頃淺野家の本家藝州家と備前岡山の大守池田家とは殆んど親戚同樣の交際であつた、双方共豊臣家恩顧の家柄であつたが、殊に池田家は徳川家と親戚の關係がある、又淺野家は代々徳川に對して、忠勤を抽んじた功績があるので、兩家とも徳川家の覺へが目出度い、そんな間柄であつたが、或日の事、池田家より使者を以つて、明日は大守御誕生の祝いを催ふすべく、是非御來駕願ひたく、目新らしい餘興を尊覽に供へたい積りで、其の用意も出來てあるゝ、云つて來た、尚ほ分家も同樣、御同道相待つこの事であつたから、快よく承知の旨を返答して返し、翌日分家にも通知の上同道する事となつた、分家淺野采女正長重公は城代家老大石賴母を從へ、備前家の館へ出

頭した、集まつた大名が十三頭、其他大名に附き添つて來た陪臣方も數多あつた、△一体池田家には、餘興こかを見せるこの事であるが、何を見せるかな□さやう、角力こも違ふが、何んな餘興であらう、○「餘興は全体、酒肴をやりながら見るべきものだが、一向酒肴が出ないではないか」酒に目のない大名は、咽喉を鳴らして居るものもある、折しも俄に庭前に當つて、ドーン〳〵陣太鼓が鳴り渡つた、諸大名首め一同、ハッこ思つて庭前に目をつけるこ、今迄庭先に張り廻してあつた幔幕がサッこ同時に切つて落された、時は三月彌生の中句、爛漫こ咲き亂れた櫻花は、目も覺むるばかり、東西には紅白の幕を張り、陣大鼓の音につれ、東西の幕張の中より、ワアッこ一時に關の聲、一同アツこ目を見張つて居る處へ、赤き幕内より整々堂々こ繰り出したる人數、其の扮裝を見てあれば、何れも緋縮緬の襷をかけ、茜の鉢卷キリ、こ目も釣らんばかり、十六七才を頭こして、十二三才の小姓ばかりが、列を正して馬上ゆるや

かに乘り出す有樣、諸大名何れもアッと目を驚かして居る折しも、又もやドーン〳〵と響き渡る陣大鼓の音につれ、西手白地の幕内より現はれたる小姓の面々く、之れは又白繩縮の襷を十字に綾取り、白の鉢卷を締め込み、勇氣凛々として、馬を乘り出す光景、實にや源平試合と見へ、勇ましなんといふばかりなし此の時池田家の老臣一人夫れへ進み出で、一同に敬禮の上、○「之より餘興を御尊覽に供へまする、夫れについて先づ馬術、引續いて打毬試合といふ變つた餘興を演じますれば、何卒暫らくの間御覽下さるやう」と云つて引下る、諸大名は動搖めき渡り、△「池田家は威張つた家柄、其の家の荒小姓が馬術とは面白からう、之れは一段の興だ、○「イヤ、馬術も面白いが、目先を變へて打毬とは珍らしい、拙者恥かしながら打毬といふもの、今迄見た事がない、之れが見物であらう」と、思ひ〳〵に評し合つて居る、紅白の列はドーンと響く大鼓の音につれ、左右にサッと開いた、城代家老池田玄蕃は椽側に突つ立ち、始め

への號令をかけると、年若の小姓より次第〳〵に馬術を始める、或は高麗八丈流、大坪本流、大坪新流、眞垣流、筑柴流、向井流、思ひ〳〵の馬術を演じて引下る、手綱捌き、又は駈けの鮮かさ、中にも白襷をかけた白組のうちより立ち現はれた十二三才の少年あり、ヤッと手綱を絞ると、馬は四足を揃へて、一つの庭石の上に突つ立つた、之れぞ小栗判官碁盤乘りの型を見せたのであらう一同之れを見てアッと感心してゐると、今度は狹き庭前をクルリ〳〵と廻りながら、敵隱れ、彈丸隱れの妙術を見せて引下つた、之には諸大名もアッと驚き、△「今の美少年は一体何者であらう、誰の倅だ、○「イヤあれは城代家老池田玄蕃の二男久馬と申す十二才の少年であるさうだ……、□「フヽム、十二才……イヤ何うも感服の外はない、成長の曉は天晴人物となるであらう」口々に評し合つて居る、中にも、陪臣席に扣へて居る大石賴母は、目を細くして此の少年を眺めて居たが、何か心に首肯きながら、穴の明くほど少年の顏のみ

見詰めて居るのであつた、今度は打毬ご此の觸れ出し、紅白兩隊は何れも打毬杖を携へ、紅白の毬を馬場へ投げ置き、夫れを馬上から打毬杖で救ひ上げ、正面の打毬坪ご云つて、戸板に一寸ほごの丸い穴が開いて居る、夫れへ數多く投げ込んだものが當日第一の譽れ、ダガ夫れがナカ〳〵難かしい、紅組は白組の邪魔をする、白も同じく紅組を邪魔して、投り込ませないやうに勤める、武藝試合ごは違ふが、目先が變つて、又面白いものだから、大名の家庭では此の試合がヨク流行つて居る、結句敵方の毬を五個先に打毬坪の中へ打ち込んだ方が勝ご定めてある、城代池田女蕃は此の事を諸大名首め陪臣一統に說明した上、號令をかけるご、紅白兩組の撰者十名、双方が五名づゝだ、其の十人は待ち兼ねたりごいはぬばかりに、サッご馬のり出し、互いに入り亂れて毬の奪ひ合が始まつた、之れが矢張り馬術に巧者でないご出來ない、敵が取らうごする、さうはさせないご妨げる、馬上で挑み爭ふのだから、下手な奴は、馬から突き落さ

れる、今や兩軍は必死ごなつた、紅組は足並揃へてかゝつたものご見へ、白組を防きながら、見る〳〵白の毬を四ツ迄も打ち込んだ、白はまだ二個しか入れて居ない、今一つ紅組に遣られたら、全然白組の負けごなるのだから、白組は此處を先途ご、挑み爭ひ、算を亂して試合つて居る、折しも白組のうちより、一際目立つた美少年、之れぞ先刻馬術で人々をアッご驚かした少年だ、紅組の三人迄を相手に引受け、大坪本流の馬術を現はし、順に乘り逆に廻り、打毬杖を振り立て〳〵、互いに勝負を爭つて居たが、件の美少年はアッご叫ぶご、三人の間に乘り拔け、紅毬一つをエイッ、坪の中へ打ち込んだ、三ヲヤヽッ、久馬が一つ打ち込んだぞ、それッ、味方のものの早く、白毬一つ打ち込め〳〵」紅組は氣を焦ち、口々に呼はつて居る折しも、又もや件の少年は右に左りに乘り立て〳〵、紅組の一人をヤッご馬上より突き落すご共に、素早く、足許の紅毬をエイ〳〵ッ、續けさまに、二つ打ち込んだ、之れが爲め白組よりワーッご関

の聲が揚る、夫れに引かへ、紅組は悄々こして引下る、一同ヤンヤこ美少年の日覺ましき働振りを賞め讃へる、中にも末座に居る大石賴母はハタこ手を打ち何に思ひけん、賴「ウーム、之れく、之れこそ乃公の養子だ、先づ之れこ極めた……」我を忘れて聲を立てる、一同は驚いて、○「オイく大石氏、乃公の養子は之れこ極めやうつて、何う極めたので……、大「エッ、何か拙者が云つたか、○「云つたがぢやァないか、乃公の養子は之れこ極めやうなんて云つて居たぢやァないか……、大「ウーム、實は余りの鮮かさに夢中になつて何を云つたか知らない、○「冗談ぢやない、貴公にも似合はん事ぢや……」大笑ひをして居る。

二、蛇は寸にして人を呑む久馬の器量

第一回の打毬は白組の勝こなつた、暫らく休息して第二回を催うすこの觸れ出し、其の間に豫て用意の酒肴が出る、今度は酒宴をしながら見物、打毬は始まつた、件の美少年の働き目覺ましく、續けさまに敵の紅毬四個を打ち込み、白組の勝こなつた、賴母は思はず立ち上つて、大「ヤァ勝つたく、倅が勝つたく……」先には養子こ極めやうこ云つて居たが、モウチャンこ倅にして仕舞つた、一同は狂氣でないかこ呆氣に取られて居る、處が大名の列に居る賴母の主君釆女正長重公は、堪り兼ねて、別室へ賴母を呼び込み、釆「賴母、其方にも似合はぬではないか、大勢列座の中で、倅が勝つたこ申して居たが、アレは何んこいふ事だ、皆が狂人の如く心得、指ざし笑つて居るではないか、賴「恐れ入りました、全く倅が勝ちましたので……、釆「まだ申すか、倅こは何者だ……、賴「イエ御前、只今紅毬を四ツ迄打ち込んだのが手前の倅で……田の荒小姓ではないか、賴「さやうではございますが、手前の養子で、釆「ナ

ニ養子、シテ何日の間に養子こいたした、予は少しも存ぜぬぞ、姓名は何んこ申す、大「恐れながらまだ存じません……、采「默れ、イヨ〳〵其方は醉酊を申して居るの、養子にいたせしものゝ姓名を存ぜぬ法やある、大「實の處はまだ此方がさう極めましたばかりで、先方へは掛合つて居りません、采「アハ……、馬鹿な事を……、予の城代家老こもあろうものが、疎匆千万な事だ賴「假令、先方が何んこ申しませうこも、大石の家名はアノ少年ならでは相續は出來ません、千五百石の世嗣は彼れこ極めました、依つて只合姓名を尋ね、養子の相談を持ち込む所存にございますゆへ、万一事面倒こ相成りましたる節は、御前樣より、當家御大守樣にお扱ひ下され、事圓滿に運びまするやう、偏へに願ひ上げまする、采「アハ……、何うも賴りのない話しであるが、夫れほご執心であらば、予よりも賴み込んで取らせる、先づ當人の姓名、兩親の名前を尋ねよ……」賴母は大いに喜び、元の席に引取り、夫れこなく尋ねるこ

池田家の一門で城代家老池田玄蕃の二男久馬こいふものこ分つた、賴「ハ、アー身分は同じ城代家老で同格であるが、三万石の池田玄蕃、千五百石の拙者、余り祿高が違ひ過ぎるな、先方は大名並、此方は陪臣、之れはチト相談が難かしいかも知れんぞ、然し次男こ聞いて幾分か賴寄りがあるわい、然し何處に居るであらう……」賴母は其の場を立つて、久鳥を探し廻つて居るこ、此れ等の荒小姓連中は、勝利を得た白組ばかり、庭前白幕のうちで、上より頂いた折詰を開き、辨當を喰つて居る、賴母はソツこ幕張りのうちを窺き込み、賴「ウムアレに居るな、悴が居た〳〵、斯う大勢の中に居ても、品があつて、何處こなく一見識あるわい、第一辨當の食ひやうからして巧者だ、何をやらせても巧い〳〵……」見惚れて居る折柄、十六七才の少年が何か用がある こ見へ立ち上る機會に、傍にあつた刀をポンこ足蹴にした、昔の武士は刀は武士の魂こ云つて大切にしたもの、之れを足蹴にされやうものなら、直に命の取りやりこなる

位い氣が荒かつた、□「アイヤ、待たつしやい、武士の魂をナゼ足にかける、無禮であらう、○「ヤア之れは誰かゝ思つたら、若林か、乃公も心あつて蹴つた譯ではない、ツイ過つていたしたのだから許してくれ、此の通り詫をする、詫はするが、夫れほど大切のものなら、此の後もないゝは限らん、斯樣な手挾の足下へ置かないで、頭の上へでも載せて置くが宜からう……アハ……」此方も咎められて癪に障つたゝ見へ、嫌味を並べた、□「ナニ、粗忽をいたして置きながら、頭の上へ載せて置けゝは何事だ、サア勘辨ならん、尋常に勝負いたせ、○「ナニ勝負、面白い、敵に聲をかけられて、後へは引かんぞ、ウーム……」互いに刀をオツ取り、つめよせた、大勢は之れを見て驚いた、慌てゝ双方を宥めにかゝる、双方共意地ゝなつて、ナカ〳〵後へ引かない、此の騒ぎを晦ゝ幕外から見て居た大石賴母は、賴□ハヽヽア、果合かな、町人百姓ゝ違つて、流石は武士の子だ、一歩も讓らず、果合ゝは感心〳〵、夫れについても

忰は一向止めもせず、ユウ〳〵ゝ辨當を食ふのは確かに感心、物に動せない精神天晴〳〵、ダガ眞劍勝負ゝは穩かでない、一体何うなるであらう」ゝ、氣を揉みながら眺めてゐる、兩人はイツカナ引かず、イヨ〳〵勝負ゝいふ事になつた、食事をしながらジロ〳〵此の体に目をつけて居た池田久馬は、モウ捨て置かれないから、ムシ〳〵食つて居た奴をグイゝ呑み込むゝ共に、大喝一聲、久□「扣へろ、馬鹿者奴ツ……」怒鳴りつけるゝ、二人はアツゝ仰天した、余り大きい聲であるから、タジ〳〵蹌踉めいた、ヒラり双方の間へ飛び込んだ久馬は、久□「兩人ゝもお扣へなさい、最前より承はれば、一方は武士が立たんゝいふ、部屋住の身であつても、我々の身の上は必竟君に捧げてあるもの、我が勝手には相成るまい、果合は必竟私の意恨、武士を千日養ふは一時の用に立てんが爲めゝいふ事をお忘れに相成つたか、不忠の到りゝ云はれても致方ござるまい、又身体髪膚之れを父母に受く、然るに私の意恨で怪我過失があつては

之れ不孝ではないか、身は親に命は主に預かつて居るもの、勝手な眞似をしては濟むまい、殊に今日は御祝日、夥多の御來客もある事、まだ御宴會が果てた譯ではない、斯樣な事をしてはお殿樣首め御來客樣方に相濟むまい、夫れでも是非ご仰せあらば、御酒宴相果てて後、池田久馬がお相手いたす、夫れこも今でなければいけないご仰しやれば、改めて久馬兩人を引受けて果合に及ばう、然し此處では場處が惡いから、何處かへ參らう、返答承はりたい」理の當然に兩人共閉口して、「イヤ久馬ごの恐れ入つた、何うか此の事御重役方へ御內分に願ひたい……」二人共久馬の言葉に說き伏せられ、果合は何處へやらこれを呢ご見て居た大石賴母は、手を打つてマス〳〵感じ入り、賴「ウーム、豪い、勇あり智ありごは此の事、イヨ〳〵之れは乃公の養子にせねばならぬ」こ、雀躍りしてソッご元の席へ戻つて來る、夜に入つて酒宴も果て、大名方は思ひ〳〵に退散、翌朝大石賴母は、主君采女正長重公の目通りに出で、挨拶を

述べた後、池田玄蕃の二男久馬を養子に貰ひ受けたき由を言上に及んだ、スルト采女正長重公も昨日の打毬の折、馬術ご云ひ、其の働振を見て感心して居たのであるから、采「ヨイ〳〵、予が本家藝州公に賴み、當家より久馬ごやらを貰ひ遣はす、安心いたせ、次男ご申す以上故障はあるまい……」他ならぬ賴母の賴み、采女正快よく引受け、本家藝州公に會つて、此の事を特に賴み込んだ、安藝守も承知した、二三日經ご安藝守は、大名小路の備前家へ出かける酒宴ごなる、酒宴央ばに、安藝守が池田公に向つて、池田久馬を申受けたき由を申込んだ、處が池田伊豫守殿オイソレご承知をしない、伊「安藝殿、折角だが、アレはいけない、久馬は當年十四才に相成るが、彼れ十三才の折、身共は彼の爲めに助けられた、則ち命の親であつて、少年ながら五百石の筆墨料を與へてある位ひ、余人なら兎に角、彼れ久馬は末賴母しき少年、ナカ〳〵以つて他家へはやれぬ、安「ナニ、命の親、夫れは又何ういふ譯でござる」此處で池

田伊豫守は、久馬より藥湯を勸められた頓智頓才のある顚末を詳しく物語つた
夫れは斯樣であつた、備前岡山三十二万石の大守池田伊豫守は、通名を内藏頭
と云つて、頗る學問は熱心であつた、日々夜々見臺に向つて、一心不亂に書物
を讀む、余り過度の勉強の爲め、身體が次第に衰弱する、幾等臣等一統より藥
を勸めても、服用うとしない、夫れゆへ身體はマス〳〵衰へる、顏の色は青く
なる、食慾が減るといふ始末、臣等一統悉く心配、一日重役方相集まり、
「何うも殿樣にも困つたものである、如何程お藥を勸めまいらせても、草根
木皮に人命を取りとめる力なしと仰しやつて、何としても藥を召上らぬ、何う
したものであらう」と、額を集めて協議の處へ、ノコ〳〵出て來たのは、十二
才の池田久馬であつた、之れを聞くと、夫れへ手を支へて、久「恐れながら、
お父上、殿にお藥獻上の役目、此の久馬に仰せつけ下さいまするやう……」之
れを聞くと父女蕃は怒つた、玄「默れ、小供の僻に生意氣な事を申すでない、

控へて居れ……」叱りつける、スルト側に居たのが、池田女蕃との親族の間柄
に當る伊木勘解由といふ老臣であつた、伊「アイヤ女蕃ご、夫れは却つて大
人より小供の方が宜いかも知れん、殊に久馬は發明である……、司馬温公は十
三才で甕を割つた、布衣は八才で、秦の使者となつた、白易は五才で火を司る
とある、賢愚は年を以つて論ずべきでない、三才の翁もある、百才の童子もあ
るではござらぬか、之れは却つて小供の方が宜からう」と、勸めた爲め、遂に
久馬に此の役目を申付けた、處が久馬は何か仕度をして、殿の居間へ出かけ、
唐紙を開けて、閾の外に兩手を支へる、殿「誰ぢや、久馬奴にございます
る、殿「オ、久馬であるか、其方でなくては話は出來ぬ、苦しうない近う參れ
久「ハ、ツ……」間近く進んだ、久馬は伊豫守寵愛の小姓であつた。

三、論語讀みの論語知らず　久馬の頓智

伊豫守は見臺より目を放して、ニタリ〳〵笑顏を見せながら、伊「ヤヨ久馬、老臣共は予の顏を見る度に、苦い藥を服め〳〵こいふ、草根木皮人命を取りこめる力はないこ申聞かせても、夫れが分らぬ、サテ愚な奴は困つたものぢやのう、其方は何才になる、久「ハイ十二才にございます、殿「只今、其方何を讀んで居る、久「論語の卷の二を讀んで居ります、殿「ア、さうか、學問を精出して後々は、天晴の英雄こなれ、久「有難うございます……、就きましては、今日は少々お殿樣にお伺ひ申したい事がございまして、罷り出でましてございます、殿「ア、さうか、予の命數も遠くはあるまい、今のうちに何なりこも聞いて置け、恐らくは天地間の森羅万象、知らぬこいふ事はない、何んでも後學の爲めに聞いて置け、久「ハイ、學問は何の爲めにいたすのでございますか、

殿「ウム、學問か、學問は人の鹽ぢや、世の光りぢや、魚に鹽をすれば腐らないこか申しますが、父の話で確こ分りませぬ、眞實の事でございませうか、殿「ウム、松永彈正は豪い大將であつた、天正五年秋の頃、筒井順慶、細川幽齋、明智光秀の三人に攻め滅ぼされた、今日討死の首途こ承知しながら三里に灸を据へて居たけな、家來が眺めて、殿今日は討死ではございませぬか、ウム討死である、討死御承知でありながら、三里に灸をお据へ遊ばすこは如何なる次第で……予は足病であるから三里に灸を据へて居つたぞ……、何うぢや、討死こ承知しながら三里に灸を据へるこは實に感ずべきでないか、武士は之れ

ほご身体に氣を附けねばならぬものであるぞ、いませぬ、夫から齋藤内藏助こいふ人は、日の岡で梟首にかゝる時、老婆が一人訪ねて來て、熟した柿をやらうこいふ、然るに、腹病であるから柿は喰はぬこ申されましたこやら、之れこても父の寢物語り、嘘か眞實か分りませぬが伺ひ奉ります、殿「イヤ齋藤内藏助か、彼も豪い奴ぢや、明智の軍師で、丹波猪の入口に八万石を領して居た、光秀本能寺に織田右大臣を討つ、秀吉怒つて中國より引返へし、明智の天下は遂に山崎に亡ぶ、齋藤は義によつて、日の岡の峰で、梟首にかゝる際、殘した辭世が良かつた、

消へて行く露の命の短夜は

明日をも待たぬ日の岡の峰

處へ尋ねて來たのが齋藤の乳母ぢや、袂より柿を取り出し、此の世の別れに何うか一つ……、イヤ予は腹病であるから柿は喰へぬ、何うぢや今死する身で、

腹病だから柿を喰はなかつた、松永こ云ひ、齋藤こ云ひ、之れ等を指して武門の龜鑑……ア、武士は斯くありたいものぢやのう、身体は大切にせねばならぬノウ久馬……、久「ハッ、仰せの通りでございます、恐れながら久馬が一つのお願ひ、殿「ナンヂヤ、久「何卒、本日よりお藥を召上りまするやう、殿「默れ、草根木皮、人命を取りこめる力なし、命は天なりこ申してあるではないか久「コハ情なき殿樣の御言葉、松永彈正は討死の首途こ知りながら、三里に灸を据へました、齋藤内藏助は死する最後に腹病こ申して好な柿も喰べませぬ、之等をさし武門の龜鑑こ御賞美なさる殿樣が、命は天なりこは何事でございまする、世にいふ殿樣は論語讀みの論語知らずこ申すもの、如何なる天魔が魅入りしか、殿に魅入りし其の天魔斯うしてくれん……」机の上の書物を取るより早く、庭前目がけてバラ〳〵こ投げつけた、伊豫守之れを見るこ、烈火の如く憤り、伊「ヤア無禮者奴ッ……、久「何が無禮でございまする、殿樣は論

語讀みの論語知らず、將軍家に對しては祿盜人、伊「ナニ、祿盜人と申したな……ウーム久馬無禮であらうぞ……」猿臂を伸して刀架より取り外したは備前助定の名刀、ズラリ鞘拂ひに及んで突つ立つた、久馬はバッと五六間飛退り、目を剝いて、ベロリ舌を出し、久「ヤーイ馬鹿武士拔たな、天下の豪傑池田久馬がそんな鈍刀で斬れるものか、サア切つて見よ……」惡口雜言大手を擴げて立ち上る、伊豫守マス〳〵立腹斜ならず、伊「ヤア、誰ぞある參れ〳〵……」幾等呼んでも、兼て久馬が近臣と示し合してあるから、誰一人出て來るものがない、伊豫守は怒り心頭より發し、太刀を振り上げ、ヤッと久馬目がけて斬つてかゝつた、久馬はヒラリと引外して、久「ヘエーッ」目を剝いて舌を出す、伊「ウム、無禮な奴……」又斬りかゝる、引外す、根が衰弱の身體、三度四度重い太刀を振り廻して、彼方此方へ追立てると、モウ足がヨロ〳〵する、息使いが烈しくなる、顏の色は眞青となる、久「ソレ見ろ馬鹿殿樣の腕前では、天下の豪傑久馬は斬られまい、此處迄ござれ、甘酒進上……」飽迄嘲弄する、殿はマス〳〵立腹、ヨロ〳〵追かける、久馬は城內名題の三十二間燈廊下へ飛び出した、バラ〳〵逃げ〳〵尻をポン〳〵叩く、伊豫守はウム〳〵フウ〳〵云ひながら追かけて居られたが、ヨロ〳〵こ夫れへ倒れた、モウ起き上る勇氣がない、伊「ウーム、ク、苦しい、タ、誰ぞある、ユ、湯を持て〳〵……」此の時茶坊主の春齋こいふが、久馬こ示し合して居るから、バラ〳〵横合より出て來て、湯呑を差出した、之には藥湯が入れてある、伊豫守は湯だこ思つて、グイこ一口に呑み干したが、余り苦しいので湯だか藥だか分らない、伊「モ、モ一杯持て……」春齋は素早代りを持つて來る、夫れも一呼吸にグイこ飲み干したが、以前の一杯で大分沈着いた處であるから、二杯目は味が分る、何だか變だこ、湯呑を覗き込み、伊「坊主、之れは藥湯であつたな、ウーム……」春齋は驚いて逃げ出す、殿はホッこ呼吸をつきながら、ニコッこ笑つて、伊「ウーム

……」何か思案の体であつたが、其の儘居間へ引返した、暫らくするこ、パチ〳〵こ手を叩き、伊「コレ〳〵、春齋を呼べ……」春齋は恐る〳〵目通りへ出て平伏するこ、伊「其方予に只今藥湯を與へたな、アレは其方の心から出でていたしたか、夫れこも他に差圖いたしたものがあるか、春「ハヽッ、恐れ入りました、久馬ごのお差圖でございました、伊「デあらう、久馬ならでは他にいたすものもない、久馬を呼べ……」久馬は恐る〳〵御前に出て平伏する、伊「久馬、予に藥を服ませたのは、其方の指圖の由ぢやな、久「恐れ入りました、我君へ對し奉り、若年の私、申すも恐れ多き事ながら、殿樣御病中老臣一統何れも心痛いたしてございまする、何うかして、お藥を差上げたしご、心にもなき惡口雜言、假令一口たりこも、御藥を御召し下されますれば、手前の喜びは之れに過ぎません、何卒此の上は無禮の段、御手打を願ひ上げまする……」泰然こして首さし延べた、伊勢守は莞爾こして、伊「イヤ〳〵、予は其方の申せし

通り、論語讀みの論語知らずであつた、書物に心を奪はれ、藥効のある事を知らず、草根木皮は人命を救ふに足らずこのみ存ぜしが、只今服用て精神爽かに相成り、初めて藥の効ある事を知つた、以後は服藥いたすであらう、予を怒らせ、藥を服ませし才智、末頼母もしく思ふぞよ、本日の褒美こして之れを與へる、尚ほ又只今より筆墨料こして五百石を與へるであらう、精々文武を勵み天晴の人物こなつてくれよ……」こ、有難き言葉が下つた上、池田女婿へ對して、改め筆墨料下賜の沙汰が下つた、之より後殿樣は、久馬を命の親こ思ひ、寵愛は以前に倍して一通りでなかつた、其の秘寵の小姓久馬を突然藝州が所望するから、伊豫守首を横に振つて、ナカ〳〵應ずる氣色がない、藝州公も仕方がないから、分家采女正に此の事を話して、頼母に思ひこゞまるやう勸めた、處で池田家で曰付きの久馬こ聞いて頼母はイヨ〳〵欲しくなる、自身本家藝州公の目通りに出て、挨拶を述べるこ、安「ウム分家の城代大石頼母であるか、

近う〳〵、然し賴母、其方は池田家の秘藏の小姓池田久馬を養子に所望の由であるから、予は采女正の賴みにより、伊豫守殿に掛合ひしが、彼れ久馬は備州の命の恩人、其の仔細は斯樣〳〵であると、辻も應じない、斷念いたすが宜からう、予が別に養子の適當なるものを見計らつて遣はさう、「イエ〳〵、其の儀につき罷り出でました譯ではございませぬ、手前事初老こ相成り候へごも、一子之れなく、然るに久馬ごのを養子こいたすこご、相叶はざるに於ては、世の中に樂み之れなく、依つて城代家老一千五百石は返上仕り、御本家の御目通りに於いて、切腹いたしたく、依つて本日罷り出でました次第、此の身不憫こ思し召し、何卒殿御介錯賜はり度、此の段偏へに御願ひ申上げまする……」云ひつゝソロ〳〵双肌拜し脫ぎ、用意の短刀引抜き、逆手に取つて、咄嗟我れこ我が腹へ突き立てんこする。

四、賴母の願望叶ひ久馬大石の養子となる

ヨモヤ之れが狂言にしろ、止めぬ譯には行かないから、「安」ヤヨ待て賴母、短氣をいたすな、予の眼前に參り、切腹いたされては、分家の采女正に怨まれる又其方は五万三千石の礎ではないか、今其方が腹切つては分家は闇である、待て〳〵、大「然らば池田久馬を是非〳〵御貰ひ下さいますか、「安」ウーム、何うも困つた奴ぢや、待て〳〵……」藝州侯何か思案の体であつたが、「安」ウム予が命にかへて久馬を佶度貰つてやる、併し當月より三ケ月を待て……」之れを聞くこ賴母は慌てて肌を入れ、チヤンこ身裝を繕つて、大「ハヽッ、恐れ入りまする、久馬を養子に貰へる事でございますれば、三ケ月が一ケ年でも相待ち申し上げまする、夫れ迄は手前の命も殿樣に御預け申しまする……」吳々賴んで立ち歸る、采女正長重公は之れを聞いて、苦笑遊ばし、長「アハ……、賴

母は本家へ參り、反間苦肉の計略を行つたか、イヤ彼の計略には誰しも乘るわいし、笑つて居られる、然るに此方藝州侯は、一通りでは迚も久馬を手放すまいと思つたから、種々思案の末、何と思ひついたか、抱への軍學天文學者を呼び出し、安「其方へ尋ねるが近々に雨はないか、天「ハイ、今朝天文を伺ひますに本日八ツ頃合より、大雨大雷かと心得ます、安「フム、八ツ時分より大雨大雷ぢやの、天「御意にございます……」之れを聞くと安藝守、俄に供揃ひの用意に及び、池田家へ乘り込む、處が此の大名の來客といふものは、何月何日何時に來て、何時に歸るといふ事は十日も前から約束がしてあるもの、ダガ安藝守は親顧同樣の池田家だから、不意に出かけた、池田家では驚いたが、厚く饗應す、安藝守胸に一物あるから、供揃ひを返へし、安「夕刻に迎いに參れ……」之れは極親密の間柄であるから、供を返したのだ、其の後で兩侯は暑さの破りこいふので、打ち寛いでの酒宴、安「本日は突然參つて、イロ〳〵手配

に預り忝けなく存ずる、伊「不意の入來、何んと思つて參られた、何か面白き事でもござつてか……、安「イヤ、面白い事もないが、暑いな、伊「六月ぢや暑中は暑いと昔から相場が極つてあるではないか、安「アハ……、之れは一本參つた、然し就中暑い……、アヽ暑い〳〵と云つて庭前から空ばかり見上げて居るから、池田伊豫守は不審に思ひ、伊「オヤ〳〵、何んで藝州は空ばかり眺めて居るのか知ら……」思つて居るうち、丁度正午頃から俄かに眞黒な雲が出て、ゴロ〳〵〳〵と雷の音が遠くで聞へる　安藝守胸中に占めたと思つて居るうち、イヨ〳〵大雨がザア〳〵と降り出した、ピカ〳〵閃く、雷はゴロ〳〵鳴る、雨は車軸を流すが如く降り頻る、此の時安藝守は、俄かに盃を落し、色青ざめ、床の間の方に少さくなつて居る、伊「オヤヽ、藝州何うなさつた、氣分でも惡いかな、安「ウヽム、イヤハヤ恐縮千万だが、身共百万の大敵は物の數でもしないか、幼年より雷が大嫌いで、今朝か

ら胸に痛みを覺へて居たが、案の如く此の大雷、ブ、無禮は平に許されい、ア、怖い〳〵……」ブル〳〵震へて居る、之れを聞くこ池田伊豫守、伊「ア ハ……、何事ぞ天下の諸侯が、雷を恐れるこいふは其の意を得ぬ、拙者なぞは雷鳴を聞くこ、胸が清々して、氣分が快くなる、安「イヤ、夫れ位いの講釋は身共こても存じて居れご、性來氣に喰はぬ雷鳴、虫が好かぬこ申さうか、其の場になれば自然こ身休が震へ、怖くなる、夫れゆへ霞ケ關の屋敷には、雷避の間こ申して、嚴重の一室設けあり、雷鳴の節は其の座敷に入つて小さくなつて居るこいふ始末、當家には雷避の間はござらんかな、伊「ア ハ……、當家にはワザ〳〵左樣の間の設けはござらぬ……」冷笑つて居るうちに、マス〳〵大雨大雷こなり、イヨ〳〵安藝守は色を失ひ、安「ウーム、之れは堪らぬ、失禮ちやアが屋敷へ歸りたい、早く雷避の間へ入りたく存ずる、伊「イヤお嫌いこあらば、御歸邸が宜しい、御遠慮なく……、安「シ、然らば火急を要する場合

當家の人を拜借いたす、猶ば失禮ぢやが、久馬を連れて參つて宜しうござるか伊「サアサ、御隨意、御身こ拙者の間柄、備前の家來は藝州の家來、藝州の家來は備前の家來同樣ではござらぬか、他人がましく借り受けるなぞこ申さずこサツサこお連れ下さい、安「然らば久馬を同道いたす……」安藝守の供は悉く返して仕舞つたから、池田の家來で供揃ひ、久馬を連れて、大雨の中を霞ケ關へ歸館こなつた、間近くなるこ一人が駈け拔ける、門は八文字に開く、藝州の家來は慌てゝ出迎へる、乘物は女關に橫付けこなる安藝守ズイツこ乘物より立ち出で、供頭に向つて、安「一同大儀であつた暑中は雷鳴が時々いたさんこ、氣が結ばれていかんな、大雷の爲め予は氣分が清々こいたした、立ち歸り主人へ宜しく傳へてくれ……」供頭は驚いた、頭「オヤ〳〵之りや妙だ、そんなに氣分が清々すりやア、モツこ屋敷で飮んで居れば宜いのに、雷が嫌いだこ云つて、ワザ〳〵大雨の中を歸つて來て、氣分が宜

いなんて、余り横着過ぎる」思ひながら頭を下げてゐるこ、安「一同立ち歸つて苦しうないが、池田久馬獨りは返へす譯にならんぞ、久馬は手を支へて、久「恐れながら、私一人をおこめ置きになりますると、如何なる譯でございまするか、安「其方も、目通りにゐたゆへ存知居るであらう、本日は供返しをいたし、家來が居らぬゆへ、歸舘いたすに不都合ぢやこ申したら、池田伊豫の申すには備前の家來も藝州の家來も同じ事ぢや、召連れいこ申し、其の時予が久馬を貰つて參るが宜いかこ申せし處、念に及ばん連れて行けこのこであつた仍つて予は其方を貰つて參つたのぢや、今日より久馬は淺野安藝守の家來であるから、左樣心得よ、又他の家來共は立ち歸り、池田伊豫へ此の段申入れよ」こ、云ひつゝ久馬の手を取つて奥へ引込む、池田の供頭首め何れも呆氣に取られ、其の儘立ち歸り、此の由を主君伊豫守に言上するこ、伊豫守は烈火の如く怒つた、伊「サテは彼れ計略を以つて、予を欺き、秘藏の家來久馬を奪つて歸へつたのに相違ない、予が寵愛の家來、然も池田久馬を陰州の爲に欺き取られたこあつては、當家の瑕瑾になる、假令兄弟同樣の間柄たりこも、之ればかりは容赦はならぬ、弓矢にかけて取り返さねば相成らぬ」こ、直ちに家老池田四郎左衛門を以つて、藝州家へ掛合こなつた、安藝守の返答には、安「一旦武士が久馬を貰ひ受ける、お連れなさいこ申したではないか、さほご大事の家來であらば、ナゼ其の時に久馬はならんこ申されぬ、又弓矢にかけて受取るこいはれ夫れを恐れ久馬を戻したこあつては、四十二万石淺野安藝守の恥辱である、取り返されるものなら、弓矢の上にて取つて見ろ、藝州廣島の城主淺野安藝守、夫れに驚くやうな安藝守ではないぞこいはぬばかり、取つてもつかぬ返答に、使者に立つた四郎左衛門、據なく立ち歸り、此の由を歸つて言上した、サア事がイヨ〳〵大仰になつて來た、池「ヤア、弓矢を以つて應對するこは舌長の

申す條、廣島カキ奴燒いて喰つて仕舞へ……」兩家は今迄の親密に引かへ、俄に睨合の姿となつた、處が此の事が時の老中稻葉美濃守の耳に入つた、稻葉泰平の今日、干戈を以つて爭はんとは穩かならず」とあつて、双方の間へ仲裁に入り、ヨク〳〵取調べた結果、一旦武士が久馬をお連れなされと云つたのが失策であつたと、老中稻葉美濃守の裁判で、遂に久馬は蔭州家へ留まる事となつた、池田伊豫守も一旦は怒つたが、素より親密の仲、打ち解けて見れば別に異存もなく、美濃守の扱ひによつて、此處に和解、其の後は前日の如く水魚の交りを結ぶ事となつた、久馬は淺野安藝守より、分家の城代家老大石賴母の許へ養子に遣はしたが、久馬は飽迄主家池田家か忘れない印しに、池田伊豫守の通名内藏頭の内藏の二字を貰ひ、大石内藏助良雄と改名した、大石賴母は天にも昇る喜び、望みが首尾よく叶つて、斯んな嬉しい事はないと、手の舞ひ、足の踏み處を知らんといふ有樣であつた、一說には大石良雄は養子ではない、大

石權内の實子で、父權内が歿して後、祖父に養はれ、嫡孫家督といふ慣例に從ひ、大石家を相續したといふが、或は夫れが事實かも知れぬ、又良雄といふのも良雄といふものもある、學者の著はした書物には大概良雄とある、ケレど著者はヨク人口に膾炙して居る良雄の方で述べて置かう、夫れはサテ置き、久馬の内藏之助は、大石家の養子となると同時に、采女正長重公より五百石の筆墨料を賜はる事になつた、之れは池田家で貰つて居たのを、當家へ養子に來て與へぬとあつては、淺野家の名折れであるといふ處から與へたのであつたが五万三千石から五百石の筆墨料、ナカ〳〵氣張つた話、其處で劍術は片山軍平先生に就いて學ぶ、學問は後に京都の大學者、伊藤仁齋先生について修業した一を聞いて十を知るの才智がある、其の悧發な事目から鼻へ抜けるとは此の事夫れが爲め家中一般の評判ものとなつた、△「御城代の御養子は智惠者ぢや、發明者ぢや、□イヤ智惠もあるが、武藝もナカ〳〵の腕ぢやといふ事だ」と

賞めそやす、貰はれて來たのが、十四才で、一兩年は何の事もなかつたが、丁度十五才の秋、内藏之助は久々で池用家の上屋敷へ御機嫌伺ひとして出かけた。

五、大智は愚内藏之助壹行燈の異名を受く

大智は愚なるが如し、此の時池田伊豫守殿は、久馬の内藏之助を膝下に招き、伊「久馬、飽迄文武兩道に精出して、淺野の家來に去るものありと云はれるやうになつてくれよ、其方の身体に万一の失体ある時は、元は池田の家來ぢやと直に予の名が出るのだぞ、生の親より育ての親の大切なる事を忘るゝな、主人を持てば、忠義の二字を忘れてはならぬぞ、之れを予と心得て朝夕眺めて呉れよ」と、云つて、波平行安の一刀を與へる、内藏之助は押し頂いて、今更ながら、有難涙にくれる、伊「内藏之助、其方は何が悲しうて泣くぞ、内「悲しう

て泣くのではございませぬ、身の定まりがつくと共に、君の御教訓が膽に銘じまして、余りの嬉しさに、嬉し涙が流れまする、伊「ウム、無理もない、一兩年の間に立派になつたのう、久馬……イヤ内藏之助、其方は何故總領に生れて來なんだ……行け〳〵……、アヽコリヤ〳〵待て〳〵、時々は尋ねて參れよ、在國の砌りは必らず返答を取らせるぞ、尚ほ又才智に任せて人に憎まれるな、君子は聖德あつて容貌愚なるが如し、大智は愚に似たりぢや、素破といふ時智惠を揮へ、腕を出せ、宜いか、分つたか……行け〳〵」内藏之助は、有難涙にくれて、退出した、處が内藏之助、池田の屋數へ伺候した翌日より、ボーツとし氣拔けがしたやうになつて、ボンヤリして來た、左りにさす太小刀を右に横へ、平氣で歩く、雪駄と草履を片々に穿いて行く、口アングリと、締りのない顏になつた、今迄賞めて居た家中のものは之れを見ると、〇「サア、可笑しな事になつたが、御城代の御養子が馬鹿になつた、余り智惠があるゝと云つて

有り無くして仕舞つた、□「併し、アレでも何か知ら……、今の御城代の無い後は、アレが御城代の跡目を嗣ぐのか知ら……、○「夫れは知れて居るよ、△「ダガ、アンな城代なら有つても無くつても宜い城代だ、○「其の通り〳〵、有る〳〵、晝間の行燈……之れこそ有つても無くつても宜いものだ……、□「何うだらう、馬鹿〳〵こいふのは余り剝き出していけないが、何こか一つ異名をつけやうではないか、皆「ウム、宜からう、何んこつける、△「世の中に有つても無くつても宜いのは何んだらう、□「サア……、待て〳〵……、オ△「イヤ違ひない、夫ぢやア之から晝行燈こつけやうではないか……」家中のものは夫れ以來内藏之助を晝行燈〳〵こ惡口をする、打てば響くの世の譬へ、早くも此の事が養父賴母の耳に入つた、賴母は何か考へて居たが、賴「ウム、之れ〳〵……」ハツタこ膝を打ち、大「コレ〳〵半三郎、家中一統に内祝いがあるから、粗酒一献差上げたいこ申して、觸れて參れ、半「委細承知いたしました……」瀬尾半三郎は家中一統へ觸れて歩いた、何にしろ相手が城代、否こは云はれぬ、皆刻限を圖つて歩つて來た、△「御城代、今日はお招きに預り、お目出度うございます……」口々に挨拶する、賴母はニコ〳〵顏、大「イヤ、ヨクお越し下された、サア此方へ……、遠慮をしちやアいけぬ、ズツト〳〵……」奥座敷へ案内をして、賴母自身が接待掛り、山海の珍味佳肴は處狹き迄運び出された、一同は目出度い〳〵こ云つて、酒肴を頂戴しては居るが、何が目出度いのか皆目分らぬ、一人の若武士は家老筆頭の大野九郎兵衞に向つて、若「元老、今日のお目出度は何ういふお目出度でございますか、大「一向、身共にも分らぬ、一應尋ねて見やう……、アイヤ大石氏、本日のお目出度一体何ういふお目出度でござるかな……、賴「何に、ホンの悴の爲めで……、大「ハヽア、御養子の御誕生日か何かでござるか、大「さやうではござらぬ、悴内藏之助を晝行燈〳〵こ賞めて下さるさうぢや、依つて今日は

其の畫行燈披露を仕りたいので……チヨイと……」之れを聞いて一同は驚いた

△「オヤ〳〵、親馬鹿こは此の事だ、器量人の御城代でも、畫行燈の因緣が分らぬこ見へる……」一同其の席に居堪らなくなり、一人立ち二人立ち、狐鼠〳〵こ逃けて歸る、翌日になるこ、若武士連中は、詰處で以つて、

△「何うだい、昨日の畫行燈の披露には驚いたではないか、□「さうだ〳〵、養子を畫行燈こいはれて、御城代は余程賞め言葉だこ思つていらつしやるやうだ、倅を畫行燈こいはれて喜んでる阿父に何んこつけたら宜いだらう、○「サレバ、倅が畫行燈だから、阿父を大行燈こつけやう、□「ヤツ面白い、ナカ〳〵貴樣巧い事をいふ……」一同がワーツこ笑ひ出す、之れが太守采女正殿の耳に入るこ、

采「コレ〳〵、誰か居らぬか、富森〳〵、助「ハヽツ、淺「予は結構な事を耳にした、明日は士分以上惣登城を申付ける、酒肴の用意いたせ……」又もやお目出度だ、今度のは行燈ではあるまいこ、翌日になるこ、何れも士分以上は吉

羅を飾つて登城する、正面には采女正殿、悠然こ扣へ、其の兩側には諸老臣順を正して居流れる、皆「ハヽツ、御目出度う存じまする……」サア一統目出度い〳〵こ云つて酒は頂戴したものゝ、例に依つて大野九郎兵衞兩手を支き、伺ひ奉りまする、今日のお目出度は、……、淺「ウム、尤である、本日の目出度余の義にあらず、昨日予の次の室に於いて、大石賴母を大行燈、倅内藏之助を畫行燈こ申したものがある……」一同之れを聞くこ、□「オヤ〳〵、又行燈だ、今度の行燈はお手討かも知れぬ……」皆々色を失つて居る、淺「内藏之助を畫行燈こはヨクつけた、ノオ賴母、願くば此の行燈に一生涯、燈火をつけたくないものぢや……」流石は淺野家中興の名將采女正長重公だ、云ふた言葉に違ひがなかつた、内藏之助が生涯畫行燈で暮したら、淺野の家に何の騷動もなかつたが、畫行燈に燈火をつけ

ねばならぬ時節が後に來た、夫れは兎に角、殿樣迄が此の有樣であるから、後には内藏之助の惡口をするものもなくなつた、ナゼ内藏之助が俄にボンヤリ〻なつたであらうか、夫れを知つて居るものは、池田伊豫守、淺野采女正、及び養父の大石賴母ばかりであつた、内藏之助は舊主池田伊豫守殿に教訓しられて以來、ワザ〻智惠を隱して愚者を眞似たのであつた、處が時なるかな、内藏之助年二十一才に當つて、晝行燈に火を點す時節が來た……〻いふのは他でもない、德川幕府では慶安の由井正雪の亂以來、江戸の浪人取締を嚴重にする、夫れ〻同時に、余り澤山の門人を持つて居る武術家又は軍學者には、悉く目をつけ、擧動を探つて居た、處が此處に江戸小石川白山御殿下に、甲州浪人で山鹿流の軍學者山鹿甚五左衞門、號は素行〻いふ大學者があつた、門人ばかりが一万人あつた〻いふから大した勢ひ、其の門人の中には大名もあれば旗本もある、或日の事將軍家王子へお成りの節、本鄕五丁目の前田加賀守の門前に差し

かゝつた、スルト柴縮緬に白く抜いた梅鉢の定紋ついた幔幕を張りつめ、盛り砂、敷砂をして、馳走の水が汲んである、將軍家の考へでは、予の通行の爲めの馳走であらう〻思つて居られた、夫れゆへ翌日前田加賀守が登城の際、其の禮を仰しやつた、此の時前田加賀守が、何う仕りまして〻云つて置けば何事もなかつたが、正直にも、イヤアレは山鹿甚五左衞門先生を迎へる當日でございましたと述べた、將軍家の考へでは、高が山鹿の一浪士を、百万石の前田家で迎へるのに、アレ丈けの事をするとは、万一由井民部之助正雪の二の舞ではあるまいか〻不審を打たれて、松平左近將監を以つて、山鹿の屋敷をダン〳〵〻取り調べて見るに、著はした書物が二册出た、一つは山鹿經濟錄〻云つて、之れは天下の經濟を書いたものであるから、之れに對しての咎めはなかつたが今一つ山鹿軍用記〻いふ本が出た、之れは攻城守備の秘密を書いたもので、何處の城は此の口から攻めると一夜に落ちる、又此處から攻めて來た時は、此處

に之れ丈けの防備をすれば大丈夫こいふやうな事が十分取調べて書いてある、外の城ばかりなら大した咎めもないのであつたが、多くは將軍の座處、千代田城が一夜のうちに落ちる事を詳しく認めてあつた、之れが不審の第一点、其處で月番老中役宅へ呼出し、ダン〳〵取調べたが、相手は天下の大學者、當時幕府抱への大學者林 道春 先生すら、山鹿甚五左衛門には一目も二目も置いたこいふ位いの人物、其の上甲州流の軍學に秀でゝ居るのだから、速かに申開きをしたが、併し天下の役人こして、甚五左衛門の申す條が尤で、取調べた役人が不行屆だこいふ譯には參らぬから、取調べ中、淺野采女正長重に預けるこいふ沙汰になつて、山鹿素行先生は、鐵砲洲輕子橋の淺野家屋敷へ預がつた、然るに山鹿の門人は一万人以上あつて、多くが旗本や、血氣盛んの諸浪人であるから承知しない、○一先生は罪なくして流罪同樣、淺野の屋敷へお預けこなつた朝夕如何暮して居られるであらう、弟子こして此の儘傍觀座視するに忍びず」

こあつて、近々に多勢が淺野の屋敷へ乘り込み、山鹿先生を奪ひ取り、何處かへ落して、先生の身を安泰にしやうこいふ噂が專ら聞へる、此の噂を聞くこ、淺野采女正殿は心配一通りでない、長一万一山鹿を江戸へ置いて、門人共に奪はれては、五万三千石の家名に關はるのみならず、恥辱此の上もない、又本家へ對し申譯もなく、必竟手薄の江戸屋敷へ置いては油斷がならぬ、之れは一つ本國播州赤穗へ護送して置けば、其の憂いはあるまい」こ、考へたが、然し道具こ違ひ、人知れぬやうに、長持や菰包みこして國表へ送る譯にも行かず、相手は名高い山鹿甚五左衛門、余り拙い遣り方も出來ないから、月番老中へ屆け出て公然東海道なり、中仙道なりを通つて、赤穗まで送らねばならぬ……こ云つて之れも余程難かしい仕事、江戸屋敷に居てさへ、奪はんこする門人、万一途中に待ち受け奪い返さんも計り難し、何うかして無事に播州赤穗へ送らねばならぬこ、采女正長重公は思案の余り、老臣共を集めて協議こなつた。

六、畫行燈の功名大石の山鹿送り

計略は密なるを以つて良しこす、此の時老臣の筆頭大石賴母は、幸ひ江戸表に居たから、其の席に列して、膝を進め、賴「恐れながら今回の事件、御當家の存亡にも關する一大事こ存じまする、山鹿甚五左衞門を本國へ護送の役目、此の賴母今三年若かりせば、相違なく相勤むべきなれご、殘念なるかな近來老年に向ひ、殊に身体衰へ、昔しの元氣なく、甚だ心細く心得まする……、併し手前は心細く候へごも、手前の倅内藏之助良雄ならば屹度お役目仕終すべきかこ、憚りながら、愚察いたしまする」こ、自分の養子畫行燈の内藏之助を推擧した、子を見るは親に若かず、賴母は此の役目我子内藏之助を置いて、他に人なしこ高言した、スルト一同は顔見合せて、○「オヤ〳〵、賴母殿も何うかしたぜ、アノ養子の畫行燈でなければ、勤まらぬこは臭いもの身知らず、同じ大

行燈だから、アンな事を云つてるぜ、□「ウム、人にもよれ、畫行燈が何の役に立つものか……」口々に惡口する、スルト正面淺野采女正長重公は莞爾こして打ち肯首きながら、淺「賴母の意見、予の意に合へり、予も左樣に心得て居る、コレ内藏之助其方首尾よく勤まるかごうぢや、内「ハヽッ、恐れ入り奉りまする、養父の言葉こして、速に御受け仕り、山鹿殿を本國赤穗へ首尾よく送り届けるでござまいませう淺「ウム、ヨク申した、然らば汝へ申付ける、内「併し若年の私、只猫りにては迚も勤まり兼ねます、何卒相役一人仰せつけ下され度願ひ上げまする、淺「尤である、其方の目鑑に叶つたものあらば召連れよ、何者なりこも氣に入りしものを見立てよ、内「ハッ、有難き仕合せ……」内藏之助は立ち上つて、ズラリ滿座を見廻して居る、一同の若武士連中は、畫行燈の相役御免蒙むりたいこいふ氣があるから、見附けられないやうに、小さくなり

又は人の影に隱れるやうにして居る、處が内藏之助の目に止つたのが、近藤源四郎こ云つて、家中評判の臆病者だ、近藤源四郎こは誰も云はないで臆病源四郎〳〵こ呼んで居る男、ダカラ役に立たぬのは云ふ迄もなく、此の源四郎臆病こ名を取つて居るから、斯ういふ時は安心だ、乃公なぞは大丈夫、決して名指しされる氣遣いなしこ思つて居るから、平素より大きくなつてジロ〳〵四邊を見廻して居るこ、内藏之助はニッコこ笑つて、内「恐れながら私の相役は、ノ近藤源四郎を願ひ奉ります、源四郎之れを聞くこあつこ驚いて少さくなり、汗冷をタラ〳〵腋の下から流して、源「ナ、南無阿彌陀佛〳〵……」モウ人心地もなく念佛を唱へて居るこいふ厄介者だ、内藏之助が臆病者の近藤源四郎を見立てたのは、大いに理由がある、一人で澤山ではあるが、まだ自分は二十一才の年若、獨りで宜しいこ云へば慢ずるに當る、ダカリ相役を撰んだ、併し相役が余り切れ過ぎては困る、其處で毒にもならず藥にもならぬ臆病者の近藤源

四郎を撰んだのであつた、一同之れを聞くこ、吹出して笑つた、□「アハ……畫行燈こ臆病者、揃ひも揃つて、變な人間が撰み出されたものだ、之れは決して殿樣がお許しになる氣遣いはない」冷けり笑つてゐるこ采女正長重公は莞爾こして、淺「ウム、流石は内藏之助である、ヨク見出した、相役近藤源四郎差許すであらう……」一も二もなく許可こなつた、一同はマス〳〵驚く、迷惑に心得た6は近藤源四郎、悄々こして目通りを下つた、處が家中のものは、此度の大役を大石内藏之助こ近藤源四郎が引受けたから、平素は惡口を吐いて居ても、其處は交際こいふ事があるから、兩家へぞろ〳〵喜びに出かける、中には注意を與へるものもある、□「承はれば、山鹿の門人共は大勢徒黨を組み、先廻りいたして途中に要し、甚五左衞門を奪はんこいふ計略の由し、ヨク〳〵御用心專一かこ心得ます」之れを聞いて内藏之助驚くかこ思ひの外、平氣の平左、内「イヤ、其の儀は拙者も心得て居りますゆへ、御心配なく……」立派

な挨拶して客を返へす、一方近藤源四郎の方へ喜びに出かけるこ、之れは晝行燈こ違つてビク〳〵ものだ、色青ざめて生きた心地もない、歡びに來た若武士共は冗談半分、○「ヤア近藤氏、お氣の毒さま、晝行燈の助役こしてお越しの由、承はれば、甚五左衞門の門人一万人ある中で、五六百人は向ふ見ずの生命を構はぬ連中ばかし、夫れが昨夜モウ三々伍々江戸を出立して、東海道は箱根の手前に集まり、網乘物の來るのを待つて、腕づくで奪ひ取るの手段こやら、槍や鐵砲の用意迄して繰り出しましたぞ、マア〳〵此度の御出立は冥途の旅へお越しになるも同樣、何か御遺言でもあらば、朋友の好誼、我々が承はつて置き、御家内又は御子息の事は、御心配なく……、御子息は何處かへ里子にやり、御家内丈けは拙者お世話申すでござらう……」椰楡半分に述べるこ、臆病者ながら近藤源四郎愼こして、源「アイヤ、各々は此度拙者が承はりし役目につき、歡びにお越し下されしこ思ひの外、悔みを述べるこは以ての外、殊に怜は逐いやり家内を世話するなぞこは、人を馬鹿にした致方ではござらぬかッ、某は今回のお役目承つて以來、食事も咽喉に通らず、大心配の折柄でござる、然るに力をつけて下さるかこ思ひの外、椰楡に參らるゝこは何事でござる、速に引取つて貰ひたい、以ての外である……」ブツ〳〵怒りながらも口の中では南無阿彌陀佛〳〵こ、念佛を唱へて居るこいふ始末、源四郎は起つても座つても居られない、氣が氣でないから、其の夜大石の屋敷へ出かけ、源「此度は内藏之助殿のお見出しに預り、赤穗迄の差添へは、有難いやら、情けないやら、喜びやらお怨みやら、氣がムシヤクシヤいたして、顔がボーツこいたし、何が何やらサツパリ分りませぬ、就ては人數は何の位ひおつれになるか、萬事御相談をいたしたい、内「さやう、山鹿先生の網乘物は、道中宿々繼ぎ立て、人足の手になるもの、先づ拙者の鎧櫃一個、手槍一筋、其他侍分三四名、外仲間四五名もあれば夫れで宜しからう、又荷物は何れも繼ぎ立てゝ參

るもの、余り多人數を連れるこいふは穩かならぬ事こ存じます、源「ソヽ、夫れは大違ひ、拙者の承はる處に依るこ、甚五左衛門の門人はモウ五六百名も東海道を箱根邊りへ先廻りいたし、網乘物を奪ふこやら、夫れゆへ當方も夫れ相當の人數をお連れになつたら宜しからうこ存ずるが如何でございませう、四五百人は何うあつても……、内「アハ……、夫れは大仰な話し、先方に多人數待てばこて別段恐るゝ事はござらぬ、マッタ左樣の事をいたしては、當家の武威を落すに當り、却つて宜しくござらん、之れは小人數の方が至極穩當かこ心得ます、源「夫れでは東海道を避けて密に東山道を……、内「イヤ、夫れは宜しくない、矢張り道順こして東海道が宜しい、東山道は山又山で、頗る困難でござる、源「夫れは甚だ危い事でござらう、彼等の計略の裏をかいて中仙道を參るが名案かこ心得ます……」内藏之助は何うしても近藤源四郎のいふ事を聞き入れない、果ては源四郎泣聲こなつた、大石父子は思はず吹き出した、

内「必らず近藤、心得無用、今回は晝行燈に火を點けて、立派に晝行燈も役に立つものだこ、人々をアッこ驚かしてやる心底、又御身も臆病者こ冷けをり今回雪がねば相成るまい、ヨシヤ間違つた事があつても、御身一人が死ぬる譯ではない、内藏之助も倶に死ぬるの覺悟、ダガ近藤、人間之れしきの事に死んでは滿らない、御身の命は内藏之助が保証いたすから安心して、大船に乘つた心地でいるか宜い、之れも祿を頂く以上忠義の爲めてはないか」こ、懇々誡めさされて、近藤源四郎も漸やく安堵の胸を撫で下して引取つた、隨分厄介な代物もあるものだこ、跡で父子は笑つて居る、淺野家よりは老中へ届けを濟し、出立の仕度を整へ、内藏之助を頭に、士分漸やく七八人、夫れに仲間小者を加へて、總勢十五人、品川宿より差し廻された人足は荷物を擔ぎ、又は山鹿甚五左衛門の網乘物を擔ぎなごして、漸やく江戸を出立、品川へかゝつて來た、スルト近藤源四郎は自分の仲間平助に申付け、源「其方は、人數より一里でも半

里でも先へ駈け出し、何か道中に怪しいものが居たら、注進しろ……」平助は心得て、品川を駈け抜け、ドン〳〵先に出かけたが、暫らくして慌ただしく馳せ戻り、平「エ、旦那樣、此の先に鈴ケ森こいふ處刑場がございます、源「鈴ケ森は知つて居るわい、平「其の鈴ケ森に居て居ります、源「ナニが出て居る大勢が、……、平「イエ、獄門が二つ出て居ります、源「馬鹿者奴ッ、獄門なぞ幾等出て居ても搆はない、平「夫れでも旦那樣は憶病でいらつしやるから、獄門を見て目でもお眩しなさるこ、惡ふござ居ますから、チヨイこ注進いたしました、源「無禮者奴、貴樣迄が主人を憶病〳〵こ申すか、さやうのものを見届けろこいふのではない、山鹿の門人が途中に待伏せして居るか、居ないか、先廻りをして見届けろこ申すのだ、早く行け〳〵……」平助は又駈け出す、源四郎の了簡では、今に出るか今に出るかこ、薄氷を踏む思ひで、怖々人數の中に加はつて、オヅ〳〵出かける、出立の日は神奈川泊り、翌日が小田原泊り、

源四郎は考へた、源「之れ迄に出ないのは、大方箱根の難處で奪ふつもりであらう、スルト明日は大變だわい」こ、夜の目も祿々寢られぬ、時々内藏之助の方を見るこ、之れは快い心地さう、グウ〳〵高鼾で寢て居る、源「フヽム、年は行かないが、大膽なものだ……」こ、舌を巻いて感心して居る。

七、大敵と見て恐れず内藏之助山鹿の門人を諭す

當つて砕けよ、大石内藏之助は平氣の平左、翌朝は早立ちをして、箱根の難處も恙なく越して、三島の宿脇本陣、杉本屋三九郎方へ着いたのが夕景であつたスルト今迄顔の色をかへて青くなつて居た近藤源四郎、俄かに大威張り、肩で風切り、内藏之助の傍に寄り、源「サア内藏之助ごの、實に御若年ながら此度の御扱ひ、山鹿の弟子共ば、多人數こ云ひ觸らした東海道には影も見せず、却つて仲仙道に出張つて居る敵の計略の裏をかき、東海道へ出向かれしは御名智

ご申さうか、頼母ご の御目鏡にて御養子ごなされ、殊には殿様の御意に任せ、此の大役をお勤めなさるほごあつて、源四郎ボト〳〵恐れ入りました、モウ箱根ごいふ難處を通るのに、聊かの憂いもなければ、此の上は赤穂迄は寢て居ても宜い位ひ、今晩は手前も一食を共にいたし、酒も旨く飲めるごいふもの、漸やく蘇生の思ひをいたしました、」内「コレ〳〵源四郎ごの、夫れは大きに心得違ひ、昨日迄は無事に來るに相違ないご、拙者は存じたが、先づ明日が大事の日でござる、多くは三島沼津の三里の松並木、大方アノ邊に山鹿の門人が大勢出張つて居るであらうご拙者は存ずる、御身も酒でも飲むなら、此の世の酒の飲み納めに、ユル〳〵召上れ、拙者は今晩は眠るまい、次第に依らば此の宿へ夜襲をかけるかも知れまいご心得る……」之れを聞くご近藤源四郎青くなつて「エッ、夫れは大變、御身の仰しやる事は一々當つて居れば、事に依つたら今晩か明日かは出るかも知れん、さう聞いてば酒も咽喉へは通らん、南無阿彌陀佛〳〵……」再び源四郎青くなつて仕舞つた、其の夜内藏之助、名々に下知して、十分警戒する、其の上寢ずの番をさせたが、別に變つた事もなかつた、翌早朝三島の宿を出立、道中嚴重に固め、今しも三島ご沼津の間にかゝつて來た、此の間は三里、而も平地で松並木だ、往來の武士が五六人ある、何ごなく擧動が怪しい、内藏之助油斷ならじご、網乘物の側を離れず、八方に眼を配つて居る折しも、乘物より二三間脇を通つて居る大の武士があつた、手早く呼子の笛を取り出したご思ふご、兼ての相圖ご見へ、ピリ〳〵〳〵ご吹き鳴した、其の音が響き渡るご見る間に、彼方此方の樹蔭より、現はれ出でたる二百人ばかりの人數あり、バラリご上着を脱ぎ捨てるご下には玉襷、笠をはねるご後鉢巻凛々しき用意、或は手槍、又は追取刀、各自に得〳〵を閃かし、バラ〳〵ご往來を一文字に立ち切つた、之れを見るご人足は吃驚仰天、ヘウワ……、出たッ……」駕籠を投げ出し、八方へ散亂する、附添いの武士も之れを見ては驚か

ずに居られぬ、ワッと叫んで蜘蛛の子を散らすが如く逃げ失せる、乘物の右手に居た近藤源四郎、逃けはしないが、ベッタリ大地に座つて、動かざる事泰山の如くと云ひたいが、實は屹驚して腰を抜かし動かれない、口中には南無阿彌陀佛と繰り返して、生きた心地もない、此の時山鹿の門人共は、口々に聲高く門「ヤア〳〵、我々は山鹿甚五左衛門先生取立ての門人なり、先生は功あつて罪なし、然るに天下の役人却つて先生を疑ひ、之れを捕へ永らくの窮命させしのみならず、今回赤穗へ長のお預け、之れ則ち罪なくして記所の目も同然我々師弟の情捨て置くに忍びず、先に廻つて此の處に待ち伏せたり、イザ速かに山鹿先生を渡せばヨシ、萬一異議を申すに於ては、槍玉に揚げるが何うぢや、返答あれい」と、威し文句を並べ立て、ワイ〳〵犇き立ち、網乘物を十重二十重に取り巻いた、此の時乘物の左手に扣へし大石内藏之助良雄、少しも騒ぐ体もなく、一同をジロリ尻目にかけ、内「アイヤ方々、如何にも當乘物の中には、

山鹿先生が居らるゝに相違ない、拙者事は淺野采女正長重の家來大石内藏之助良雄と申すもの、主命に依つて赤穗まで御案内いたすの覺悟、然るに師弟の情を以つて、是非共先生を助けるこのお言葉、誠に師を思ふ御精神、感ずるの外はない、併し内藏之助良雄一言各々に申入れたい、依つて御人數のうち、頭立つたる方々を之れへお進み願ひたい……」と、泰然自若こして述べ立てるこ相手も血氣にはやる若武士連中ではあるが、軍學の門人で山鹿先生が平素仕込んだ丈けあつて、無謀な事はしない、内藏之助の言葉に應じ、年輩のもの四五名夫れへ立ち現はれた、夫れこ見るこ内藏之助は何に思ひけん、大小刀取つて夫れへ投け出し、無刀の儘で、大勢に向ひ、内「只今述べし通り、手前此度は山鹿先生を本國赤穗迄御送り申すべき役目を承はりしもの、然るに師を思ふのお考へより、斯の如く大勢死を決して、途中に要せられしは、平素先生が說かれし、仁義忠孝の道を御合点の方々こ存じ、誠に喜ばしく思ふ、夫れについて

拙者は敵對せざる証據こして、斯く兩刀を投げ出したれば、各々方も不穩の擧動を謹まれたい、まつた尊公方のお尋ねに對しては、一々答辨仕るに依つて何なりこもお尋ね下されたい、まつた拙者よりも一ツ二ツお尋ね申したき仔細のござる、○「其の尋ねこは何事でござる、内「外でもござらん、各々方は先生を奪つて何れへお隱しなさる思召なるや、○「サレば、如何やうなる深山幽谷たりこも、先生のお供いたし、一生涯先生を師こして仕へん覺悟でござる、内「ナニ深山幽谷、夫れは何處でござる、只今のお言葉に、先生罪なくして淺野采女正へ長の預けこは何事ぞ、我々命にかへて、山鹿先生を救ひ申すこ仰しやつたが、罪ないこは申されますまい、既に山鹿軍用記を以つて、罪あればこそ、其の書物を疑板いたすに先生も用意され、先生こして服罪せられ、此度赤穗へ護送いたすについても、先生は一言の異議なく、之れを以つて見れば、先生は自身に罪ありこ信じ、服罪せられたものこ存ずる、然るに早計にも前後の

辨へなく、勇に誇り血氣に任せて、先生を途中で泰ひ取り、深山幽谷へお供ひ申すこは何事でござる、普天の下卒土の濱、何れが天土にあらざるはなし、異國へ走らばいざ知らず、日本國内に身を容れる處が何處にござらう、假令如何なる難處嶮祖に隱るゝこも、天下將軍の威光が以つて、之れを捕うる事、袋の中の物を取るよりイこ易き事でござる、萬一左樣の事をなされては、先生の名を落し、却つて先生を滅ぼすものではござらぬか、寧ろ師弟の情を思ひ、先生に對面して、御心を慰めんこの思召ならば、役目を捨て、網乘物を開き、各々へ御對面の儀を拙者お取計らい申さん、但し先生を何うあつても連れ行くの事であらば、此の内藏之助を斬り、而して後に奪つて行かれよ、多勢に無勢、決して拙者手向ひは仕らん、此の義御返答 承 はりたい」こ、年は二十一才だが、辨舌滔々こして水の流るゝが如く、怯めず臆せず述べ立てた今迄奪ひ取らんこ、血氣に逸つて居た大勢も、内藏之助の勇あり義ある言葉に

荒膚挫がれ、返答もなく躊躇して居る折しも、乘物の中より聲高く、甚「アイヤ各々、師を思ふの心より、斯る場處に待ち受け、我を奪はんこするの心底、義に似て義にあらず、孝に似て孝にあらず、今大石殿の言葉の如く、却つて我が罪を增すに似たり、夫よりは何れも禮を厚くなし、内藏之助殿へ願ひ、生前の面會を乞はれてこそ然るべし……」云はれて門人一同、慌てゝ鉢卷を取るやら、肌を入れるやら、刀は鞘に納め、槍は向ふへ隱すこいふ大騷ぎ、惣代五六名夫れへ進み出で内藏之助に向つて、□「誠に恐れ入りました、血氣に逸る若武士を制し切れず、ツイ狼藉の擧動、赤面の到りでござる、何卒只今迄の無禮は許されたし、此の上は何うか師匠甚五左衛門先生に對面いたしたく、宜しく御取計い、伏して一同に代りお願ひ申す、内「イヤ、某の申條をお得心下されし段千万忝なし、只今乘物を開き、御對面おさせ申さん」こ、云ひつゝ内藏之助自身に網乘物の締りを取り、駕籠布團を大地に敷かせ、其の上へ甚五左

衛門を連れ出し、布團の上に座らせたが、内藏之助は油斷をしない、左りの手に甚五左衛門の帶を後より押へ、右手は懷中にさし入れ、前後へ心を配つた樣子、勇にして智あり、帶を押へたのは、老を助くるに似て、其の實取り逃さぬ用心、右手を懷中に入れたは、肌につけた菊一文字の懷劍の柄を握り、スハこ云つたら甚五左衛門を一刺しこいふ氣勢を示したのだ、何んしろ斯る大勢、中にほ無分別ものがないこも限らん、大勢がワーッこ騷ぎ立つに於ては、モ早や甚五左衛門でも制し切れないから、萬一の事あらば山鹿甚五左衛門を剃し殺し返へす刀で自分は切腹こいふ体度を示したのだ、甚五左衛門之れを見て、アッこ感心したが、左あらぬ体で、門人一同を見渡し、老眼に嬉し涙を溢へながら甚「アイヤ方々、今日の致し方誠に忝にあらず、併し勇に逸つて事を誤るは宜しくない、他にも心得違いのものなきにあらず、御身達より納得いたすやう說諭されたい、身共はモ早や生前の對面覺束なく思ひしに、内藏之助ごの、義あり

仁ある扱ひによつて、此處に對面いたせしは、甚五左衞門の喜び何者か之れに過るものあらんや、此の上は甚五左衞門、疑いの雲晴れ、目出度く歸國の時を待たれよ、サ、此の上は大石殿に厚く禮を述べ、早々引取られよ」と、懇ろに誡めを垂れる。

八、男でござる天野屋利兵衞の俠骨

大敵と見て恐れず、小敵と見て侮らず、大石内藏之助の扱ひには、何れも滿足したと見へ、老師甚五左衞門に對面して、何れも安堵の思ひをする、此の時内藏之助は、内「各々、先生の義につき、重ねて御心配無用、某播州へ到着の上は、我君に願ひ、先生のお側にあつて、朝夕の御用を勤め申さん」之れを聞くと門人惣代は大地に手を支へ、□「誠に其のお言葉を承はり、安堵仕つた、然らばお別れ申す……」名殘惜しげに師匠甚五左衞門に別れを告げる、甚五左衞門も一々言葉を返へし、乘物の中へ隱れる、門人は悄然としてぞろ〳〵立ち去る、此の時内藏之助は駕籠の脇に座つて居る近藤源四郎に向つて、内「近藤人は見かけによらぬものだ、同藩のものは、貴殿を臆病だの何のと申すものもあるが、サテ其の場に向へば武士は格別、拙者先刻より大勢相手に談判中、外のもの共は逃げ去る中に、尊公は泰然自若として動かず、實に沈勇こいふは近藤、御身の事だよ、源「ウーム、賞めて貰つては困る、實は逃げたくも拔けて仕舞つて、逃られないので、此の上何うなる事かと、口中に念佛唱へて居た次第、イヤ漸々安堵仕つた……」内藏之助内心に可笑さ忍んで、世の中には臆病なものもあるものだと笑つて居る、逃げた奴もボツ〳〵戻つて來る、一同を勵まし、其の場を出立、道中無事に、播州赤穗へ着いた、早速早打ちで江戸表へ沙汰に及ぶ、采女正より此の由月番老中へ屆け出る、首尾よく山鹿甚五左衞門を本國へ護送したと聞いた一藩の人々は、□「晝行燈にチヨイと火がついた、

賴母殿の眼鏡に違はず、内藏之助は天晴な人物だ」と、始めて其の眞價が分つた、翌年采女正在國、内藏之助と源四郎を召し太刀一口づゝ下賜、源四郎は大石内藏之助のお影で、器量を上げた、山鹿甚五左衞門は手厚き介抱を受け、赤穗城内に居たが、毎日退屈であるから、淺野の家臣に經學又は軍學を教へた、就中大石内藏之助には特に心を込めて指南をした、甚五左衞門は此處に居る事十年、公儀の不審晴れて、江戸に歸る時采女正長重侯に向つて、今迄の厚意を謝して後、甚五近頃大言に似たれごも、某閑居中、御家來方を薫陶いたし、一朝事ある節は、お役に立つべきものもござる、就中大石内藏之助殿は、今に驚天動地の仕事をしられるであらう、精々大切に召さるゝやう」と、云ひ置いて江戸に引揚げた、果せるかな、後年大石内藏之助首め夥多の大忠臣を出したのは、山鹿甚五左衞門の薫陶による處であつた、然るに其の後、淺野采女正長重公は隱居、嫡子又一郎が、二十三才で乘出し、内匠頭に任官して、長矩と名

乘り、五万三千石を相續する、大石内藏之助良雄も、養父賴母隱居、城代家老として一千五百石の家を繼いだ、先君采女正に似て、内匠頭長短公も仁君、所謂文武兩道の若大將である上、大器量人の大石内藏之助が側に居るから、五萬三千石は安泰、礎はイヨ〳〵搖ぎなく、領内泰平に治まつた、然るに内藏之助二十七才の時、又もや一つの功名を現はした、夫れは備中松山城受取りの一件であつたが、此の事は省く事にしやう、これで内藏之助は生涯四度の功名のうち三度迄は成し遂げた、畫行燈も斯うなつては役に立つ、以前は畫行燈と云つて惡口の異名であつたが、今は畫行燈と云へば、賞め言葉になつて來た、内藏之助は敢て自分の功に誇る事なく、專ら忠勤を勵んで居る、月日流るゝが如く、十年余りの星霜は夢の如く經つた、然るに元祿十四年三月に當つて、勅使下向、其の饗應役が淺野内匠頭長矩と豫州宇和郡吉田の城主三万石伊達左京亮宗春の兩人に當つた、吉良上野介は高家の筆頭であるから、有職古實に明るい

饗應役に對して指南をする事こなつた。此處で述べて置くが、吉良家は遠く新田氏より出で、上野介は吉良若狹守義冬の嫡男にして、寛永十八年九月二日江戸に生れ、幼名を三郎こ云つた、次で左近こ稱し、承應二年十三才で、幕府に出仕し、累進して從四位上に叙し、左近衞少將に任じ、三河國幡豆郡及び上野國甘樂郡の内にて、四千二百石を領し、祖先の地位に從つて、上野介義央こ稱した、初め鍛治橋内に屋敷を賜はり、後寛文三年改めて、吳服橋内に屋敷を賜はり、之れへ移つたが、元祿十五年三月二十六日お役儀御免の上、同年九月本所松阪町に引移つたのであつた、上野介は上杉播磨守綱勝の妹聟であつて、其の間に嫡男三郎を擧げた、綱勝二十七才の時、上野介の奸計に依つて毒殺しられた、世嗣がないから、上野介の嫡男三郎を以つて上杉家を嗣がせた、斯うする積りで、綱勝を毒殺したのだ、三郎は後に彈正大弼綱憲こ稱した、上野介は慾張つた老爺であるから、名を後見にかへて、上杉家より莫大の金銀財寶を取り込んだこいふから、意地の汚ない性質であつたに相違ない、綱憲には二人の子があつて、長子を民部大輔吉憲、次を春千代こ云つたが、上野介は晩年に子がなかつた爲め、孫の春千代を養子こした、之が則ち腰抜の左兵衞義周である夫れゆへ上杉家こ吉良こは重緣の間柄で、養子の左兵衞は義士が討入の時は十八才であつた、序に一言して置くが、上野介義央を義英こ云つて居るのは、誤りで、義央が本當だ、牛込築土の万昌院の墓標にも「吉良前上野介 源 義央朝臣」こ立派に刻んである、又養子の左兵衞義周を義固こ稱へて居るものもあるが、之れは周の字が固の字に似て居るから、誤り傳へたものであらう、夫れはサテ置き、上野介義央の指南が依估の沙汰があつた爲め、日頃勘癖強き淺野内匠頭は堪忍袋の緒を切らし、遂に松の廊下に於いて刃傷こなり、内匠頭は田村邸で切腹、本國赤穗城は明渡しこいふ事になつた、斯うなるこ城代家老大石内藏之助の責任はマス〳〵重くなる、内藏之助は眼先の事を考へるやうな武士

でなかつたから、遠大の志を抱いた、が誰にも其の志は最初明かさなかつた、淺野の家來は何れも悒々として、今にも城明渡しの使者が來次第、開戰になる事と專ら信じて居たのであつた、序に斷つて置くが、勅使饗應、殿中刃傷内匠頭切腹なぞといふ事は、既に人口に膾炙して居るから此處には省いて、イヨ〳〵之より義士の外傳に引移る事にしやう、然るに此處に泉州堺の町人に天野屋利兵衞といふ者があつた、諸家へ出入りをして居るうちに、淺野家の名代役を勤めると、書物に出て居る、名代役と云へば、大阪倉屋敷の大名は自分の地所といふものがない、皆出入りの町人にかつてゐるのだから、其の町人には扶持をやる、此の地主の事を名代役と稱へる、買つて買へない事は、大名の威光でやれば、出來ない事もないが、大阪へは決して諸大名は自分の地所といふものを持たなかつた、皆出入り町人から借りてゐたものだ、夫れゆへ淺野家倉屋敷の地所は天野屋利兵衞の所有であつたのだ、大石が討入の時に使つた忍び

道具十三品を、父子の中でも語らぬといふ誓いであつたに、此の天野屋利兵衞に明して賴んだのは、何を賴んでも他へ洩れる氣遣いなしと、見貫いたればこそ賴んだのであつた、ナンで内藏之助が利兵衞を男と見拔いたかといふと、虫干の節、雪紅の茶入が紛失した、夫れを利兵衞は、少しも知らなかつたが、自分が盜んで後取り落して毀しましたと、自分から罪を被つて死ぬ覺悟であつた、だん〳〵調べると、其の茶入は、内匠頭長矩公が手許に持つてゐられた、之れがナカ〳〵冗談事で出來るものではない、長く出入りをしてゐた屋敷の爲め、身代りとなつて死なうといふ利兵衞の決心、其の時に大石内藏之助が利兵衞の心の底を見拔いた、斯ういふ義の強い男である丈けに、人に賴まれて嫌と云はれず、受判をしたのが自分の身に祟つて、先方は身代限り、利兵衞も身代限りをしなければならなくなつた、利兵衞は愚痴一つ云はなかつた、何うも仕方がない、先方も迷惑を掛ける積りではなかつたらう、人間

良い事もあれば悪い事もある、空へ投げた球が落ちれば、其のはづみで上へ再び上る、途中に吊してあるものは、上りも下りもしない、茲で身上を一遍振つて仕舞つたら、又目を出す時が來るかも知れない、一番お金をかつてある淺野樣丈けへ行つてお暇乞をして來やう」と、利兵衞赤穗へ來て、内匠頭に目通りを願つた、平素愛顧の深い利兵衞、早速目通りを許された、内「ア、利兵衞か暫らくであつたの、久々で默前を一服所望いたす、利「折角ながら今日はお茶のお相手はなり兼ねます、利兵衞身代限りの不幸に陷りましてございます、内「ウム、夫れは大名に取れば家斷絕と同じ事ではないか、利「御意にございます、内「不憫な事ぢや、救ひ取らせたいけれごも、予の力には及ばんか、利「勿体至極もない事、御當家樣が借用金の御高頭、長年賦、御聞き届け下さらば、分産いたしませんでも相濟みませう、内「ウム、然らば當家の貸金長年賦、聞き濟み遣はす、シテ長年賦こは十ケ年か、利「今少々にございます、

内「二十ケ年か、利「今少々……、内「ウム、何年程であるか、云ふて見よ、利「何ふ三百年程……、内「コレ〳〵、夫れは余り長くはないか、利「御當家樣も代々、出入り町人天野屋も代々でございます、内「宜い〳〵聞き濟み取らせる、利「へ、ッ、有難き仕合せ、諸家樣へ參つて願ひますのに、御印が戴けませうか、内「料紙硯を持て……、ナニ苦しうない止めるな……、利兵衞其方の申す通り認め遣はす……」有難涙にくれた利兵衞が、利「差入申一札の事……、内「ウム……、利「其方義多分の借財につき、身代行き届き難き趣き不憫に存じ、當家貸金の義、向ふ三百年賦に聞濟遣はす處實正也、若し他家より彼是れ申出で候者之れあり候はゞ、我等罷り出て屹度引受け……、内「コレ〳〵利兵衞待て……、夫れは少しく文面が相違いたしはせぬか、利「エ、恐れ入りまする、内「宜い〳〵、待て取らせる、利兵衞日外予が持ち參つた茶入紛失いたしたこ思ひ違ひ、家來共切腹せんこいたせし折、其方が身代りに死して

くれる積りであつた、予はまだ忘れぬぞ……」之れが證だこいはぬばかり、有難き言葉を頂き、利兵衛は身代限りを免がれた。

九、松野河内守利兵衛の鉄石心に感ず

利兵衛は大喜び、他の借りのある諸候の處へ來て、利「淺野樣では斯樣でございます、御當家樣でも、此の例に倣ひまして、御猶豫を願ひます……、○「ウム、淺野家が三百年こあらば、當家は之れに後れたりこ云はれるも殘念、當家は三百五十年間聞濟遣はす……」負け嫌いは大名の氣質、之れが爲め、既に潰れんこした、天野屋の家は、淺野家の爲めに、助かつたから、利兵衛其の恩は忘れる日こてはない、時は元祿十四年三月十四日、殿中松の間の廊下で刃傷、淺野内匠頭家改易、即日切腹こ聞いた時に利兵衛は氣も狂はんばかり、利「お袖や、チヨイこ此處へ來な、女「ハイ……、利「大變な事が出來た、御恩を受

けた淺野のお殿樣は江戸で、御切腹、ア、此の前お金の御猶豫を願ふてお聞濟みになつた、アノ時がお顔の見納めであつた、人こして受けた恩を知らざれば人でなし、乃公は之から赤穗へ乘り込んで、城代大石樣のお差圖に從ひ、お城を枕に討死をするつもりだ、後に難儀がかゝるこいけないから、お前には此の離緣狀を渡して置く、サア之れを持つて一時里方へ歸つてくれ、愚圖〳〵云つてくれるな、乃公は人間の道を渡るから……、女「ハイ、シテ七之助は何ういふ事になりますか……、利「女の子は女につく、男の子は男につくのが天下の法だ、乃公がつれて行く、之れは仕力がない、乃公が死ねば、一緒に殺し、城の埋草にするか知れないが、夫れは諦めてくれ、今愚圖〳〵云つてる場合ではない、此處で人になるかならないか、受けた御恩は返へさなければならない、後に心を殘さず、何うか實家へ歸つてくれ……」大阪の町醫太田良齋の娘袖に離緣狀を持たせて歸し、具足櫃を脊負ひ、其の上へ俥をのせ、槍を小脇にかい

込み、播州赤穗豊田の庄刈屋の城へ駈けつけ、城代大石内藏之助良雄に面會して、籠城の列に加はりたしこ申込んだ、内藏之助は利兵衛の心をヨク知つて居るゆへ、「イヤ、殉死でもない、籠城でもない、改めて賴む事があるから、大阪へ歸つて居てくれ」こ、說いて利兵衛を返へし、程經つてから、「實は敵討について是々の品が入用ゆへ、内々造らへて吳れこ賴み込んだ、利兵衛は早速承知をしたが、旅へる品は天下禁制の物が多く、成丈け人の目につかない方が宜いから、實家へ歸したきり、まだお袖は迎へない、先づ此の品を造へ終つてから呼ばう、幾等夫婦の中でも、斯ういふものは迂濶に話の出來るものでないこ、一組出來るこ、菰へ包んで密こ江戸へ送り、又一組調へるこ、江戸へ廻し、宜い塩梅に知れずに居た、然るに其の頃の大阪奉行は、名代の松野河内守、江戸表に由井正雪、丸橋忠彌等の慶安の謀叛があつて間のない折柄、萬一己れの預かつて居る大阪に謀叛人なごあつてはならんこ、ヨク下々の役人に云

ひつけて、諸處へ目を配つて居るこ、此の頃利兵衛の家で、人目を忍んで旅へて居るものがある、怪しいこ見て取つたから、忽ち踏ん込んで、利兵衛を召捕り、今日でいふ家宅捜索を行つた、天野屋の家から出たのが、鶴嘴の蠟燭立てが五十挺、之れが云ひ譯が立たん、單に鶴嘴の蠟燭立てこ云へば、何んでもないやうに聞へるが、鶴の嘴が上を向いて居る、夫れへ蠟燭を立てる、其の先が尖らしてあつて、唐紙或は壁、襖、何處へでもブツリ〳〵こ立てる事が出來る其の代り立てた後へ穴が明く、之れは亂世に使ふ品で、座敷のうちで用ゆべき品でない、戰爭でなければ押込みに使ふもの、河内守之れを見て、河「サテは大阪にも謀叛人あり、利兵衛は其の加擔人であらう」こ、見做したから云ひ譯立たず、悴七之助は宿守和助、此の者に預け、夫から利兵衛の調べにかゝつたが、打てご叩けご、責むれご云はない、カク拷問にかゝつたのは、丸橋忠彌こ天野屋利兵衛の二人丈け、跡は牢問ひなごゝいふものもあるが、大同小異、拷

間こ云へば一度かゝるこ、身体が傷れて仕舞ふ、一日なり二日なり、獄中に於いて手當をして夫から又掛る、二日も三日も續けて、拷問にかけるものではない、一說には上下の歯を抜くこいふが、眞逆抜きもすまいが、藥を以つて緩めて、物を噛む事の出來ぬやうにして仕舞ふのは、舌を噛んで死なれては、肝心の証人を失ふから、其の邊の注意こ見へる、利兵衛は拷問の爲め、身体を傷めたが、目は凹み、頬は痩け、髪蓬々こして色青ざめ、突き出された利兵衛、又一月ほご獄中に下けて手當をした、大きに良くなつたので、今日は又呼出され今日は死ぬ思ひをするのかこ、白洲の砂利の上へ身体を投け出すやうに座つた正面の唐紙を開き現はれた名奉行松野河内守は、河「泉州堺の家持町人天野屋利兵衛頭を上げろ、先達より度々取調ぶれご、同じ事のみ申し居るが、今日は夫れでは下げん、如何なるものに頼まれ、穩かならぬ品を捗へたか、又送りし先は何れなるか、有体に申せ、何うぢや、利「毎度のお調べ恐れ入りましたが

利兵衛は此の國に生れて、國恩の有離い事はヨク存じて居りますゆへ、頼まれても悪人なごに加擔は仕りません、深き義理合のある間柄ゆへ、據なく頼まれましたが、御公儀樣御迷惑になりまずやうな事なれば、決して引受けはいたしません、些細の事に用ひます事ゆへ、今暫らくお調べの義はお捨置きを願ひます、河「利兵衛、まだ云はぬか、夫れでは何日もこ變らぬ答へ、如何なる義理合から頼まれたか知らぬが、今日迄、責苦を堪へて云はんで居つたら、モウ頼まれた者へ義理は濟んだではないか、其方が、大阪役人の調べで、白狀いたさんなれは、據なく江戸役人の手に廻し、江戸役人の調べで、其方が白狀いたしたこあらば、此の奉行河内一人のみならず、大阪役人一統の手落ちになる強ち奉行こ其方こ敵同志ではあるまい、天下の爲ゆへ、打ちも叩きもせんが、天下の爲めだ、誰に頼まれたこ一言云つてくれぬか、利「恐れ入りました、例ものの打たれ叩かれるより、今日の其の

お優さしいお言葉は、利兵衛に取つて、身を切られるやうでございます、申上げたうは存じますが、此の事ばかりは……、河「まだ云はぬか、利兵衛其方はご強情なものはない、宿守を呼べ……、申付けた七之助を同道いたしたか、利兵衛の側へやれ……」家主が連れて來た當年七才の七之助、宿「サア、父さんの側へ行くんだ、彼處にお前の父さんが居る……」バタ〳〵と駈けよる七之助、七「お父さん〳〵、何うして縛られたの……、利「オヽ七之助か、お前此の怖い處へ何うして來た、七「坊は宿守の叔父さんが、お父さんに遇はしてやること云つて、連れて來てくれたの、利「阿父さん何うして縛られたの、此の父さんは、惡い事をしたから縛られたのだ、柔順しくして居るんだぞ、惡戯をすること縛られるぞ、七「父さん、少しでも宜いから抱いておくれよ、利「ウーム久し振りだ、抱いてもやりたいが、乃公は此の通り縛られて居るから抱く事は出來ぬ、我慢をして歸つてくれ、河「コレ利兵衛の繩を緩めてやれ、利

兵衛七之助を抱いてやれ、利「ハイ、之れは〳〵、お慈悲でございます、有難う存じます……サアお役人樣が繩を解いて下さつた、抱いてやるから之れへ來い……」七之助は喜んで阿父の膝へ上つで來る、利兵衛は確かこ抱きしめ何うせ白狀する氣はない、云はなければ責め殺されるは知れた事、之れが我子の顏の見納めかこ、髮蓬々たる頰を我子の頰へ當て、七「コレ、七之助、ヨク宿守の伯父さんの云ふ事を聞くのだぞ、七「阿父さん、一人で宿守の叔父さんの處に居るのは淋しいから、一緒に歸つておくれ 利「乃公は歸れないから一人で歸れ、ダヾをいふではないぞ、河「利兵衛、我子は可愛からうの、利「ハイ……、河「我子が可愛ければナゼ賴まれた人の名をいはぬ、一言誰に賴まれたこ云へば、今日歸宅を許してやるぞ、利「申し上げたうは存じますが、其の事ばかりは……、河「まだ云はぬか、今日は其方は責めぬが、其方の代りに夫れなる倅七之助……コレ七之助を打て、役「ハッ」こ、答へて役人が七之

助の手を取り、利兵衞の膝より引下した、七「アレ阿父さん……」泣き出すを白洲の砂利の上へ引据へ、河「利兵衞、強く打てば一命にかゝはる、現在悴か目の前で打ち殺されるを見ても、其方は云はぬか、利「ナゝ泣くな、泣くぢやァない、悪い阿父を持つたが諦めてくれ……おゝお役人様へ申上げます、我子に、天野屋利兵衞は男でございます」と、唇を噛んで下を向いた、河「ウーム、打つな、夫れなる小兒は宿守へ下げへ……」之れを打つやうな愚な奉行ではない、モウ殺されても云はぬ利兵衞の覺悟がヨク分つた。

我子は可愛うございます、親こして子の可愛ないものはございませんが、我子の可愛いは私の事、他人様には義理こいふ二字がございます、其の他人様の義理の爲には、親子の情合も捨てなければなりまれん、打つなこ殺すなこ御自由

一〇、疎忽累を爲し不破數右衞門の退身

町人なれごも義心鐵石の如き天野屋利兵衞は、眞の男であつた、松野河内守も密に其の精神に感じて居たが、何かして白狀させたいこ思つて居る處へ、利兵衞の妻お袖が、良人利兵衞は謀叛人でないこいふ証人こして出頭した、河内守は呼び込んで、河「ア、利兵衞の妻袖こは其方か、袖「ハイ、左樣にございます、實家へ歸つて居りました處、利兵衞が謀叛人の御嫌疑にて、御召捕りになつたこ承はり、吃驚いたしました、利兵衞に限つて、聞くも恐ろしい謀叛人なぞ、ナンでそんな事に加擔いたしませう、妾が何よりの証人でございます、河「ウム、良人が謀叛人でないこいふ証據は……、袖「さやうでございます、妾が嫁に參りまして、翌朝利兵衞が、サア一緒に神棚を拜むから之れへ列べこ云ひますから、利兵衞こ列びますこ、私のいふ通りお前も云つて拜め、天下泰

平〳〵、國家安穩〳〵、家内安全〳〵……、妾も其の通り拜みますこ、今度は夫婦仲よく暮して居るのを、御先祖樣へ御覽に入れるのが何よりだから、御佛壇の前に行けこ申します、利兵衞こ一處に佛壇の前に行きますこ、鈴を鳴らして、利兵衞が妾の手をキユーこ握つて、ニツコリ笑ひましたから、又妾も利兵衞さんの手をキユーこ握り返してニツコリ笑ひました……、河「コレ〳〵、夫れは余計であるぞ、袖「夫から毎晩神樣の前に手を合せて天下泰平を祈りまず、其の利兵衞が何んで謀叛人に加擔いたしませう、夫れが何よりの証據でございます、河「フム、一理なきにしもあらず、神佛に手を合せて、天下泰平を祈るものが謀叛人に加擔をせぬこいふ……シテ利兵衞が常に出入りいたす屋敷ば何れこ何れである、袖「ハイ、永井樣、青山樣、仙石樣……、河「其のうちに尤も親しく出入りいたす屋敷は何處ぢや、袖「夫れは、去年三月十四日、江戸の御殿中で御刃傷を遊ばして、お家が潰れました淺野樣には一番御恩を受け

て……、利「ア、コレ〳〵袖、何んで手前は此處へ來た、離緣をしたら他人ぢや、何をベラ〳〵口喋りに來た、歸れ〳〵、たものを、歸れこは何事、利兵衞に口を利かさぬやういたせ、役「ハッ……、河「何處であるこ……、袖「ハイ、淺野樣でございます、天野屋の家が潰れる處を助けて頂いだから、其の御恩を忘れては濟まぬ〳〵こ、平素から申して居りました、殿樣が御切腹を遊ばし、お家が潰れました時は、利兵衞は氣狂ひのやうに騷いで、妾に離緣狀をやるから實家へ行け、私は之から赤穗へ行つて、町人ながら籠城をする、男の子は男につくのが天下の法、夫れゆへ七之助は連れて行く、乃公が死ぬ時には小供こ一處に死ぬるこ申して聞きませんので、妾に離緣狀を呉れ、具足櫃の上に七之助をのせ、槍を擔いで、赤穗へ出かけました、利「默れッ、袖「イエ、申上げなければなりませんが、籠城を……、利「默れ〳〵、默れこいふにナゼ口喋る……、袖「ハイ、河「ナンぢや、利兵衞が

具足櫃を脊負ひ、槍を持つて赤穂へ參り、籠城すると申したこな、白痴た事を云へ、夫れは武士のいだす事ぢや、利兵衞は町人だぞ、前後不揃の事を申すな狂女の申す事は取り上げにはならん、退げて……、ちませへ……」危い事であつたこ利兵衞は喜び、スゴ〳〵退る、獄中でも斯る大罪人は多くの人こ一處には入れて置かん、今日でいふ獨房、從前こても同じこと、大罪人は一人〳〵別々にしてある、サレば利「兵衞何處に何事があるやら一向分らぬ、處が或日の事牢番二人聲高く、牢「何うだい、江戸の赤穂浪人の仇討こいふは剛い事をやつたものだな、○「ウム、武士の龜鑑だな、四十六人だこ……、牢「さうか、ヨクも巧く遣つたものだな……」高調子の番人の聲が利兵衞の耳に入るこ、利「一寸願ひます、牢「ナンダ、利「エ、お掛り樣へ申上げたい事がございます、お呼出しを願ひたう存じます」此の事を河内守に申上げるこ、早速呼出しこなつた、河「利兵衞、何事ぢや、利「長らくお手數を

かけまして恐れ入ります、實は赤穂浪人大石内藏之助に賴まれて、詫らへましてございます……」モウ白狀しても大丈夫、仇討の首尾よく濟んだ後だからこ思つて白狀した、松野河内守も既に此の程利兵衞の妻袖が具足櫃を脊負ひ、槍を抱い込み赤穂へ籠城こ聞いた時に、サテは賴人は淺野浪人か、サレば天下に騒動を引起す事はない、恣じ調べ立てゝ、忠義のもの丶邪魔をするは、武士の情けでないこ思つて、默れ〳〵利兵衞は町人ぢやぞ、狂女のいふ事は取り上げではない〳〵こ、其の儘退けて後は調べもしない、役を持つものは此の手加減がナカ〳〵難かしい、赤穂浪士が首尾よく本懷を達したのも、松野河内守の情けにもあり、又天野屋利兵衞が義俠にも依つたのであつた、之れは四十七士こ苦勞艱難ば別に變りがない、却つて町人ながら天晴外の忠義もの、四十七士の人物、義士外傳のうち、天野屋利兵衞義俠の一條を此處に述べて置く、之れは後の話であるが、大石内藏之助は胸中に決する處があるから、最初籠城こ觸

れ出した、スルト最先に破れ具足を繼ひ、槍を提げて駈けつけて來たのが不破數右衞門正種であつた、此の人先祖は不破將監と云つて、淺野彈正大弼長政に仕へて、朝鮮征伐以來勳功のあつた家柄であつた、其の後分家采女正長重に仕へて、淺野家譜代の臣であつた、數右衞門正種は、內匠頭長矩公自慢の家來で百五十石を頂き、御近習馬廻役を兼ね勤めて、文武兩道の達人であつたが、性來到つて粗忽もの、折々間違ひを引惹す、矢張り其の間違ひの爲め、元祿の九年十一月既に手討にもなるべき處を、仁心厚き內匠頭長矩公、表向は手討にした体にして、永の暇を與へた、其の節長矩公、內「汝に、長の暇は遣はせごも主從の緣は切らんぞ、何れへ參るとも予が家來と申して差支へない……」と、いふ有難い言葉、君々たれば臣々たり、僅か五萬三千石の小身でありながら、自慢の家來が澤山あつた、サテ不破數右衞門は江戶築地鐵砲洲の屋敷を後にして、先づ奧州地を見物する考へでドン〳〵乘り込んで來たのが、奧州白石、片

倉小十郎の城下であつた、二三日逗留、其處を立つて行くうち、圖らず道に踏み迷ひ、大きな野原へ迷ひ込んだ、數右衞門仕方がないから、名主傳右衞門こいふを尋ねて參り、一泊を願つた、主人傳右衞門快よく承知をして數右衞門を泊めた、處が其の夜圖らずも强盜が押し入り、傳右衞門首め家內の命が危い處を、泊り合せた不破數右衞門政種、躍り出して、强盜を相手に 悉く退治て仕舞つた、駒塚村の傳右衞門は、之れが爲め不破數右衞門を神の如く尊敬する、然るに此の事早くも白石の城主片倉小十郎の耳に入り、早速名主同道にて、數右衞門に目通り許すこの沙汰が下つた、數右衞門身の面目こ快く承諾、名主傳右衞門附添ひ、目通りをする、非常なるお賞めの言葉を賜はつて其の日は退つた、此の事仙臺綱村公の耳に入るこ、之れ又目通りさせよこの命令、今度は片倉小十郎同道にて不破數右衞門仙臺に乘り込み、綱村公に目通りする、綱村公數右衞門を一見して、綱ヿア、立派である、其方予の家來こ試合をいたし、力

量前腕を見せてくれよ……」數右衞門之には弱つた、負ければ恥辱、勝てば意恨を受けねばならぬ、之れは勝負は御免蒙むらう、斯う考へて、數「決して卑怯で申上げる譯ではございませぬが、私は天下恐らく誰にも負けぬ積りでござる、依つて御當家の豪傑ご試合ひ、拙者が勝つに極つて居りますゆへ、却つて怨みを買ふが心苦しうござる、依つて試合の義は御免蒙むり、數右衞門聊か腕に覺へのある處を御覽に入れ奉り度、何卒米一俵ご碁盤拜借願ひ上げます……」大言を拂つたので伊達家の臣等一統は愼ごしにが、綱村公は却つて無遠慮の大言氣に入り、何んな事をするかご、云ふがまゝに、碁盤ご、米俵を夫れへ運ばせる、數「何卒、硯ご筆、衝立を御拜借願ひまする」ソコで筆墨、衝立を左を數右衞門の前に持ち出す、不破數右衞門は突つ立ち上り、一俵の米をチヨイご摘んで碁盤の上にのせ、左手をムツご延して、盤の下へ入れるご、ウンご持ち上げた、此の腕力には綱村公首め一同アツご驚いた、數右衞門は平氣だ、

右の手に筆を執り、墨汁を十分に含ませて置いて、衝立へ以つて行つて「君の情けは天下泰平」ご、書き終り、筆を夫れへ置き、碁盤を元の如くに置いて、飛び退り頭を下げた、別に顏色も變らず、平然自若ごして居る、綱村公首め一同は思はず手を打つて、ヤンヤご賞め立てる、綱「數右衞門近う……」お賞めの言葉を賜つた上、盃頂戴、綱「其方、予に奉公いたす氣はないか、數「有難き仰せには候へごも、其の儀は平に御斷り申上げます、私は播州赤穗淺野内匠頭の家來でございまして、武術修業の爲め、諸國漫遊をいたし居るものにございますれば、御奉公は叶いませねご、願はくば御當家御備ひになし下されど、偏へに願ひ奉りまする」一寸聞くご備人も奉公人も同じやうであるが、一季半期が傭人、奉公ごは公へ奉る、命迄差上げるが奉公、二人の主のあるべき道理がない、そこで數右衞門は斯う云つたのであつた、飽迄數右衞門の腕前に惚れ込んだ綱村公は、綱「苦しうない、備ひで宜いぞ……」遂に數右衞

門傭こして三百石を頂く身の上こなつた。

一一、主家の變事を聞き數右衞門江戸乘込み

人生意氣に感ず、不破數右衞門政種は、綱村公の切なる志に感じて、一時身を委せる事になつたが、淺野家を立ち退く時、内匠頭長矩公の情け深き言葉があるから、一季半期の傭人こいふ約束で奉公したのだ、然るに共の翌年伊達陸奥守綱村公が、江戸參勤で出府こなつた、或日のこと、綱村公不意に築地鐵砲洲の淺野家へお客こいふ觸れ込み、突然の事だから淺野家では驚いた、五十四郡の旗頭こ云はれ、六十余万石の大守、然も之れ迄余り親しく交際した事のない伊達綱村公が五万三千石の淺野家へお客こは何事であらうこ、出迎へて奥へ案内、鄭重に優待す、其の接待役は淺野の家來で、之れこいふ屈強のものばかり、代る〳〵出て挨拶、仙臺候も感心した、綱「ァ、ァ、淺野は小身五万三千

石であるが、立派な家來ばかり持つて居るこ感心をした、此の時酒宴央ば、綱村公は、内匠頭に向つて、綱「アイヤ内匠頭、御身の元家來不破數右衞門政種は、まだ御當家こは主從の緣が切れて居ないこの事、願くば緣を切つて、伊達家へ所望いたしたい……」こ、申込み、逐一の物語り、相手は六十余万石の大守、其の大守が手を支へての懇望であるから、内「宜しうござる、お渡し申さう」承知の旨を答へた、綱村公殊の外滿足、驗て新錢座の上屋敷へ歸り、直ちに早打を以つて、本國へ、不破數右衞門は淺野家より貰ひ受けたこいふ事を知らせた、綱村公は余程數右衞門が氣に入つて居るこ見へる、片倉小十郎より此の事を不破數右衞門に申し聞けるこ、數「ナンこ仰しやる、然らば拙者は淺野家こ緣を切り、更めて御當家へ貰ひ受けたこ仰しやるか……以ての外、其の意を得ざるこござる、直ちに有難くお受けいたすべき筈に候へごも、暫らくの御猶豫に預りたい……」こ、云つて置いて、自

分の屋敷へ立ち歸り、早速身仕度して、奥州仙臺を後に、晝夜兼行、ドン〳〵江戸表に引返し、築地鐵砲洲の淺野家上屋敷へ歩つて來て、淺野家の江戸留守居役堀部彌兵衞金丸の長屋を訪ねた、彌兵衞は直ちに奥へ通す、數「之れは、御老体には、毎日お變りもなく……、彌「ヤア不破か、承はれば足下伊達家へ奉公の由、蔭ながら金丸喜んで居る、數「默らつしやい、今日は數右衞門主君お目通りいたし度、罷り越した、早速取次いで貰いたい」大分鼻息が荒い、彌兵衞金丸沈着き拂つて、彌「夫れはいかんよ不破、表向き永のお暇の足下ではないか、又當家ではお手討ちになつた事になつて居る位いではないか、數「默れ老爺、淺野内匠頭長矩の家來が、淺野内匠頭殿にお目通りがしたいと申すに、何がいかんのだ、理を非にまげても、今日ばかりは主君お目通りをいたさねばならぬ、以前お手討ちになつた体になつて居らうが居るまいが、そんな事は何うでも宜い、愚圖〳〵いふ事はない、取次げ……」口では喧ましく怒鳴つて居るが、兩眼には涙一杯たゝへ、切齒をして、膝の上に置いた兩の握り拳をブル〳〵震はせて居るから、彌兵衞金丸も不破の氣象はヨク知つて居る、仕方がないから此の由を主君に取次ひだ、スルト内匠頭は、内「ナニ、不破數右衞門が見へたか、苦しうない目通り許す」氣に入りの數右衞門早速目通りが許された、内「オヽ、數右衞門であるか、ヨク見へた、其方此度伊達家へ奉公の由、予は蔭ながら喜んで居るぞ」云はれて數右衞門はパラ〳〵と兩眼より涙を流しながら、不「ト、主君樣……、アヽ、情けない、身の粗忽こは申しながら、お別れ申す其の時に、何處へ參るも主從の緣は必らず切らぬぞこそ、ナゼ仰せに相成りましたか、其の御一言が忘れられず、聊かの功に依り、仙臺家へ奉公せよこの仰せに候へごも、御奉公御斷り申上げ、身は一季半期の奉公人同樣傭こして居りまする、承はれば此度主從の緣を絶ち、仙臺家へ改めて奉公せよこは、情けなき御言葉、夫れほご要らぬ家來なら、ナゼ主從の緣は切らぬぞ

よこ仰しやいました、夫れに何ぞや只今こなり仙臺家へ奉公せよ、主從の緣を切るぞよこはお情けないお言葉、數右衞門只今此の處に於いて切腹仕りまする、御免……」涙ながらに双肌脫ぎかける、之れを見られた長矩公は、長ヤヨ待て數右衞門、予が惡かつた、許せッ、而し一旦伊達家へ遣はした其方、取り返へすこ申しなば伊達家に於いて承知すまい、予は其方こ飽迄主從の緣は切らぬぞ、安心いたせ……」之れを聞くこ數右衞門、ハッこ飛び退り、今迄挨拶もしなかつた奴が、數「ハヽッ、主君には何日もながら、麗はしき御尊顏を拜し奉り、數右衞門身に取り如何ばかりか恐悅至極に存じ奉ります……」こ、恨みが先きで挨拶が後になつた、數右衞門は盃を頂き、嬉涙に暮れて堀部彌兵衞の許へ退る、此方は內匠頭殿、片岡源吾衞門を以つて、仙臺家に遣はし、源「實は、不破數右衞門義、斯樣〳〵の次第、彼の切なる心に免じ、何卒今迄通り、雇にて御召使ひ下されたし」こ、申込む、綱村公も之れを聞くこ

綱「ア、感ずべきは數右衞門ぢや、如何にも雇にて苦しからず、永く當家に雇はるゝやう、其方から申してくれい……」承知の返答、源吾右衞門喜んで立ち歸り、此の由を內匠頭殿に言上する、數右衞門大安心、十日ばかりの間伊達家の許しを得て、淺野家へ參り、內匠頭長矩公の側に居て相手をする、日限が來たから、惜しき別れを告げ、仙臺へ引取つたが只何こなく主君に別れが辛ひ、今迄こ違つて何んこなく氣がフワ〳〵沈着かない、虫が知らすか後にぞ思ひ合はされる、然るに數右衞門仙臺に歸り、專ら忠勤を盡して居るうち、翌年こなつた、三月十四日、松の廊下で刃傷、淺野家斷絕こいふ報知が仙臺へ聞へた、國家老片倉小十郎は不破數右衞門を呼出して、小「數右衞門、其方驚くでないぞ、ヨックク氣を沈着けて我が申す事を聞けよ、數「ハヽッ、改まつて御家老、何事にござりまする、不破數口衞門山が崩れても乙れまで驚いた事はございません……、小「ウム、然し今回の事件は、其方

の身に取つては山が崩れたよりもまだ霹靂の如く胸にこたへるであらう……

驚くでないぞ」と、念を押して置いて、少「實は斯様〳〵であつた」と、遂一江戸よりの報知を申聞けると、數右衛門は吃驚仰天、不「エッ……」背後へ引くり返らんばかりであつたが、何に思ひけん、スックと立ち上り、不「御免……」一聲を残して、タッ〳〵と、屋敷へ駈け戻ら、有り合せの諸道具は、家來に紀念配けこしてやり、有金百三十五兩を懐中へ捻じ込み、屋敷を飛び出し、駒塚村の名主源右衛門の宅へ立ち寄り、暇乞いをして夜を日につぎ大急ぎ、三日三晩で江戸表へついた、隨分足の早い人、直樣築地鐵砲洲の淺野家の屋敷へ來て見ると今までありし繁昌に引がへ、屋敷はピタリ閉つて、青竹十文字、ハッと驚き、ハラ〳〵涙を流しながらダン〳〵近處で樣子を聞くと、堀部彌兵衛金丸が、兩國矢の倉に借家住居と聞くより、數右衛門忽ち顔色か、へて不「ウーム、人間こいふものは分らぬものだ、今日迄堀部彌兵衛金丸ばかりは

忠義無二と思ひしに、サテは表面ばかりの忠義であつたか、主家の大事を他處に見て、町宅を搆へて居るとは不埒な奴、一番此の足で彌兵衛の處へ乘り込み奴の返答次第で生けては置かぬ、白髪首を打ち落して呉れん、ウーム……」粗忽者だから、ドン〳〵兩國矢の倉へ來て、尋ねると直に分つた、不「許せッ……」彌兵衛はノコ〳〵出て來て、彌「オ、不破か、不破か、不「ヤイ不忠老爺、貴樣淺野のお家盛んの時代は、大忠臣の大黒柱のと云はれ、主君の愛臣であつたが、一朝淺野のお家が滅亡すると、其の御恩を忘却したな、主家斷絶いたせば赤穗城へ立て籠り、城を枕に討死するか、但しは主君の御無念を晴すか、二つに一つ、城代大石殿とも談合して、大いにやるであらうと思つて居たに、ナンダ暢氣らしく浪宅を搆へて、ノホンンと澄して居やァがる、夫れで亡くなられた御主君に濟むと思ふが、アノ此處な不忠老爺奴ッ、彌「オイ〳〵不破靜にしろ、其處に心のつかぬ彌兵衛ではないが、此度の大變につき、諸方よりの見舞

の人々も數あるに、淺野の家來は狙狙して、本國赤穗へ引取つたこと、世間の人に笑はれる、サスレば主君の御恥辱、夫れゆへ婿の安兵衛を國にやり、乃公は後に只一人、見舞を受けた其の上で、乘り込むも遲くはないこと、萬事は養子安兵衛に申含めて歸國させたのだ、必らず主恩を忘れた譯ではないぞ、不「ウーム、さうであつたか、夫れでは今迄の怨み言葉は取り消す、彌「取り消すもないものだ、來る早々大きい聲で怒鳴り散らして、其の態は何んぢや、鉢卷を取らぬか、物騷千万な奴だ、襷を外せよ……」數右衛門今迄の元氣は何處へやら、慌て、鉢卷取るやら襷を外すやら、宅へ入つて、バラ〳〵こ流を淚し、ピダリ疊に手を支いて、不「ホ、堀部老人、ヨジ、實に思へば殘念でござる、彌「尤だ、貴樣はお側に居なかつたからまだしもだが、乃公の心になつて見てくれ、ムム、無念とも殘念とも、コ、此の胸がハリ裂ける思ひだわい」こ、二人は暫らく淚に暮れる、金丸より有りし事情を

詳しく話す度に、數右衛門は切齒をして、或は眼を怒らし、又は男泣きに泣き沈む、不「シ、シテ〳〵老人、我君が田村屋敷で御切腹の時、何か御遺言はなかつたか……、彌「サレば、片岡源吾右衛門お別れに罷り出でたる際、城代內藏之助に殘念であること、いふてくれいこ、只之れ丈けの御遺言、奧方御舍弟にはこお尋ね申せし時、無いぞ〳〵こ仰せありしこのこと、不「ロ、老人、オ、主君樣御心中お察し申す……、嘸御無念におわしつらん、ゴ、御辭世はなかつたか、彌「片岡源吾右衛門を以つて、內藏之助迄屆けよこ、紀念こして御肉通しの短刀、マタ下されし短册には。

風さそう花よりもまたわれはなほ
春の名殘をいかにこやせむ

こお書きなされた短册も共に大石氏に紀念こいたして下された、不「ナ、何んこ仰しやる、風さそふ花よりもまた我はなほ、春の名殘をいかにこやせむ……

御尤でござる、御尤でござる……思へば憎い吉良上野介、今に見よ〳〵御亡君の御無念晴し、やわか討たいで置くべきか」と、流石豪氣の數右衞門も或は怒り又は嘆き、其の夜一夜は金丸と二人で、主君有りし時の物語りをして泣き明した、本來淺野家の菩提所は、愛宕下万年山青松寺であつたが青松寺の住職が分らず屋であつて、膽玉の小さい坊主、内匠頭の遺骸を當寺に納めて、後日寺社奉行から咎めでもあつてはいけないと、思つて、謝絶したから、本家淺野式部少輔殿の指圖で、高輪泉岳寺へ納める事になつた、泉岳寺の住職は玉道と云つて、以前は武家、快よく承知をした、之れを聞いた數右衞門は、自分赤穗へ參る達だから、泉岳寺へ立ち寄るといふ心得で、堀部彌兵衞に別れ、高輪泉岳寺へ歩つて來て、冷光院殿墓前に來り、石の上に座つて、生ける人に物いふ如く、一時ばかりも涙に暮れた、驗て本堂に立ち歸り、所持の金子一百兩を死道金として納め、ドン〳〵江戸を立つて東海遣を次第に上り、歩つて來たのが鳴海の宿であつた。

二、數右衞門金に窮し恩賜の羽織を脫ぐ

武士は無慾を貴ぶが、余り慾のないのも困つたもの、不破數右衞門生來慾のない人、道中で乞食なぞに出合ふと、不「ア、可哀想だ、氣の毒だ」と、云つて持つて居る金子を摑み出して呉れてやる、夫れが爲め鳴海の三好屋といふ宿に泊つた時は、一文なし夫れでも呑氣に酒を飲み、肴の注文をして、平氣でやり其の夜はユル〳〵寢んだ、翌朝になると、ポン〳〵と手を鳴らす、女中が二階へ上つて來る、不「ア、勘定を持つて來い、女「畏まりました……」女中が勘定書を出す、不「ハヽア、一分と二百か、女「さやうで……、不「チヨイと主人を呼べ、女「アノ御勘定なら妾が頂きます、二階の事は妾が受持つて居ります、不「イヤ、其方では分らん、亭主を呼べ……」暫らくすると三好屋

の亭主七兵衛、羽織袴で出て來る、三「へイ、今日は結構なお天氣でございます、手前が主人の三好屋七兵衛でございます、不「ウム、貴樣が亭主か、乃公は勘定をしやうと思ふが……、七「へイ、有難う存じます、不「幾等になる……、七「只今、勘定書を上げました通り、一分と二百でございます、不「ウムさうか、酒肴を貰つて居るが……、七「へエ、夫れも皆いれまして、一分と二百でございます……、不「大層安いの、七「へイ、精々勉強いたして居りまず、不「安いが主人、チヨイと相談がある、七「ナンでございますか、不「實は少し不足のぢや、七「へエ……、少々不足位いは承知いたします、半端の二百も足らぬのでございますか、不「イヤ二百位ひ足らぬのなら、足らぬこはいはん、七「夫れでは幾等位ひ、不「一分と二百足らぬのぢや、七「夫れでは足らないのではない、全で無いのではございませぬか、不「アハ……早く云へばそんなものぢや、七「遲く云つても同じ事で……、不「實は亭主

乃公は播州赤穗の浪人不破數右衞門といふものぢや、國へ一旦歸つて、直に江戸へ戻るのぢや、其の時必らず金子は拂ふ、只借せこはいはぬ、乃公の着て居る此の黒縮緬、竹に雀の五ツ紋、或る御方より拜領の羽織、此品を其方に預けて置くから、一兩と一分二百借してくれ、一分二百は宿錢に拂ひ、殘る一兩を持つて、赤穗に參りたい、何うかさういふ事にしてくれぬか、賴む、七「マア一寸お待ちなさい、成程之れは結構なお羽織ですが、ヲト今では質の値段が下つて居りますから……夫ぢやァ斯うしませう、一兩丈けお借し申しませう、其のうちから一分二百引いて置きます、數「夫れでは乃公が困る、マアさう云はんで、モウ一分二百丈け借してくれ、七「折角でございますが、夫れはお斷り申します、不「何うも貴樣は情けを知らぬ奴だ、旅は憂いもの情いものこはヨク云つたものだ、貴樣道中した事がないこと見へるな、何うか一分二百借してくれ、七「お氣の毒でございますがお斷り申します」二人が爭つて居る處へ、

入づて来たのが倅の七三郎だ、　倅「お父さんお待ちなさい……、　七「ナンダ貴様ば悴でないか、悴「ハイ、其のお金は私がお借し申しませう、　七「ナニ、貴様が借す……、貴様の金こいふのが何處にある、　七「夫れは貴公から貰つた小遣錢を貯めて置いたのがございます、マア阿父さんは下へ降りていらつしやい、何事も後で分ります……」無理に老爺を下へ降して置いて、七三郎は夫れへ手を支へ、　七「サテお武家様、承はれば貴君様は、淺野家の御浪人こやら、阿父が誠に分らず屋で、定めしお腹も立ちませうが、御勘辨を願ひます、不「イヤ〳〵、お前の阿父か悪いのぢやアない、出來ないものを無理から賴む乃公が悪いのぢや、而しお前が金をかしてくれるこいふのか、　七「ハイ、赤穗迄お越しになるのに一兩では御酒も召上る樣子、道中も長うございますから、二兩こ一分二百御用立て申します、一分二百は勘定にお拂ひなさつて、殘る二兩で、赤穗迄お越し遊ばしませ、　不「イヤ何うも、其方は阿父こは違ふ、話せる奴だ、　七「夫からお武家樣、お羽織はいりませんから、お持ち下さいまし、不「イヤ、夫れはいかん、さういふ事は天理にかける、何うか之れ丈けは頂かつて置いてくれ……」無理から羽織を置いて、二兩一分二百を借り受け、不「其方は退つて阿父を寄越してくれ、　七「畏まりました」倅の七三郎が下りる、入り代つて七兵衞が上つて來る、　不「コリヤ客に對して立つて物をいふ奴があるか、勘定拂つてやる受取をしろ、其方の悴に恩はあるが、貴樣に恩はない、拂勘定へば立派なお客だ、チト貴樣悴を見倣へ……」亭主は宜い面の皮だ、不破數右衞門は勘定拂つて、七三郎に別れを告げ、鳴海の宿を立つて、ドン〳〵東海道を急いだ、處が相變らず無邪氣、無慾こきてゐるから、大阪へ着いた時はモウ一文なし、又元の木阿彌こなつた、不「エ、何うなもるのか、仕方がない、赤穗迄一つ喰はずに行つてやらう」ドン〳〵急ぐ、腹が減るこ水をのむ、果ては腹の中がダブ〳〵音がする、漸やく播州地に入り込んだ、足に任

せて歩いて居るこ日が暮れかゝる、向ふから一人の武士がくる様子、一人は路傍の松の枝に提灯をブラ下げて小便をやつて居る、一人は小諮を諮いながらブラ〳〵來る様予、數右衞門は眺めて、不「アイヤ暫らく……、武「何者だ、不「拙者は旅の武士であるが、途中金錢を使ひなくして困難、突然斯様な事を申出で甚だ氣の毒であるが、武士は柄先三寸の情誼こいふ事がある、少々金子を拜借いたしたい……」最う數右衞門も堪らなくなつたこ見へる、スルト相手の武士は、武「宜しい、少しく待たつしやい……」錢繩にさした青錢二百其處にポンこ投げ出した、不「ヤイ無禮者奴、投錢をするこは何事だ、乃公は乞食ではないぞ、武「默れ、途中見ず知らずの某に金の無心をいふからには乞食も同然だ、投げたが何うした、不「默れ、無禮の一言、柄先三寸の好誼を以つて借してくれこ賴んで居るのぢや、夫れに何ぞや、投錢をするこは不都合な奴、投げた錢ならモ早や要らぬ、勝負の上で借りて兄せる、武「無禮な一言

サア來い」双方刀の柄に手をかけ、ジロ〳〵こつめよせる、處へドシ〳〵後れ馳せに歩つてきた武士が、○「ヤア、何事だ、小野寺氏……」云ひつゝ差出す提灯の光りに、互いに見合す顔こ顔、不「オヽ、御身は神崎與五郎殿では……神「ヤア、貴殿は不破氏か、不「之れは變つた處でお目にかゝつた、シテ此の方は……、神「サレバ、小野寺幸右衞門殿だ……」同じ淺野の家來でありながら、ナゼ顔を知らぬかこいふこ、幸右衞門は京都留守居役、小野寺十内の悴、一說には弟だこいふが、倅が事實らしい、まだ部屋住であつたから、名前は聞いて居ても、顔は見た事がない、何方も知らぬ同志、此處で互いに粗忽を詫て、數右衞門は今迄の事を物語る、神「フム、夫れは誠に氣の毒……」神崎與五郎十兩の金を出して渡す、此の時數右衞門は、不「神崎、何處へ行かつしやる、神「サレバ、内藏之助殿の内命に依つて、京都迄罷り越す、用濟の上は赤穗に於いてお目にかゝらん……」此處で双方は別れを告げ、二人は京都

へ、不破數右衞門は赤穗へさして急いだ、處が話は二つに別れ、此方播州赤穗に於いて、村松喜兵衞に預けられた數右衞門の女房お國、或日の事父の喜兵衞に向つて、國「父上、何卒妾に永のお暇を願ひます、喜「何處へ參る積りぢや國「ハイ、良人數右衞門は奥州仙臺に居りますが、お家盛んの頃は數右衞門でなくてはならぬやうに持て囃されて、良人の粗忽、出火の時水戸の御家來を斬つた爲め、表面はお手討ち、其の實お暇こはなり居れど、主從の緣は決して切らぬこ殿樣の仰せ、夫れに此度のお家の大變、今に良人の參りませぬは、之れ迄表面ばかりの忠義を飾り、其の實は君の御恩を忘れて居るのではあるまいか、妾は子數太郎を連れ、奥州に參り、良人の心を確めて、モシ君の御恩を忘れたこいふ事ならば、女ながらも村松喜兵衞の娘でございます、良人の一命を申受け、悴を制して妾も共に自害をいたしまする、喜「ウム、出來した、流石は村松喜兵衞の娘、三太夫の妹ぢや、併し小供を連れて、遠く離れた奥州迄、一人

でやるは心許ない、何うしたものであらう」こ、話しの處へ入つて來たのは多年村松家に仕へた下郎の兵助、兵「旦那樣、お孃樣のお供は私に仰せつけて下さいまするやうお願ひ申します、喜「オ、兵助か、其方ならば大丈夫である、萬事は貴樣に賴むであらう、兵「委細承知いたしました、多年受けた御恩報じ善は急げ、サ、御用意遊ばしませ……」此處でお國は身仕度して、六才になる數太郎を連れて、父喜兵衞に別れ兄三太夫に別れ、住み馴れし赤穗を後に、差して行くのが奥州地、今しも歩つて來たのが、播州明石の大倉谷、兵「お國樣、マア一服して行きませう、國「兵助や、此の近くに宿屋はないかへ、兵「モウ少し行くこ旅籠がございますから、御心配なさいますな……」云ひつゝ松の根方に腰打ちかけ、ジロ〳〵お國を尻目にかけて脂下り、物凄い笑ひを浮べて居るのであつた。

一三、數右衛門の誠忠芝居小屋の騒動

寸善尺魔ことはヨク云つたもの、下郎の兵助はニヤリこ笑つて、「お國樣、私は一つ貴女にお願ひがございます、」「ナニ願ひこはへ……、」「外ぢやァございませんが、貴女の慕ふ不破數右衛門樣は城を枕に討死こか、お主の仇を討たうこか、そんな立派な心を持つた男こは思つていらつしやるが、主家斷絶の後は仙臺家に仕へて、外に增す花が出來てる事は分つてるぢやァございませんか、數右衛門樣の事は思ひ切り、私のいふ事をウンこ云つて、之から直に京都へ行き、二人で世帶を持ちまして、此の坊ちやんは、二人の仲に出來た子こして暮さうぢやァございませんか、さうなつたら私が朝から晩迄一生懸命に稼いで、貴女は手一つ濡らさないで、事が濟むやうこ云つておくんなさい……」思ひがけなき兵助の言葉に、お國は屹驚、「お國樣、私

コレ兵助、お前こした事が、何を云やる、ソリヤ本性で云ふではあるまい、」「兵ィヤ、本性でございます、」「ナニ本性こな、女こ侮り無禮の一言、不破數右衛門政種の妻であるぞ、重ねて無禮な事を云やるこ、其の儘には捨て置かぬぞ、」「兵ナンダ〳〵、何うしたこ、乃公も男だ、云ひ出したからには後へは引かねへ、手込めにしても諾こ云はさにやならぬ……」云ひつゝ、スックこ立ち上る、此の体見るこ數太郎は、「兵ヤイ、兵助の爺や何をする……」飛びつくを、「兵エイ面倒な……」片足揚げてポンこ向ふへ蹴返へすこ、僅か六才の數太郎、アッこ云つて倒れる、お國は見るより驚いて、我子に心の引かれる途端、情け容赦もあらばこそ、煩惱の犬の兵助は、お國を其處に引倒し、アワヤこいふ危機一髪の其の折から、背後より兵助の首筋ムッこ押へ、肩に擔いで岩石落し、ヤッこ云ひつゝ投げつける、アッこ驚き兵助が、起き上らうこする處を、サッこ手許に飛び込み、拔く手も見せず斬り下げる、キヤッ・悲

鳴の聲が此の世の別れ、兵助は血烟立つて相果てた、血振ひした件の武士は、

武「ア、女、危い處であつたのう、何處ぞ怪我でもしはせぬか、國「ハイ、有難うございます……」云ひつゝ見合す顏と顏、國「ヤヽツ、貴公は旦那樣ではございませぬか、武「オヽ、其女は國か……」思ひがけない夫婦の對面、お國は嬉涙にくれ、國表の次第を物語る、數右衛門も之れ迄の逐一を述べ、共に數太郎の介抱する、此の時お國は、國「旦那樣、貴郎は赤穗においでになりましたら、必定お城を枕に討死でございませう、父や兄にお逢ひの節は、宜しうお傳へ下さいまし」と、云ひつゝ引抜懷劍を、數太郎の咽喉元目かけてブスーツ、キヤツ、返へす刀に我れと我が咽喉笛さしてブスリ突き通す、數右衛門はアッと仰天して、取り縋り、不「コン國、血迷ふたか、何故の最後ぢや……」云はれてお國は苦しき息をつきながら、國「お城を枕に討死なるか、但しは御主君の仇討か、二つに一つは知れたこと、女子供があつては手足纏ひ

夫れゆへ倅こ妾は一足お先に、冥途の魁をして三途の川で、良人のお越しをお待ち受け申しまする、何うか立派なお働きを願ひまする」と、いふ聲さへも秋の枯野の虫の息、次第〳〵に細り行き、哀れ果敢なく息絶へた、途端背後に聲あつて、○「貴君は不破の旦那樣では……」不「エッ……何者ぢや、○「六太夫奴でございます……」此の六太夫こいふは、以前村松喜兵衞の屋敷に奉公して居だ男、今は大倉谷で獵師を渡世こして、世を送つて居る、女の悲鳴に駈けつけて木蔭に隱れ、殘らず樣子を聞いて居たのだ、不「オヽ、六太夫であつたか、六「ハイ、何かの樣子は殘らずアレで聞きました、奥樣こ坊樣の亡骸は、今宵のうちに私が、懇ろにお取り片付をいたしまする、御心配なくおいでなされませ、不「忝けない、然らば萬事其方に賴む……」お國の所持金は六太夫に與へ、跡を賴んで政種ほごの豪傑も、涙ながらに大倉谷を離れ、赤穗に乘り込み、舅村松喜兵衞に對面して、大倉谷の物語をいたし、夫より內藏之助

にも對面する、其の上萬事の相談、尤も數右衞門はお金配當の席に列なる事は出來ない、表向き永の暇こなつて居るのであるから、數右衞門は表面顏は出さない、最後の評定城明け渡し、內藏之助は京都へ閑居、數右衞門は同志こ共に東海道を下り、鳴海の宿で質受けして十分の禮をいたし、同仲仙道より江戸に着いた、江戸についてから氣がついた數右衞門、不「ヤア、之れは飛んだ事をした、乃公はまだ仙臺侯へ身の暇を願つて居ない、不意に默つて飛び出したまゝだ」ヨク永い間氣がつかなかつたものだ、改めて仙臺屋敷へ出で、事條を話して身の暇を願ひ、夫より兩國矢の倉堀部彌兵衞金丸の許に居る事こなつた、然るに時は元祿十五年月は二月の中旬頃、數右衞門は一人瓢然こ矢の倉を出て、ブラ〳〵通りかゝつたのは、木挽町の上村座こいふ芝居小屋の表であつた、處が不破數右衞門、生れて芝居なぞは見た事がない、心の中で、不「ナンダろ、大層旗が建つてるぞ、ハヽア稻荷樣の祭か何かあるこ見へる」役者の幟

を見て、稻荷樣の祭禮こ間違へた、スルト此方に立つて居た二人の男の話、

△「何うです善六さん、貴郎今度の芝居の中幕を御覽なさつたかい、善「イヽヤまだ見ませんよ、何をやつてるので……、△「東山桐華の舞臺こいふのだ善「へエー……何んな事をやりますので……、△「サア、去年三月松の廊下で、淺野內匠頭樣が吉良樣へ刃傷しましたらう、善「成程〳〵、△「アノ喧嘩場を一幕やるんで……、之れが非常な大評判、大變な觀客があるさうで……」こ、話して居るを聞いた不破數右衞門は、不「コリヤ町人、町「ヘイ不「東山桐華の舞臺こいふのは、之から何の方向をさして居るのだ、町「方向なんてありません、芝居でいたしますので……、不「ハヽア、乃公は芝居こいふものを見た事がない、幾等あれば見られるのか、町「夫れは、贅澤に限りはございませんが、安く見やうこ思へば、幾等でも安く見られます、不「何うだ、持合せが三兩しかないが……、町「三兩も二兩も要りませんよ、不「何

處から通つて宜いのぢや、町「向方が木戸でございますから、彼方で札を買つてお通りなさいまし、不「夫れは千万忝けない……」芝居小屋の木戸口に歩つて來て、不「賴まう……」木戸番驚いて飛び出し、□「入らつしやいまし、不「乃公は芝居を觀るぞ、□「何うぞ御覽下さいまし、不「持合せが三兩しかない、□「何う仕りまして、何うか此方へ……」若い奴が數右衞門を中棧敷へ案内する、不「ハヽア、大層人が來て居るものだ、□「貴君、御酒でも召上りますか、お辨當でも差上げませうか、不「默れ、酒を飲みに參つた譯ではないぞ、辨當食いに來たのではない、芝居を見に參つたのぢや、欲しい時は手を響かせる、强請賣をするな……、コリヤ〳〵、東山榮華の舞臺こは之から何の方向を差してゐるのだ、○「夫れは芝居でいたしますので、不「見受ける樣子、正面に幔幕が張りつめてある、アノ幕張の内は何方のお扣への席である、○「アレは貴君、俳優の引幕でございます、アノ幕を明けますと、今度開いた

處が東山榮華の舞臺でございます、不「さう聞いては日障りになる早速取りの けろ、○「暫らくお待ち下さいまし……」待つてゐる間に拍子木が鳴る、開いた處が東山榮華の舞臺、元祿名優山中平九郎、紺地に桐の大紋は、さも憎々しき裝扮、暫らくすると、花道の登場口、出幕のうちに聲あつて、△「小栗判官殿お登り……」いぶ聲につれ、出て來たのは之れも元祿の名優、其の名は鳴海四郎三郎、眞實小栗判官なら、立波千鳥の紋處、其の實淺野内匠頭長矩の裃へだから、空色に白く抜いた、丸の内に交ひ鷹の羽、其の大紋の袖かき合せて出て來る樣子、不破は見るより兩手をついて頭を下げ、不「へヽツ……」見物は見て驚いた、□「オヤ〳〵、アノ武士、役者にお辭義をしたのではない、丸に鷹の羽でもあるのだらう……」數右衞門役者にお辭義をしてゐるよ、大方借金の喰ひちがい、云はずと知れた主君の紋、内匠頭御登城の有樣を今目前に見る如くであるから、忠義に凝つた數右衞門、思はず知らず辭儀をして、不「主君

には、何時もながら麗はしき御尊顔を拜し、數右衛門身に取り、如何ばかりか恐悦至極に存じ奉る……」見物はイヨ〳〵驚く、□「ハヽア、アリヤ役者だなソツクリだよ、其の儘だ、○「ヘーン、役者、一向見た事のない役者だが、大方上方役者だらう、ナカ〳〵情の移る處が感心だよ……」知らぬ見物は役者だと思つてゐる、其のうち本舞臺にかゝる、一つ二つの答詞があつて、甲「お身や本性か……、乙「本性なら何んとする……」大原實然の小さ刀に手がかゝる持つてゐる中啓で……、殿中だぞと胸を打つ、口惜しさ忍ぶ其の樣子、眞に迫つて數右衛門、不「ゴヽ、御尤でござる、今暫らくが大事の場處お腹の立つも尤ぢやが、お家を想ひ、身を思ひ、家來を不憫と思召し、成る勘忍は誰もする、成らぬ勘忍するが眞實の勘忍でござる、ナヽ、何卒御辛抱あれ……」云つてゐる舞臺の役者はそんな事は知らないから、狂言通り喧嘩が始まつた、刃傷だ、喧嘩だといふ聲に、數右衛門は吃驚、不「ヤア、我君が勘忍袋の緒を切られた上

からは、不破數右衛門政種がいたす」と、云ひさま舞臺の上へ躍り上り、突然山中平九郎の首筋摑んで手許へズル〳〵〳〵、不「覺悟しろ、我君に手向ふ不埒者奴ッ……」握り固めた拳固でボカリ〳〵、平「アイタ……、人殺し、不「ヤア武士たる者が人殺しとは卑怯な奴、イデ一拳の下に抛り殺してくれん、覺悟しろ……、平「アイタ……、役者でござ……る、芝居でござ……る、お助け……」悲鳴を上げてゐる、處へ若い奴が一人飛んで來て、若「ト、殿樣、芝居でございます、之れは役者でございます……、不「ナニイ……、ウーム……振り上げた拳固、見ると山中平九郎の曼が、コロリと落ちた、不破數右衛門は吃驚して、不「アッ失策つた、遣り過ぎた、ウーム、我身ながら愛想が盡きる余り上手に遣られたので、思はず知らず實が入り、飛んだ馬鹿な事をした、許してくれ、此處に金子が三兩ある、何うか一杯飲んで呉れ、平「アイタ……、何うぞお助け下さいまし……」不破數右衛門三兩の金を投げ出し、極りか悪い

から、不「濟んが、裏口よりコッソリ出してくれ」こ、這々の体で裏から出て行く、

一四、疎忽者竹林唯七燕子花の異名

此の時棧敷の隅に頭巾目深に見てゐたのは、同じ淺野の浪人で、吉田忠左衞門であつた、忠「ア、ア、之れが本當であれば、お家も忘れ身も忘れ、不斷愛せし、家來も忘れ、刃傷するが當然、思へば憎い吉良上野」こ、身を震はせて見てゐる折しも、不意に舞臺の上へ駈け上つたものがある、誰かこ見れば不破數右衞門の粗忽屋だから、忠「ア、、平素からの慌て者困つた奴ぢや」こ、大心配、處が心ない奴は笑ふて居るが、心のあるものは同じ思ひ、〽何うですいアリヤ淺野樣の御家來ぢや、去年三月十四日、松の廊下の刃傷から、淺野樣のお家は斷絶、身は流浪、其の芝居を今目の前に見たのだもの、アノ位いの事は

ありさうなものぢや、ア、お氣の毒な事だ」こ、涙を流す人もある、吉田忠左衞門も後ろぐらく、コソ〳〵こ表に飛び出し、腋の下の汗を拭き〳〵、兩國矢の倉堀部彌兵衞の浪宅へ駈けつけて見るこ、今日は彌兵衞は不在で、火鉢の側に不破數右衞門、ボンヤリこして、苦虫を一人で噛み潰したやうな顏して扣へてゐる、忠「不破氏、不「ヤア吉田氏か、忠「吉田氏かぢやアない、今日の芝居小屋の有樣はアリヤ何事ぢや、不「ウームから見て居つた、不「口惜しいぢやアないか吉田氏、忠「棧敷の隅に御身は御承知か、者は之から直に乘り込んで、生首引抜き主君の仇……、忠「ア、コレ、聲が高い、壁に耳ある世の中ぢや、貴樣一人の仇ではないぞ、遠く離れた山科では、敵の間者を謀る爲め、ワザこ放埒色町通ひをして居らるゝ大石殿の計略が、今に當つて我々が本懷遂げるも目の邊り、然るに斯ういふ事が萬一吉良家へ聞へた時は、まだ淺野浪人は仇討つ所存あるに相違なしこ、用心堅固にされたら何

うする、大事の前の小事ぢや、御身は一人他へ出る事ならぬ」と、副頭梁吉田忠左衛門の云ひ渡し、不破數右衛門一人歩きを禁足されて仕舞つたが、時は來たづて元祿十五年極月十四日、首尾よく四十七士に加はり、吉良邸に推參、卍字巴と降る雪中に奮鬪決戰、遂に本懷を達して、其の名を万世に殘したのは、痛快極まる次第であつた、之れは後の話であるが、不破數右衛門が禁足され、一人歩きが出來なくなると、數右衛門毎日内にばかりゐて退屈で堪らない、相棒の武林唯七を呼よせて、不「武林、貴樣は何うか乃公の附添になつて、チト表へ連れて行つてくれよ、唯「アハ……、貴樣禁足の身の上だな、ヨシ大丈夫だ、乃公が連れて行つてやらう……」武林唯七が堀部安兵衛を說きつけて連れ出し、ブラ〳〵歩き廻る、大体此の武林唯七も大分慌て者だが、淺野家若武士のうちでは、堀部安兵衛に續いての武術の達人と呼ばれてゐる男だが、余り大心ではなかつた、内匠頭長矩公とは乳兄弟であるから、其の寵愛は一方ならず

唯七ば朝夕内匠頭の側に仕へ、忠勤を抽でる傍ら、武術の稽古、又は學問の相手をして、主君長矩公の機嫌を取つてゐた、處が或日の事本家霞ヶ關松平安藝守の姫君に櫻姫といふのがある、此の櫻姫の誕生日に當るので、分家の淺野内匠頭を招き、内祝いがあつた、内匠頭長矩侯は武林唯七首め、大高源吾、片岡源吾右衛門、神崎與五郎、堀部安兵衛なぞを供につれて、霞ヶ關の淺野本家へ出かけた、供の面々は供待部屋に扣へる、長矩公は案内に連れて、奥殿へ入り休息、其のうちに酒宴となつた、酒酣となると、琴を彈ずる、皷を打つ、大暢氣となつた、櫻姫も夫れへ挨拶に出る、安藝守殿の愛妾八重垣といふが、夫れへ出て琴を彈ずる、夫れが濟むと一同に挨拶して次室へ下つた、後は又無禮講といふので、賑はしい騷ぎとなつた、供の面々も供待部屋で馳走になる、折柄安藝守の家來酒宴の次の間に手を支へ、○「恐れながら御前樣に申上げます安「何事ぢや、家「只今赤阪溜池に道場を開いてゐる和久半太夫がお目通りを

願ひに罷り出でましてございます、如何取り計らいませうや、安「ウム、半太夫が參りしこな、今日は姫の祝日であるゆへ、明日に延ばすやう申付けし筈であるが、參つたこあれば苦しうない、暫時控へさせて置け」家來は次へ下つた後で家藝守は、安「アイヤ御分家、只今參つた和久半太夫なるものは、予が領分廣島在木本村こやらに生れたる者にて、若年の頃合から武藝を好み、諸國修業をいたし、余程天晴な腕前だこ申す、當時江戸表に道場を開いてゐる、予は彼を召抱へたく存ずる、夫れが爲め今日は呼寄せたのである、幸ひ酒宴の興にもあれば、庭前へ廻して彼が腕前を調べて、力のあるものなれば、召抱へんこ存ずる、御身召連の臣下の中で、誰か選んで半太夫こ一本試合をさせては如何であらう」こゝいふのは四十二万石の淺野家には、和久半太夫の相手になる者も澤山あるが、兼て分家内匠頭は家來自慢をしてゐる、取分け堀部安兵衛、赤垣源藏、不破數右衛門、武林唯七なごの天晴な勇士が揃つてゐるから、誰か一

本立合をさせてはこ考へ、此の事を内匠頭長矩公に話した譯だ、素より内匠頭は家來自慢の方であるから、快よく承諾、内「委細承知仕つた……」早速供頭の片岡源吾右衛門に申付けて、内「誰か供人のうちより、一兩人選み、半太夫こ一本立ち合をさせて宜からう、片「ハヽッ、委細心得ましてございまする……」お請けをして下つて來た、供待部屋へ歸るこ、大勢は、□「片岡氏、俄に御前のお招きは如何なる御用でござるか、源「イヤ、今日御身達に喜んで貰はなければならぬ事がある、面白い事が出來たぞ、皆「ナニ面白いこは……、源「此度赤阪溜池に道場を開いてゐる和久半太夫家相こ申すもの、御本家の御指南役こして召抱へるにつき、今日が初のお目見へだ、彼が腕前を取り調べるにつき、御本家には多くの勇士も居らるゝが、我君にお沙汰に相成つたに依つて、我々供人のうちから一兩人を選んで、お庭先で先づ相手をするのだ」之れを聞いて一同は雀躍りして喜んだ、世は泰平の情けなさ、腕前が幾等あつても

勇士を相手に働く事が出來ない、毎夜腕が鳴つて、脾肉の嘆に堪へない武藝自慢の面々だから堪らぬ、○「片岡氏、身共が和久半太夫の相手をしやう、△「イヤ、不可ない〳〵、チヤンと乃公に極めてあるこは怪しからん、まだ誰とも極めないよ、□「片岡殿、賴む、身共を撰み出してくれ、御身とても拙者の腕前知らぬ事はヨもあるまい……」と、第一に武林唯七首め赤垣源藏、神崎與五郎、大高源吾等の天狗連中が、片岡源吾衛門に賴み込む、片「オイ〳〵、暫らく待つてくれ、何うも之れは拙者が許す譯に行かぬ、殿樣の仰せには、大高、神崎と仰せられた、御苦勞だが二人が出てくれ、大「ナニ我々兩人、夫れは有難い、人多き中に二人を撰んで下さるこは有難い事である、源「夫れでは大高神崎、出て呉れ……」二人は大手を振つて、ノシ〳〵庭前に廻つて行く、取り殘された力自慢腕自慢の武林唯七は、少々不平こ見へ、面膨らして、唯「オイ〳〵片岡氏、何の爲めに和久の相手に、神崎

こ大高が出たのだ、何うもチト相場が違ふよ、源「ナゼだい、唯「ナゼこ云つて、當時江戸表に三十六道場あるこ雖も、一こ云はれて二こ下らぬ和久半太夫兼相だ、源「ウム、其の通り、唯「拙者も和久に會つた事はないが、大天狗こいはれた和久半太夫、大高こ神崎ではチト危うい、萬一の事があつては、只々兩人の恥辱ばかりではない、主家の恥辱ではないか、今少し天晴なものを出しさうなものだ、何ゆへ乃公を撰んでくれない、源「然し、夫れは君命だから仕方がない、唯「如何に君命こは云ひながら何うも人を見る事を知らぬ、さういふ事で供頭が勤まるこ思ふか……」竹林唯七眞赤になつて怒つてゐる、片岡源吾右衛門クツ〳〵笑つて、源「アハ……、相變らず粗忽な奴だわい……」こ、互いに顏見合はせてゐるこ片岡源吾衛門は、源「オイ、竹林、何んこ云つても、殿の仰せを背く事は出來ないよ、唯「さうか、背く事が出來ぬこあらば仕方がな

い、併し御主君も甚だ譯が分らぬ、拙者が直に御主君に願つて見やう……」突つ立ち上つた唯七は、大手を振つてドン〳〵歩きながら、唯「何うも人を馬鹿にしてゐる、拙者がゐるのに、大高こ神崎に申付けるこいふは、お見鏡が違ふ人を馬鹿にして……、糞面白くもない……」怒りながら庭前に來て、庭石の上に兩手を支へ、唯「ハッ……」内匠頭之れを見て、内「ア、又周章者が出て參つたか、御本家の手前困つた事である」心配の顏色で以つて、内「コレ〳〵、其處へ參つたのは唯七ではないか、唯「ハイ、左樣でございまず、内「誰が許して此の處へ參つた、無禮であらうぞ、退れ、唯「イヤ、誠に恐れ入りました次第でございますが、少し我君に御願ひがございつて罷り越しましてございます内「願ひ、何故手順を以つて願ひ出でぬ、無禮者奴ッ……」何日も氣に入りの唯七ではあるが、今日は本家の手前、心にもなく叱りつけてゐる、スルト木家の安藝守は、安「イヤ〳〵苦しうない、今日は無禮講であるから許す、オヽ燕

子花か……、唯「ハヽッ、安「ヨク參つたの、許す〳〵、近う參れ、唯「有難く存じまする……」ナゼ燕子花こいふふこ、淺野家は本家分家の間柄であるから、何か珍らしいものがあるこ、本家からも贈る、又分家からも贈る或る時鐵砲洲から霞ケ關の屋數へ、京都九條家から、拜領の燕子花、夫れを分配しやうこいふ時、武林唯七が使者に立つて、一本頂きに參つた事がある、處が長矩公には、南部大膳太夫から贈つた三日月こ云つて、眉間に三日月形の毛のある名馬があつた、少し氣が荒い爲め、主君の乘馬にはならぬ、處が唯七は父の教へに依つて、大坪流馬術の極意を極めてゐるから、何時も此の唯七に責めさせて、馴れをつけてゐる、今日しも一鞍責めて見よこの言葉に、唯「畏まつて候……」引出した名馬三日月、武林唯七はヒラリ悠然こ飛び乘つた。

一五、淺野安藝守屋敷御前試合唯七の大言

大坪本流は鞍のうち、自ら紺ごの染分手綱、ハイヨ……ごと駈け出す聲に、駒は蹄の音高く立て髪を振り立て〳〵、平一散に駈け出したが、相手は唯七、難なく乘り扱し、漸やく戻つて來た霞ケ關の屋敷、處が淺野家の隣りは黒田の屋敷で、門が列んでゐる、尤も淺野の門は赤で、黒田の門は黒い、駕籠屋の雲助歌にも「安藝ごと黒田は國や隔つれご、お江戸屋敷は軒並び」斯う唄つてゐる位ひ、赤ひ門ごと黒い門ごだから間違ひさうな事はないが、周章者だかち、唯七バツごと馬から飛び降りるなり、黒田の屋敷へ飛び込み、玄關にかゝつて案内を乞ふた、執次が出て、「取次何方から」ごと、いはれた時に、唯七は眞面目な顏して唯一拙者は、淺野の家來……」ごと、口迄出たがヒヨイに正面を見るご、淺野の本家なら雲龍の衝立が立つてゐる筈、處が黒田の方はさうでない、松に鶴の

衝立が立つてある、唯「ハテナ、之れはお屋敷の樣子が違ふが」ごは思つたが今更出る譯にも參らんから、唯「エ、拙者は淺野の家來竹林唯七ござる、御本家へ使いに參る途中、少々空腹に及びまして、御本家迄參り兼ねます、甚だ恐れ入る次第なれご、一椀御饗應に預りたい……」之れを聞くご黒田の家來は、家「ハ、ア、サテは此奴屋敷を間違つたのぢやな……」思つたから、左あらぬ体で此の事を奥へ取次ぐ、黒田侯クッ〳〵笑つて、豫て淺野の分家には周章者ご名の通つた武林唯七ごいふものがあるごは承知の事であるから、黒「苦しうない、奥へ通せ〳〵……」唯七は奥へ通され、食ひたくもない飯を無理から一杯食つて、其の儘禮を述べて、黒田家を飛び出し、隣屋敷の淺野へ戻つて來て、何に喰はぬ顏して挨拶を述べるご、安「ウム、三日月を乘り扱してくれて忝けない、之れを取らせる……」燕子花を遣はされた、唯七は夫れを貰つて歸る途中、馬の上から、唯「ハ、ア、之れが京都九條殿より

拝領の燕子花か、イヤ何うも美事な花だな、優しい花だ……」頻りに眺めてゐる折柄、火事だ〳〵」と呼ぶ聲に、唯七ハッと驚ろき、馬上から、唯「コレ〳〵町人、火事は何處だ、町「ヘイ、築地の鐵砲洲の方で……、唯「ナニ鐵砲洲、夫れは大變だ……」唯七鐵砲洲と聞くと、今迄大切に捧げてゐた燕子花を鞭にかへ、思はず知らず、馬の尻をピシャッ、唯「ハイヨ……」馳け戻つて來たのが輕子橋の屋敷前迄歸つて見ると、別に何の變つた事もない、ヤレ〳〵と安心して馬より飛び降り、早速奥へ來て、主君の目通りへ出て手を支へ唯「ハヽッ……、只今立ち歸りました、内「オヽ、唯七であるか、大儀〳〵、シテ本家よりの燕子花は如何いたした、唯「ハイ、結構な花でございます、イザ御覽下さいまするやう……」右手に持つた燕子花をヒョイと差出さうとすると、花は落ちて莖ばかりが殘つてある、内匠頭は此の体を見て、内「コレ唯七、燕子花は何ういたしたのぢや、唯「ウーム、ヘイ……、内「ヘイではな

い、何うした、唯「エヽ、實は只今、斯様でございました、粗忽極まる某、申譯の爲めに切腹いたして相果てまする、内「コレ〳〵腹いたして何んとする、今日は忘れて遣はす、以後は必らず謹むが宜からう、唯「ハッ、有難く存じ奉りまする……」唯七恐縮の体で目通りを下つたが、之より唯七は燕子花〳〵と異名をつけられた、夫れゆへ安藝守も、唯七を見ると燕子花〳〵と常に仰しやる、此の時安藝守は武林唯七に向つて、安「其方は、何んと思つて參つた、唯「御意にございます、只今 承はりますれば、和久半太夫どやらをお呼出しに相成り、腕前試べの御試合どやら 承はりまする、大高、神崎では少々不安心のやうに心得まするに依つて、今少し立派な腕前の者をお出し遊ばされましては如何と心得ます、萬一の事あらば御分家のみならず、御本家も合せて御恥辱の事かと心得まする、安「成程、家の爲を思つて申入れるは感ずるに余りあれど、勝敗を決する譯ではない、只彼が武藝を試

し見る丈けの事である、夫れゆへ神崎大高を撰んだ譯、彼がモシ敗を取つた時は家の恥辱こあらば、何者を出して宜しいこ思ふのだ、唯「御意にございます我君のお側に日本一、日の下開山の武藝者がございまず、安「ウム、日の下開山こは何者ぢや、唯「エ、誰でもございませぬ、手前でございます……」安藝守之れを聞くこ、安「アハ……」こ、笑つた、内匠頭は、内「コレ〳〵唯七、何んこ心得て御本家のお目通りをも憚からず、出過ぎた事を申す、控へ居れい」こ、口では叱つても、赤垣も居り、武林も居り、堀部も居るから、立ち合はしたいは山々だが、モシ此の和久を美事に負かした時には、折角奉公をするこいふ矢先、彼の妨けになる、ダカラ、負けも取らず、勝たれもせず、互角の勝負をして置けば、本家分家の恥辱にもならず、又和久半太夫の身の治まりもつくこいふ一擧兩得の考へから、大高、神崎の兩名を撰び出だした譯であつた長矩公は唯七に向つて叱り附けた、處が唯七は乳兄弟の間柄であるから忠義無類であるが、到つて無遠慮、叱られた位ひで凹む男でない、口をムグ〳〵させて何か云ひ出さうこしてゐるこ、内匠頭は夫れこ見て取り、内「唯七、其方は日の下開山だこ誇るか、唯「御意にございます、内「日の下開山こ申せば横綱ぢやを使はぬこ申すの、唯「御意にございます、内「相撲でも、一番最初から横綱は取らぬぞよ、唯「御意にございます、内「弱いものが先に出て、後に強いものが出る、モシ神崎大高等が負けたる時は、其方が出て、恥辱を雪ぐこすれば、夫れで宜いではないか、唯「ウーム成程……、内「故に、彼等兩人を選んだ譯だ、退つて控へて居れ、唯「ハッ、然らば大高神崎の弱虫を先に出しまして、後で私が出る、夫れなれば分りました、斯うありさうな事だこ思ひましたが、其の邊が一向手前には分り兼ねますゆへ、お願ひに出ましたやうな譯でございます、然らば御免蒙むります」剛直な男だから諭されて大手

を振つてドン〳〵退つて來た、△「イヤ武林、御前体は何うであつた、唯「サレバ、大鳥は小羽根を使はぬ、○「成程、唯「神崎、大高が負けたら、拙者が出て恥辱を雪ぐのだ、何うだ、日本一、日の下開山、天が下に相手なしの武林唯七でござる、皆弱虫が負けた後で、乃公が引受ける、アハ……、宜い氣持ちだ……」一同は顏を見合せて、クス〳〵笑ひ出した、□「アハ……、武林の奴殿樣に煽動てられて來た、面白い男もあるものだ」と、皆笑つてゐる、其のうに、庭前立合の場處では、双方よりズイと夫れへ出る、椽側には本家淺野安藝守、分家淺野内匠頭、其他兩家の重立つもの、綺羅を飾つて差し控へる、立合の溜りには、分家の家來、供の人々が莚を數いて控へてゐる、稍あつて現はれたは、和久半太夫、麻上下に、駸斗目の着物を着したる風采、身の丈けは六尺に余り、色淺黑く鼻筋通つて、筋骨逞ましく、威あつて武からぬ立派の武士椽側に向つて目禮いたし、係りの人々に挨拶した上、軈て試合の場處に來て身仕

度に及ぶ、溜りの中から眤と見てゐた武林唯七は、唯「イヨ……、鉛の天神樣か、雪駄の上用干のやうにブン反り返つてゐやアがるな、早く兩人と立合つて負けてくれゝば宜いが……」味方の負けるを祈つてゐるとは厄介な男もあつたものだ、處へズイと出て來た神崎與五郎、之れは淺野家でも美男子と呼ばれた人物、見るから弱々しく迚も鬼の如き和久半太夫には、勝つべくも思はれない半太夫は神崎與五郎を見ると、優男である、半「フヽム、今日の初見參に立合をさせるこいふは、必竟分家内匠頭が家來自慢の大名ゆへ、家來の腕前を見せる爲めに、乃公に立合へこの事であらう、アンな男と立合ふのは、別に面白くもない……」不平顏で扣へてゐる、双方用意が出來た、目禮をして、左右に別れる、和久半太夫は木太刀を持つて大上段に構へる、神崎與五郎は中正眼に構へた、與五郎も淺野の家中では夫れ丈け弱い人ではないが、相手が名高い和久半太夫の事であるから、何こなく氣遲れがして、勇氣がない、此方和久半

太夫、藝州廣島在は木本村の鄕士和久半左衞門の家に生れた人物、半左衞門は豊臣家滅亡の時、秀頼公の供をして薩州へ落ちる途中、幸村の勸めにより、廣島在に足をとめ、鄕士となつて、今は五代目の半左衞門の家に生れた半太夫、先祖の和久半右衞門の力を受け繼いだものであらう、若年ながら大力、殊に武藝を好み、劍術修業の人々を自分の家に招き、毎日武藝の修業、十六才の時には、モウ廣島一ケ國に於いて、和久半太夫に勝つものが一人もなかつた、片田舍にゐては腕前も上らず、依つて諸國修業に立ち出でんと、諸國漫遊を思ひ立ち、道場〳〵と立ちより、他流試合に余念なく、後遠州秋葉山の山内に立ち籠り、足掛け六年、苦心をして習い覺へたのが一刀流のうちより編み出した鼻歌三丁矢筈斬り、夫より江戸へ出て、鈍武士を驚ろかしてくれんと、赤阪に道場を開いた半大夫、今日ぞ我身の晴れの場處と、ピタリ構へた腕前には、鵜の毛で突いたほどの隙間もなかつた。

一六、唯七の氣合和久半太夫の勇氣を挫く

ヤツと双方より掛聲がかゝつた、ブーンと唸りを生じて打ち下した和久の太刀先鋭く、神崎與五郎一撃の下に遣られたかと思ひきや、巧みに受け流した與五郎は、小手の下を掻いくぐり、エイと打ち込む處を、バシーン、引拂つて置いて、半太夫手許に飛び込むか否や、半「面だッ……」打ち込んだ半太夫の早業の爲め、與五郎は正面より打ち込まれ、與「參つた……」其の儘引下る、武林唯七之れを見て、唯「ソリヤ弱虫が一人負けた、何んだ見つともない、與イヤ武林、實に相手は天晴な腕前だ、唯「敵に感心する奴があるか、サア早く一人の弱虫が出て負けて仕舞へ、其の後は乃公の番だ、大高早く打たれてくれ大「エ、イ、縁喜の悪い事をいふな……」大高源吾は立ち上つて、身仕度甲斐〳〵しく、大「半太夫ごの、未熟な腕前ながら、お相手を申す、半「之れは

〳〵、半太夫迚も取るに足らざる未熟なる腕前、お手柔かに願ひたい……」双方禮儀を正し、木太刀に手をかけ、位取りに及び、暫らく睨み合つてゐるうち大高源吾は歌誹諧には名を得てゐるが、武藝では余り驚ろくほどの腕前はなかつた、一同は源吾が酷く打たれるに違ひないと思ひの外、ヤッと打ち込む太刀先鋭く、唯七は之れを見て、武「オヤッ、チヨイと遣るぞ、之れが負けてれくなくつちやア都合が悪い、何うか負ければ宜いが、南無八幡大菩薩、何卒大高が負けますやう、歸命頂來、六恨清淨……クシヤ〳〵〳〵……」酷ひ奴があるものだ、和久半太夫は之れを見て、半「ウーム、此奴はナカ〳〵手強い腕前だ」と、思つたが、秘術を盡して、エイオーと挑み爭ひ、双方熱湯の汗を流して、上段下段と斬り結んでゐる、之れを見た武林唯七、大高源吾が危くなると、大聲張り上げて、武「ア、危いッ……」思ばず叫んだ、其の叫んだ聲の大きい事、雷の如くであつたから、半太夫思はずタジ〳〵と蹌踉めいた、途端

大高はつけ込んで、パシーン、面へ巧く打ち込んだ、半「參つた……、源「失禮仕つた……」大高源吾は其の儘下つた、半太夫は心中に殘念で堪らない、唯七の側へヅカ〳〵と進みより、半「アイヤ、只今試合の最中、危いと高聲に呼ばりたは、何方でござる、唯「誰でもない、拙者だ、半「ナゼ、左樣な事を仰しやつた、唯「ナゼと云つて、別に深い考へがある譯ではない、危いから危いと云つた、悪うござるか、半「其許の大音の爲め、拙者が負けたのである、唯「アハ……、大きい聲を出したからそれに驚いて敗れるやうな拙い劍術、泰平の玩弄劍術、そんな腕前で高慢らしい顔をして、劍術使ひなぞとは片腹痛ひ、アハ……」カラ〳〵と冷笑つた、半太夫烈火の如く憤つた、半「ウヌ、サマ〴〵の悪口、シテ御身は何んといはるゝ、唯「拙者か、拙者は憚りながら、日の下開山、横綱御免、劍道の源、淺野内匠頭の家に左るものありと聞へた、武林唯七猛の隆重といふものである、半「アハ……、成程、猛と

は名詮自稱、如何にも牛のやうな顏をしてござるわい、唯「ナニ、牛こは何んだ、殘念なら、拙者が一本相手にならうか……」互いに爭ひを始める、之れを見て長矩公は、內「唯七、無禮であらう、扣へて居れ、唯「ハッ、內「下れッ……」叱られて唯七大手を振つて引退る、後に殘つた半太夫、怨めしさうな顏をして四邊を睨め廻してゐるこ、內匠頭は、內「ア、コレ〳〵、半太夫家來の粗忽は計せよ、今日其方が負けを取りしは怪我負けこ申す者である、確に日木無双こいふ事は認めてゐるぞよ、何卒御本家、彼が腕前は天晴なればお召使ひに相成りますやう、安心ア、如何にも半太夫は天晴である、今日は退れ」引出物を取らせて退げた、然し之れが障りこなつて、本家淺野家では、半太夫召抱へは沙汰止みこなつた、之れが爲め半太夫は、半「已れ憎くき武林唯七奴、今に目に物見せてくれん、折角の出世の妨げをしられて、此の儘捨て置くものか」こ、唯七に怨みを含んでゐるうちに、時しも元祿の十五年十二月

十四日の夜、吉良の屋敷へ四十七人打ち入りの時、圖らずも上杉家に用心棒こして召抱へられた和久半太夫、恨みを晴すは此の時なりこ、武林唯七相手に火花を散らして奮闘決戰、大立關に突つ立つて闘つてゐた半太夫の刀の端が、鴨居にザックリ、平太夫焦つて引拔かうこする刹那、唯「小癪なり半太夫、拙者は憚りながら淺野の家來に左る人ありこ知られた、武林唯七猛の隆重なり、覺悟しろッ」こ、横腹目がけて斬り付け、遂に豪勇の和久半太夫を打ち取つた、周章者だから頗る忠義無類、且つ武術の極意に達し四十七士中の横紙破りこ呼ばれた人物であつたが、此の武林唯七にも一つの悲劇がある、夫れは斯うである、時は元祿十四年三月十四日淺野內匠頭長矩公が、吉良上野介義央へ殿中松の廊下隅の柱の六間目で刃傷に及んだ、時刻は四ツ半、只今の十一時頃であつた、其の罪によつて、五万三千石は取り上げられ、江戸屋敷は三日の間に引拂ひ、國表の赤穗城は三十日間に引拂へこいふここ、殊に江戸表は三日間の事で

あるから、十四日は最早日の暮合いを聞くと、殿様は切腹、實に其の混雜は一方でない、○「ヤイ〳〵、まだ乃公の茶碗は飯を喰ふから出して置け、三日間で今日はモウ經つたやうなものだか、マダ明日明後日と二日あらア、周章てるにも程があるぢやアねへか、ねへ部屋頭、とんでもぬへことになりましたね、急に斯んなことにならうとは思はなかつた……」一疋の馬か狂へば千疋の馬が狂ふとはヨク云つたものだ、何んしろ屋敷が、鼎の沸くが如くとは此の事であらう、皆女中や小供達は何うなる事かと泣いてゐる、○「ヤア大變〳〵……□「靜にしろい、何を騒ぎやアがるんだい、○「エヽ部屋頭、市の野郎が見へねへと思つたら、次の明部屋で市の野郎腹切つてゐやアがる、頭「ナンダと……、○「私には何だか分らねへが、暗い處に市助奴跼んでゐやアがるんで何うしやアがつた、腹でら痛いのかと、樣子を見るとね、寢てるやうな有樣だから確りしろと云つたが四邊がベタ〳〵するんで驚いた、ヨク〳〵見るとね、

四邊は血だらけで、エヽ私や横根でも切つて、それで目でも眩しやアがつたのかと思ひましたら、さうぢやアございません、出刃で以つて。腹切りやアがつて……、頭「ナンダと、夫りやア大變だ、殿樣は今日愛宕下の田村樣のお屋敷で、御切腹爲すつた、夫れで三日の引拂いといふ此の騒ぎの中で、又そんな眞似をしやアがつて仕樣がねへぢやアねへか、行つて見ろ……」大勢ゾロ〳〵來て見ると、寄子の市助、見事に切臆してゐる、○「オヤ〳〵、飛んでもねへ事をしやアがつた……アヽ芳、髷に何か結びつけてあるぜ、何んだらう、□「ウム、都々逸だか端唄だか分らねへ、讀んで見ろ、○「エヽー、オヤ〳〵斯ん畜生皮肉な家を書きやアがつて分りやしねへ、□「何れ一つ讀んで見せろ分らねへのか、○「ウム、分らねへ、エヽツト……、何に……、□「其の次は……、○「ウン、何んといふ字だらう。□「之れも一寸分らねへが、三番目は分らア、○「三番目は、何んだい、□「ピンと讀まア、△「ナンダと篦

棒奴、そんな讀方をしやアがつて、後が分るか、□「分らねへ、○「ソリヤア皆分らねへのだ、間抜け野郎、何うだい部屋頭、仕樣がございませんから不淨門から擔ぎ出して水葬禮でボーンと投げ込んで仕舞つちやア、何うでせうね、

頭「夫れはいけねへ、人一人の亡骸だ、重からねへとか輕からねへとか、公ケ間敷いことを云はれちやア、後で困る、一旦お目附けへ此の事をお屆けしやうか、

○「ハア宜しうがす、斯う明るくして、大勢此處に立ち合つて居りますから、部屋頭早く行つて來て吳んねへ、頭「ウム、お家騷動の處へお負けに小使迄が祿な眞似をしねへ……困つた奴だ……エ、エ、お賴み申します……」目附の鈴木こいふ處へ出て來た、奥ではゴタ〳〵してゐる、○「オイ〳〵、坊の玩弄箱に入れて置け、煙草盆火鉢そんなものはいらんから、皆な賣拂つて仕舞ふからそこへ並べて置け、唐紙の襖を荒繩で縛つちやアいかんぞ、道具屋は疵をつけんでも、直ぐ疵がついてるとか、文句をつけて、安く踏み倒すから、二階

の壁はさうやつて置け、ア、殿樣御短慮であればこそ、我々が路頭に迷ふ、惡い御主人を持つこ、斯んなことになる困つたもんだ……、コレ〳〵誰か賴むこと云つてるぞ取りついでやれ、誰だ……、頭「エ、お賴み申します、女「ハイ何方、頭「私は部屋頭政右衞門でございます、女「ハイ、旦那樣へ一寸お目にかゝりたいのでございますが、旦那樣へ一寸お目にかゝりたいのでございますが、お急がしい所へ出て誠に相濟みませんが、又お後でお手がなけりやア、私等がお手傳いに上つて宜しうございます、何うか旦那樣へ一寸お目にかゝりたう存じまして……、

女「ハイ、暫らく……、旦那樣、鈴「ナンダイ、女「政右衞門が參りました鈴「ナンダ政右衞門こいふのは……、女「引越しのお祝儀でも貰ひに參つたのでございませう、お手がなければお手傳ひに、上つても宜しうございますこと申して……、鈴「馬鹿云へ、目出度くつて引越すんぢやアねへ、お家騷動泣の涙で引越す、此の上引越の祝儀迄取られて堪るものか、第一屋敷内へそんな

もの、來るべき道理がない、女「夫れでも是非共旦那樣にお目にかゝりたいこ
申して居ります、鈴「ナンダイ……」出て來た鈴木ヒヨイこ眺めて、鈴「オ
、、部屋頭の政右衞門か、政「へイ、鈴「貴樣、何んだ、政「恐れ入りますが
只今お女中に願ひました通り、旦那樣にお急がしい處を濟みませんが、何うか
お目通りを願ふて、鈴「ア、引越しの祝儀でも貰ひに來たのか、政「御冗談仰
しやつてはいけません、女中が粗相しいので……、處で旦那樣へチヨイこ申
上げます、鈴「ナンダイ、政「寄子の市助こいふ奴が氣が違つたか、出刃で切
腹いたしましたので、鈴「ナニ……、政「皆のいふには、不淨門から擔ぎ出
して、水葬禮をさせよこ申しますが、何んしろ人一人、さういふ事をするこ後
で面倒でけすから、お屆け申せこ、斯ういふ譯で御當家がお目附ゆへ、お屆け
に出ました譯で、夫れに髷に斯んなものか結びつけてございました」こ、書付
を夫れへ出す。

一七、匹夫の殉死唯七其の忠に感ず

目附の鈴木源内、ウロ〳〵してそんな事は耳に入らない、源「チイ〳〵斯んな
ものを出した處で仕方がない、又乃公は見て居る暇もない、何んしろ今日一日
で五万三千石の家が潰れてゐるのだから夫れ處ではない、コレ〳〵酷い音をさ
せたが、何んだ、惡い茶碗が割れた、氣をつけろ、何んしろ此方はまだ締めて
はいけんぞ、政右衞門乃公が目附ではあるけれごも、お家騷動こなつてみるこ
役目があつて無いやうなものであるから……、オイ〳〵、單筒や長持はまだ
締めるなこ云つてあるぢやァないか、道具屋が參つたか、何んしろ乃公が參つ
た處で、腹を切つたものが活返へる譯ではなし、道具屋が參つた、腹を切つた
ら血が出たらうな、さう安く踏まれて堪るか白痴者奴……、政「ナンダイ、
之りやァ、ア、行つちやつた、乃公の話こ道具屋こチヤンポンでゐやァがる、

譯が分らんな、始末には乃公こ道具屋こ間違やアがつて、乃公に向つて白痴者だつて、何うも酷ひもんだ、お家騒動になるこ、只一日で之れだ、仕様がねへ乃公が届けたのを却つて迷惑に思つてるやアがる、何んだ馬鹿〳〵しい、歸らう……」ブン〳〵怒つて部屋頭政右衛門、提灯提げてブラ〳〵歸つて來る、向ふから來たのが武林唯七が、此の人は到つて癇持ちで、慌てもの、先祖は猛二寛こ云つて、明の軍醫であつたか、日本へ捕虜になつた人で、日本に住居して武林次庵、其の子か渡邊半右衛門、其の次が唯七、中小姓で十五兩三人扶知だが、前云つた通り、内匠頭こは乳兄弟に當る間柄、武林唯七はチラリ認めて唯「政右衛門ではないか、政「へイ之れは武林の旦那樣で、エ、大變い事が出來ました、唯「ナンダ、政「寄子の市助こいふのが腹切りました、お家騒動で私達は、途方に暮れてゐる處へ以つて來て、そんな手數のかゝる事をしやアがつて、お目附へお届けをしたんでございますけれご、お家騒動だから役目は有

つて無きが如しなんて、頓こ聞いて下さいません、夫れも宜うございますがね五万三千石が無事で居りやアヽ、役目は役目、檢死は檢死だが、殿樣が殿中で刃傷した、平素殿樣の心得が悪いから、我々家來が斯んなになるのこ、不平を溢しやアがつて……お負けに乃公が行つたつて、腹切つたものが活生る譯のものぢやアなしなんて、夢中になつてるやアがるんでございますよ、唯「ウムシテ持つてるものは何んだ、政「へエ、之れを髷へ結びつけて居りましたんで……、唯「ハヽア、本心ではないな、政「へエ、皆さう申して居りますので……、唯「見せろ、政「へイ、唯「提灯をモソツこ出せ、政「へイ、之れでございます、唯「ハヽア、之れが寄子の市助が認めたものか、フヽム宜い手だな……ハヽア、何んだこ……「君恩一時にあり、匹夫死して黄泉の供につんか……」武林唯七は之れを讀むこ、ボロ〳〵涙を流し始めた、唯「之れは政右衛門、亂心者ではないぞ、殉死いたしたのだ、政「へエ、陽氣が悪うござ

いますからね、」唯「分らん奴だな、ヤレ〳〵氣の毒千万、高祿頂戴いたす我々に殉死する者もない、然るに僅かの小身者が冥途への御供、君の恩一時にあり匹夫死して、黄泉の供に就かんこは感服の到りである、慨れ不憫のものである から、乃公が檢死をしてやる、政「ヘイ、檢死の代りをして下さいますか……有難う存じます……、唯「身共はチヨッこ屋敷へ歸り、母上に一言いたして參るから、夫れ迄待つてゐてくれ、政「ヘイ、唯「ハイ、實に呆れ返つたものでござ母「オヽ、唯七御家中の樣子は何うぢや、いまして、僅か一時か半時のうちに、不忠を表に現はして、今日迄お祿を頂戴いたした事は打ち忘れ、犬にも劣る奴がお緣を頂いてゐたかこ思ふこ、實に馬鹿氣切つた次第でございます、武士の風上にも置くべき奴でないものが澤山ございます、其の中に下郎の市助こいふ者が切腹いたしました、御覽下さいまし、斯ういふ遺言がございます「君恩一時にあり、

匹夫死して黄泉の供につかん」小身者の平助が恩義に迫つて、殉死いたしました、高祿を頂くものは、己れの身仕舞を先にして、役目あつても役目を勤めんこいふ、實に不都合極まる奴が多いのでございます、夫れゆへ市助が死んでも檢死役をしてやる者もないこいふ有樣、夫れゆへ私が檢死を勤め見苦しくないやうに、野邊送りの金も與へてやらうかこ存じます、母「夫れは氣の毒なものぢや、唯七、お前は外々のものこは違つて、殿樣こは乳兄弟、マタ一郎こ申上げた其の昔は、妾がお乳を差上げました、お前は恐れ多いがお乳兄弟、不忠不義の名を取らんやうにしてお呉れ、又之れは妾が手で縫つて置きましたお前の胴着に出來て居ります、殿樣が御幼少の時に、お乳がかゝり、妾が拜領いたして置きました、斯樣なつて見るこ、殿樣の御遺品、妾も取る年妾の遺品同樣お前の胴着に縫ひ上げて置きました、イこ行つて參ります……」聽て部屋頭政右衞門の處へ來て、唯「政右衞門、

待ち遠うであつた、政「ヘイ、有難う存じます、何うもお急がしい處をお氣の毒樣でございます、唯「オ、、蠟燭がなくなる、遣はさうか、政「イエモウ近いから、之れで大概足りませう、實に旦那樣、貴公方お身分がおあんなさるから、御用意のあるものでもお困りでございますな、私達は身の上も輕い、吹けば飛ぶやうなものでも、樂なやうなものですが、それでも斯んな事になりましては、仕樣がございません、僅かな處を我慢して下されば、僅か一日か二日だつてへんですが、短氣は損氣呆れ蛙の頬被り……、唯「默れ、政「ヘイ、唯「呆痴もの奴、政「ヘイ、唯「ナンダ、蛙が頬被りしたこ、政「何うぞ、御勘辨願ひます、唯「五万三千石の大名淺野内匠頭こいふお方が、三州吉良大濱四千二百石の吉良上野介の爲めに、恥辱を得給ひ、且又御本家は大々名、お家が大事であるから如何なる恥をかいても我慢をされた、勘辨をしたこ云つて見ると武士道が立たん、御本家の御手前、命を捨て、刃傷遊ばされた君公の御胸

中か、貴樣等如きの下郎に分るか、殿中に於いて刃傷なくこも鯉口三寸切れば家斷絶位いは辨へてゐる、余義なき次第で、御刃傷遊ばしたのだ、貴樣下郎の分際で惡口しをる、今一言云ふて見ろ、其の分にはいたし置かんぞ、政「何うぞ御勘辨なさつて、ツイ余計な事を申しました……御勘辨を願ひます、唯「默つて來い、政「ヘイ……」政右衞門は小さくなつて案内する、政「ヤイ〳〵武林の旦那樣がお出でになつたんだ、ナゼ大勢此處にゐねへんだ、明るくして置けこいふのに何うしたんだ、そんな處で何をしてゐやアがるんだ、武林の旦那樣だ、△「之れは入らつしやいまし、○「おいでなさいまし、政「旦那樣、下駄穿いたまゝお上んなさつておくんなさいまし、此の通り汚ない處でございますから……、之れが市助で、コ、此の通り切腹して居ります、唯「ハヽア、此の者か、政「ヘイ、△「アヽ旦那樣、お袴へ血がつきます、唯「ナアニ、斯樣な忠義者の血汐を袴へなりこ切めてつけて置きたい、□「旦那樣、質の値が下

りますがな……、政「ヤイ野郎、默つてろ、今蛙で失策つてるんだ、又此方で余計なことを云ふとお手討になるぞ」唯七が市助を引起して見るこ、下郎ながらも、市助こいふものは、出刃庖丁を以つて事の美事に切腹、唯七は涙を拂ひ唯「コレ市助こやら、五万三千石に汝程の忠義の者が又こ二人あらうか、身分卑しくして殉死を遂げ、却つて高祿頂戴いたすものが、お家の大變こ聞くや否や、己れの一身上の事にのみ心をよせ、不忠を面に現はす輩が大勢ある、實に其方に面目次第もない事ぢや、汝如き忠義者を、今日迄取り立て得ざりしは我々目あつて無きが如し、許して呉れよ市助こやら君恩一時にあり、匹夫死して黄泉の供につかんこは感服いたした、是たせ、我々も其のうちに參るのぢや、早やく亡君の御側へ從き參らせ御奉公いゝ有難う存じます、これは何うも……、ヤイ〳〵手前達もお禮申せ、五兩の兩金がある、僅かであるが、之れを以つて野邊送りをいたしやれ、政右衛門……、政「ヘイ、唯「此處に五

お金を頂いたぞ、乃公が貰つたんぢやァねへ、木のお目附は見ても呉れねへ、有難うございます、エ、お歸りた……」大勢ゾロ〳〵送り出す。

一八、母の死に感憤して唯七愈々復讐の念固し

武林唯七は屋敷へ歸り、唯「母人只今歸りました、市助こいふものは事の美事に切腹、下郎には珍らしい奴で……、母人〳〵……」返事がないから、唯七は怪しみながらガラリ唐紙を開けるこ、六枚折の屏風が立て廻してある、開けて見るこ斯はソモ如何に、母は兩足を細帶にて確かこ結び、見苦しからんやうに覺悟の自殺、之れを見た唯七は屹驚仰天、唯「ヤ、ッ母上、何ゆへの御自害で……」側を見るこ一通の書置がある、手早く取り上げて見るこ。

妾事、其方も存じ居り候通り、殿樣御幼少の御時よりお側近く御

奉公いたし、一日御尊顔を拜まね奉ねば心にかゝり朝夕御武運長久を祈りしに、其の甲斐もなく浮世を早りし給ふ、後に殘り何に樂みのあるべき、夫れゆへ覺悟いたし候、又小者市助こやら殉死いたし候このこと、必らず〳〵其の者に恥入らぬやう、蔭ながう樂みまいらせ候、其方は生來短慮の氣質ゆへ、萬事相謹み申すべし、一お局島田樣より拜借仕候伊勢物語二冊、曾我物語十二冊、ヨク〳〵御禮申上げ、御返濟下され度候、一ハ大縞小袖金子五兩、辰へお遣し下され度、最後を念き候まゝ、あら〳〵書遺し參らせ候、かしく

亡き後は哀れこも見よ袖の梅

涙にかすむ朧夜の月

之れを見るこ、唯七はイヨ〳〵驚き、唯「ァ、殘念、母上にはモウ御最後を遂げられたか、我が爲には御主人の仇たり、母の仇、ヤワカ上野を此の儘に置く

ものか……、ウーム……」此處で唯七播州赤穗へ乘り込み、大石內藏助に對面して、下郎市助の切腹を物語るこ、內藏之助も大いに感服した、サレば武林唯七、討入りの際に、己れ第一の功名を現はさんこ、十分の働をした時、母から記念に遺した胴衣を着てゐたが、夫れには眞綿が澤山入つてゐて、夫れが雪で濡れた爲め、刀で斬りつけられても、ナカ〳〵刃先が身體へ屆かず、大いに助かつたこいふ事であつた、夫れはサテ置き、話は元へ戻つて、淺野安藝守の屋敷で、和久半太夫こ立ち合つて、武林唯七の一言で勝つた大高源吾は、號を子葉こ云つて、ナカ〳〵俳句の名人であつた、江戸へ間者こして入り込み、笹を賣つて、實井其角に出會つた話しは、有名なものであつて、人口に膾炙してゐるから、此處には省く事にして、一つ大高源吾についての逸話を述べて置かう、大石內藏之助が山科に閑居して、反間苦肉の計略を廻らし、間者を次第に江戸へ放つた、中に大高源吾こ、中村勘助こが出立する事になつた、二人は

連れ立つて、東海道をダン〳〵下る、此の二人は誠に仲が宜い、丁度來かゝつたのが宮と桑名の間の七里の渡船場、源「時に中村、拙者少々願いがある、

勘「ナンダイ、大高改まつて……、源「迷惑でもあらうが、之から僅かの廻り勢州の津へ立よつてはくれまいか、津の城下には乃公の義理の兄で、水沼久太夫ざいふものがある、此度江戸へ下つて、大願成就するかしないか、何方にしても再び兄に會ふ事はあるまいと心得るから、チヨイと生前に顔を見て參りたい、迷惑だが、同道してくれまいか、勘「ウム、一向差支へないが、其の水沼ざいふ貴樣の義兄は利口か馬鹿か、何んな人だい、源「ウム、乃公の口から、云ふのはチト變だが、正直一徹、頑固に近い方で、藤堂家に抱へられたのは斯うだ、義兄久太失がソモ〳〵最初藤堂の辻固め仲間に住み込んでゐた時、物見下で立派な武士が三人、一人の浪人を相手に果合ひに及んでゐた、處で辻固めの足輕も、之れを制する事が出來ないから、ワイ〳〵震へてゐる、夫れと見た

義兄久太夫は、六尺棒を以つて忽ち四人を取つて押へた、此の大晴な腕前を物見の上から眺めてゐた藤堂公は、感心の余り、直樣久太夫を取り立て、五十石加增、續いて百石加增。ダン〳〵出世して、只今は八百石を頂いてゐる立派な身の上だ……」之れを聞くと中村勘助は、

勘「オイ〳〵大高、廢せ〳〵、夫はいけんぞ、源「ナゼいけんとふのか、勘「大石殿が何んと仰しやつた、愚な人に接しても差支へないが、賢い人には餘り交はらない方が宜いと云はれた思ひ内にあれば色表に現はれる、相手が賢こいとあつては、或は我々の動作によつて、胸中を察推されては一大事であるから廢せ〳〵、大「成程、夫れば尤であるが、長く話をしてゐると、我々の心の中を推察されるか知れんが、女關で只顏を見るばかり、草鞋も脫がん、夫れなら宜からう、勘「チヤア、マア夫れで宜いとして、決して御身草鞋を脫いではいけんよ、源「イヤ、脫がない、勘「夫れでは同道しやう……」之から二人は勢州津の城下へ入り込み、尋ねる

こ直に分つた、二人は水沼久太夫の屋敷へ訪ねて来た、立派な搆へ、何んしろ八百石取りの武士だから、太した勢ひ、大高源君は女關にかゝつて、源「賴む○「ドーレ……」取次の若武士が出て来て、武、何方樣で……」大「某は、赤穗浪人大高源吾こ申す、宜しくお取次を願ひたい、○「チヨイこお控へを……エ、申上げます、赤穗浪人で大高源吾樣こ仰しやる方がお見へに相成りましたし」書見をしてゐた久太夫は、久「ナニ源吾が參つた……ハ、ア一人は供か朋友であらう、一人か……、○「お二人でございます、久「ア、さうか、奥や源吾が見武「ハイ、御朋友らしくお見受け申しました、久「へた、十疊へ案内をさせ、茶菓子の仕度をするやう、一寸硯を之れへ……」久太夫何か自紙へ認め、久「此の魚を二人前燒物にして、膳部の仕度をしてくれ馳走は此の肴にかぎるよ、モシ近處になければ、少々手間取るも苦しうない、是非買つて參るやういたせ……」妻に申付けた久太夫は、身分柄羽織袴の扮

裝で以つて女關へ出迎ひ、久「之れは〳〵意外の珍客宜うこそ……、サアサ、先づお通りを……」久し振りで顔見合せた源吾こ久太夫、莞爾笑ふうちに云ふべからざる味を含み、源「お兄上樣打ち絶へまして御無沙汰、何日も御機嫌宜しく……、久「其の挨拶は此處で聞くまい、先づ〳〵草鞋を解いてお通りを……、源「イヤ、取り急ぎますれば之れにて……、久「如何に取り急けばこて女關での挨拶は甚だ迷惑、コン〳〵門番門を閉めろ……」聲に應じて家來がギーガターン、門を閉めて仕舞つた、大高源吾こ中村勘助は顔見合せて、モジ〳〵してゐるうちに、洗足が出る、據なく二人は草鞋を脫いで足を洗ひ、久太夫の案内につれて奥へ通るこ、床の結構、掛軸万事行き届いてゐる、先づ久々の挨拶、源吾の紹介で、中村勘助も挨拶する、夫れへ久太夫の妻も出て來て、應對も濟み、久「サテ此度は何處へお越しかい、主家の不祥が身の幸ひこなり、江戸表へ下向いたし、私は細川家へ新規二

百五十石を以つて、御奉公いたす事になりました、又中村氏は池田家へ矢張り二百五十石にて住み込みの約束が調ひました、舊主繁昌の昔は二百石であつたが、此度は意外の幸ひを得て、江戸表へ出世の首途、一寸兄上姉上のお顏を拜して參りたく、依つて伺ひましてございます」と、口から出任せ、嘘八百を並べ立てた。

一九、大高源吾腹切魚の由來

水沼久太夫は之れを聞くと、「夫れはく、主家の不祥が身の幸ひとなつて出世の首途、イヤ面白い、願はくば今夜は一泊してと申したいが、それもお急ぎなれば強いては申さん、併し一飯位いは差支へあるまい、何うぢや膳の仕度は……、」妻「丁度折よくお肴の仕度が間に合ひました、久「夫れは重疊く、膳を之れへ運んでくれ、自分が給供をするから、奥やお前は廊下口へ座つて手

を鳴しだら來るやう、手を鳴さなければ來るに及ばん、」妻「畏まりました……妻は遙か離れた廊下口にキチンと座つてゐる、座敷では久太夫、久「サテ、出世の首途を祝し、久太夫が馳走振り、御笑味に預りたい」と、云つて二膳列べた、其の配膳は何ういふ結構な料理かと見ると、斯は如何に、無頭魚一尾、膳についてゐる、或は之れを腹切魚と稱へて、武家なぞは決して門内へも入れないこいふはご忌む魚だ、世俗では之れをこのしろと稱へる「吾妻なる室の八島の夕煙、誰がこのしろを頭無燒くらん」こいふ古歌があるが、余り美味い魚ではない、尤も好きく〳〵はあるが……其の腹切魚一尾膳についてゐるのみ、サア中村勘助、大高源吾は顏見合せて、源「兄上、之れは甚だ迷惑、我々兩人は新たに主取りをして出世の首途、然るに俗に申す腹切魚を以つて御馳走下さるこは、自分は兎もあれ、中村氏へ對して誠に失禮、何うか膳を改めては下さるまいか、久「アハ……、心を込めた久太夫が馳走振り、何んと御笑味下さらんか

他に聞く人もなき此の座敷より、自分の申上げるこゝ一通り聞いて貰ひたい、去年三月中の四日、殿中にて淺野内匠頭様、吉良上野介ごのへ御刃傷、即日切腹、五万三千石斷絶、赤穗城にて五万三千石に過ぎた大石内藏之助殿あれば、采配取つて籠城こ噂トリ〳〵、サテ義弟源吾は、如何なる働いたして討死なすか、其の音信を聞きたしこ、耳を引立て丶待つうちに、イヤ籠城でない、殉死追腹こ噂、然るに夫れもなく、赤穗の城は滯りなく大公儀へ返上いたし、其の後大石殿には都の片邊り山科へ閑居、晝夜遊女に耽り、刀をさすもの大こなく小こなく、内藏之助を人面獸心こ罵り、先には五万三千石に過ぎた城代家老こいはれしものも此の始末、人は一朝事なければ、賢愚強弱は分らぬもの、今日内藏之助の臆病卑怯が初めて相分つた、彼は武士の風上に置くべきものではないこ、口を極めて罵るが、不肖久太夫ツク〳〵考へるに、之れは決して、本心からの放埒ではない、申すも如何なれごも、相手は僅か四千三百石の

吉良上野介なれご、後見は出羽米澤にて十五萬石、然も武功の擧ある上杉こいふ大名、吉良上野を欺いて油斷をさせ、而して吉良家へ亂入いたし、吉良少將殿の御首級を頂戴いたし、内匠頭様の墳墓へ手向けんこいふ心の底であるこ推察いたす、イヤ決して驚く事はない、何も他に聞く人もないから、心配無用……」こ、云ひつゝ久太夫は兩眼屢叩きながら尙も言葉を續けて、久今然し五万三千石の御家、死を同じうして、御主君の遺志を繼ぐ人々は、恐らく五十名内外に止まるまいこ心得る、其のうちに各々方御兩人、江戸表へ下り、事を爲さんの卅段ならん、サテ目的を達し、上野介殿の首級を擧げて、内匠頭殿墳墓へ手向ける、之れは忠なれごも私の事、大公儀にては忠義のものこ御賞美なく天下の大法なれば、切腹より外はあるまい、然れごも大望成就こいたせば、各々は、圖より死を覺悟の上ならん、されば切腹魚は時に取つての御祝ひ申した心得ぢやが、何んこ御賞美下さるまいか」一星をさゝれた時に、源吾、勘助の

兩人は、冷汗をタラ〳〵と流し、源「イヤ之れは、兄上のお言葉甚だ以つて迷惑の到り、左樣な事が他人の耳に入らば、我々の大事、名を取るより德を取る當世拵、痩浪人が四十五十集まればこて、何んこいたして事がなりませうや、殊に内藏之助殿は本心放埒、思ひの外の痴漢、成程赤穗城退散の際は、一時は齒をかみ、肉を動かした事もござつたが、今日に到つて見れば、去るもの日々に疎しの譬へ、夫れゆへ何れも仕官いたし、或は配當の金を資本こして町家に下るものもあり、今日に到つては、吉良殿を怨むなごゝいふ事は少しもござらん、失禮ながら貴兄の仰せられる事は思ひ過こ申すもの、何うか膳部お改め下さい、中村氏へ對して甚だ失禮……、久「イヤ成程、斯樣な大事ゆへ、親子兄弟夫婦たりこも口外いたすまじきこいふ神文誓紙はあらう、ナレごも夫れは夫れ、斯くいふ久太夫も浪人の昔なれば、槍一筋小脇に抱へ込んで、其許こ兄弟の緣あらば、一統に力を添へ參らせ度く思へごも、主持つ身の其の勝手

もならず、先づ今生の御訣別にお立ちより下さつた、ものこお察し申す、斯くても猶久太夫に本心をお明し下さらぬか、すもの、さやうな事は斷じてござらん、久「ハヽア成程、之れは自分の思ひ返し、心得違ひ、飛んだ失禮をいたした、慮外の段平にお詫をいたす、然らば……」膳を重ねて椽側に立ち出で、庭石の上へガラ〳〵〳〵皿は粉な微塵、久「源吾、鳩に三枝の禮、烏に反哺の孝あり、先づ殿中にて吉良殿へ刃傷いたし、思召を果さず御切腹、家斷絶になつた内匠頭樣の御心中は何うであつたであらう、久太夫思ひ出しても腸を斷つの思ひをいたす、然るに其の祿を食みながら、無念こも存ぜず、只今御身は何んこ申した、主家繁昌の時には二百石、此度は二百五十石にて細川家へ奉公いたす、主家の不祥が身の幸ひこは、意味ある事こ心得たが、本心を以つて申した事てあらば呆れ果てた人非人、假令犬猫たりこも、飼主の恩は知るものを、況して武士こして報恩の心なきこは見下

け果てた大腰抜け、假令内藏之助が本心放埒、他に志を同じうするものあらざれば、何故其方一人にて、吉良家へ切つて入り、屍を屋外にナゼ晒さん、左様な汝こ知るなれば、兄弟の約をせまじきものを、今更ら思へば、我が明なきが恥かしい、サア兄弟の緣は今日限り、キッこ交りを絕つ、以來闕を跨ぐに於ては、一刀兩斷にいたすによつて、覺悟しろ、禽獸に劣つた大腰抜け……、イヤ之れは中村氏へ對して慮外の段々、平にお詫をいたす、久太夫發狂に等しき振舞、御用赦の程を願ふ……ウーム、腰抜武士面を見るも汚らはしい、胸が悪い……」怒りの余り久太夫、ッ、ッ、……こ疊を蹴つて、奥へ入り込んで仕舞つた、殘つた二人は宛然質に取られた如く、顔見合せ、ボンヤリしてる處へ、妻は何にも知らず夫れへ挨拶に出て、何か又久太夫が立腹いたしたやう見受けますが、御存じの通り一徹短慮、只頑固こ申すのみにございます、何うか御勘辨下されいまし、江戸表へ御着次第、御一報願ひく

久太夫の前は何こも取り成しますゆへ、何うか今迄通り、御書面を願ひます、源イヤ折角ながら、夫れは御免を蒙むる、只今水沼ごの兄弟の緣を切つた、以來闕を跨がば、一刀兩斷こ迄仰しやつたも御當家は八百石の御大家、私は小心にして、細川家に於いて僅かに二百五十石を賜はる、拙者の如き身輕きものが、弟こもあらば、定めし御恥辱でござらう、御外聞にも關はらう、イヤ貧賤の友は交るべからずこ申すが、サテ貧しき友は避けたいものでござる、下世話の譬へに、咽喉元過ぐれば熱さを忘れるなご、申してな、ァハ……緣を切つたこ仰しやれば、夫れ迄、別にお沙汰いたすにも及ぶまい」こ、源吾も恨みがましき語氣で、妻に喰つてかゝつた、處へ家來が膳を一膳、結構な料理を揃へて持つて來て、「武「申上げます、主人より中村殿へ宜くお詫をいたてしくれこ申されました……」こ、膳を夫れへ出し、「武「大高殿にはお膳を差上げるに及ばんこ申しました、勘「オヤ〳〵、

之れは酷ひ、飯も食はさないのか……」を取る譯にも行かない、勘「折角ながら、御辭退いたす……」スゴ〳〵暇を告げて外へ出かける、イヤ勘助怒るまい事か、源吾が袖を引いて何んこ話をしても振り返つて見ない、ドシ〳〵足に任せて行く、仕方がないから大高源吾も其の後へついて行く、驅て往來より脇道へ入つて、人通りのない處へ來る、源「中村道が違ふよ……」勘「何でも宜い、默つて來い……」尾いて行く、四邊に人なきを考へ、木の根に腰かけて勘助ホッこ息をついて、勘「イヤ、何うも酷ひ目に遭つたの、大高ナゼアンな處へ寄つた、源「イヤ、甚だ恐れ入つた、イヤホンの玄關にて顏を見て、直に歸らうこ存じた處、門を閉められ、據なく……」勘「イヤ何うも、身體を鉢で刺されるやうな心地一言毎に膽を冷し、ナガ〳〵我々が同席する人でない、マア大石殿なぞこ相談相手になる人であらう、貴公此の始末を何うする、源「何うするこ云つて、別

にいたしやうもない、先方では拙者を犬武士、腰拔武士こ申す位ひ、夫れ迄の事である、勘「イヤ、さうでない、まだ疑がつてゐる、……」勘「イヤ〳〵、まだ本心を明さぬものこ疑つてゐる、犬武士なら飽迄犬武士になれ、源「犬武士になれこ云つた處で、何んな手段を取るのか、勘「さやう、先刻貴樣の話しに、紺屋町の浪宅で十三兩二分用立てたこ申したな、源「ウム其の通り、勘「其の金子は先方から返金になつたか、源「貸した積りでないから返金の催促なんかはした事がない、勘「それこそ幸ひ、之から引返へして、十三兩二分取つて來い、源「之れは何うも卑劣こは云へ、一つの手段てあるかの催促なんかが出來るものか……、勘「卑劣至極、只今こなつて金ら、取つて來い、先方にも夫の金を何事もなく返金いたさば之れほごの恩金を無利子こいふ事はない、利分こ云つて、五兩出せこ云つて、都合十八兩二分取つて來い……」云はれて大高源吾は迷惑さうに、頭を掻いてゐる。

二〇、源吾義を守り貸金の請求

中村勘助は後々を慮かつて、無理に大高源吾に勸める、大高源吾進退谷まつて、源「ウームそれは甚だ迷惑である、何うか中村勘辨してくれ、併し拙者の失策だから、此の處で切腹して申譯をする、勘「御身が切腹して何の甲斐がある、大石殿首め一統の爲めだから取つて來い、出來んこあらば勘助此處を動かん、源「ウーム據ない、それでは行つて來る、勘「チヨイこ待て、御身の懷中物を此處へ置いて行け、源「ナンデ乃公の懷中物を……、勘「さうでない取つて來た振をして、十八兩二分自分の懷中から出しては何にもならん、源「イヤそれほご疑ふには及ばん、勘「さうでない、此方へ渡せよ……」大高源吾紙入は勘助に取られて仕舞ひ、仕方ないから、ボンヤリして考へながら引返して來て、水沼の屋敷迄來るこ、今度は以前こ違つて家來も冷淡だ、家「ナ

ニ御用で、源「此度は御新造に御意得たい、家「ハ、ア……御新造樣只今の大高こいふ人が見へました、妻「イヤ之れは大高樣、何か御失念物でもございましたか、源「別に失念こいふ次第でもないが、先刻のお言葉に兄弟の緣を切つたこ仰しやつた、さればモ早や赤の他人、紺屋町御浪宅にて、御夫婦御病氣の節、金子を御用立ていたした事、お覺へがござらう……」久太夫の妻も顏を赤くした、側には家來も居れば女中もゐる、昔しの貧乏時代の事を云はれては赤面するは無理もない、妻「ハイ、如何にも覺へがございます、源「最前のお言葉に、兄弟の緣を切つたこ仰しやれば最早其の金もお貸し申して置く必要がない、御返金に預りたいこ存じて罷り出でましたが、水沼氏へ宜しく、妻「ハイ誠に赤面の到りでございますが、只今早速御返金いたしますれば、暫らくお控へを願ひます……」久太夫の妻も泣き出しさうな顏をして、奥へ駈け込んで來るこ、久太夫は腕拱いて考へてゐる、尤も心ならぬ惡口をいたし、義兄弟

の縁を切るこ云つて追返したのであるから心持が悪ひ、妻「貴公、久「何んぢや、妻「大高ごのが又参りました、久「面目を失つて詫を申してくれこ云つて参つたか、妻「それ處ではございません、紺屋町の浪宅で用達つた金十二兩二分を他人こなつたら返金しろこ申すのでございます、久「ウームアノ金の催促か、ァ、他人だ、浪人すれは、もう心が淋しくなるものか、返金する折はあつたけれごも、先方の厚意厚き惠みこ心得、金を返へせば宜いこいふ趣意のものではない、ァ、此方の失策だ、叮嚀に禮を述べて戻しなさい、妻「畏まりました……」十三兩二分盆の上に紙を敷いて、其の上へ列べ、妻「之れは、お待遠樣でございました、御厚意の段、有難く存じます、今改めて十三兩二分、御返金いたします、源「ハイ……之れは十三兩二分でござるな、妻「御意にございます、源「イヤ之れ切りではござらんが……、妻「然し、他に拜借の覺へはございません、源「之れはしたり、此の世の中に、金をかりて利息なしこ

は如何……利分こして金子五兩お添へなさい」新造はイヨ〳〵赤くなつて、妻「其の節御利分のお掛合を受けません爲め、元金丈けを御返却申しました、只今こなり御催促、誠に面目次第もございません、何うかチョイこお待ち下さいますやう、只今差上げまする……」奥へ戻つて、妻「良人、十三兩二分は元金、此の世の中に無利息で、金を貸す借るこ、いふ事はない、五兩金利分こして添へろこ申します、源「ナニ利分を……、ウーム、酷い奴だな、それぢやァ五兩添へて返へせ〳〵……」其處で十八兩二分の金を受取つて、門外へ出た大高源吾は、源「ァ、苦しかつた、生れて斯んな事に出會つた事がない、定めし立腹であらうが許して下さるやう」こ、心の中で詫をしながら、中村勘助の待つてゐる處へ來て、源「中村、此の通り受取つた來たが、忠義の爲めには、鬼のやうな事も云はねばならぬ、今日ほご苦しい思ひをした事はない」こ額の汗を拭き〳〵、ホッこ溜息吐いてゐる、此方水沼久太夫は、面白からず心

得て、腕拱いて考へてゐたが、ハタと膝を打つて、久「南無三失策つた、我れながら到らなんだ、金の催促は心からの業ではない、飽迄犬武士ご罵られんが爲めに、ワザとアノやうな卑劣の擧動に及んだのであらう、定めし彼れも金の催促は心苦しく思つたであらう、口外いたさぬは神文に背かぬ彼の義心、斯ばかり彼れに心配苦勞をいたさせしこそ氣の毒の到り、何れ遠からず意外の沙汰があるであらう」ご、一日千秋の思ひをしてゐるうちに、果せるかな、其の年十二月十四日、高輪萬松山泉岳寺から出した大高源吾の手紙が、水田久太夫の許へ到着した、中に當時の詫狀一通ご、十八兩二分の金、並びに義黨四十七人の連名が入つてゐた、地方では一番此の水沼久太夫の許へ早く此の一條が知れたのであつた、久太夫は源吾の詫狀を寶ごして、人に誇り、永く保存をしたごいふ、之れぞ大高源吾腹切魚の別れご云つて、悲劇中の悲劇であつた、處が四十七浪士のうちで、天晴武藝の名人ご呼ばれたのが、武林唯七ご堀部安兵衞の兩人であつた、此の二人は兄たり難く、弟たり難く、腕前に甲乙はなかつたが安兵衞は生涯に三度仇討をした丈け、夫れ丈け有名であつた、此の堀部安兵衞武庸は、前名中山安兵衞、越後新發田藩口伯耆守の家來であつた、安兵衞幼少の折のごごは、親孝行者であつた事は諸君も御存知であらう、伯耆守の家來ご出て叔父の菅野六郎右衞門を尋ねんご、來かゝつたのが、上州[illegible]庭の手前、日は暮れたが、サテ此の邊に宿屋はなし、殆んご困じ果て、百姓家に一泊を乞ふたが、近來盜賊が徘徊するごいふので、安兵衞を怪しいご見たか、泊めてくれない、安兵衞據なく、八幡宮の拜殿に臥た、社は山石八幡宮ご云つて、以前は立派な宮であつたが、今は荒れ果てゝ、社守もない ごいふ始末、安兵衞は神殿の隅に横になつて、グウ〳〵寢込んだ、暫らくするごドッごいふ夜嵐、其の途端に、ボーン〳〵ご拍手の音が聞へる、之れに目を覺した安兵衞は、音のす

る方へ目を附けるこ、蹲いてゐるのは一人の老人、ハキ〳〵した句切りの宜い聲で、「老何卒、我に勇士を授け給へ」こ、祈念を凝してゐる、安兵衛之れを聞くこ、まだ年が若いから、惡戯をしてやりたくなつた、安「ヨシ〳〵、此奴を一つ驚かしてやらう」ソロ〳〵立ち上つて、神殿に這い込んだ、老人はそんな事こは知らないから、老「南無弓矢大武神、我に勇士を授け給へ……」此の時安兵衛は、安「願ひの段聞き届け取らす、安堵いたせ、夢疑ふ事勿れ……」之れを聞くこ老人は愼こしたこ見へ、老「ヤア、何者なるか、我が心願の妨げいたす大馬鹿者奴、今一言申せ、其の分には差置かぬぞ、安「ヤヨ老人善哉〳〵、我は山石八幡大武神なり、老「ヤア、又しても此奴無禮千萬、サテは汝は近頃此の邊を暴れ廻る山賊よな、イデヤ衆人の懲らしめ、手捕りにいたしてくれん、覺悟いたせ」神殿さしてヅカ〳〵上つて來た、安兵衛もチト遣り過ぎたこ思つたが逃げ出す事も出來ないから、安「オヤ〳〵恐ろしい氣の強い

老人だ、斯んなものゝ一人位ひ蹴殺すは何の手間暇もいらぬ事ではあるが、殺すは不憫、一つ威かしてくれん」こ、一刀ズラリこ引抜いて、寄らば斬らんこ身構へた、白刃の光りを見たら驚いて逃げるであらうこ思ひの外、老人少しも驚ろかない、ア「ハ……こ高笑ひをして、老「コリヤ、若者、イヤサ盜賊、其の太刀を以つて何んこする、老人なれご、乃公は山賊夜盜の爲めに討たるゝものではないぞ、イデ此の上は手捕りにいたしてくれん、覺悟しろ……」ヂリ〳〵こ進み寄る、安兵衛之れを聞いて、安「オヤ〳〵、手捕りこは人を馬鹿にしてゐるやァがる、不憫ながら一刀の錆にいたしてくれん……エイッ」斬り込んだ白刃の下に、ヒラリ身を交した老人は、ヤッこ氣合をかけるこ、太刀を持つたまゝ、安兵衛バッタリ夫れへ倒れた、老「ア、ハ……、弱い奴だ、氣を失つたか、コレ山賊何うした……イヤ待て見受けし處、此奴賊こも思はれぬハゝア修業者だな、コレ武士、若者、氣を確かに持て……」グイこ引起し、

呑中を撫でさすり、エイ〳〵一つ活を入れた、ウーム、氣のついた安兵衛はキヨト〳〵四邊を見廻し、老人の姿を見るや、パッと飛び退つて、安「先刻は、御無禮をいたした、平に御勘辨を……」、老「イヤ、今の今迄貴樣を賊と思つてゐたからアンな事をやつたが、賊ではないな、旅の者であらう……」、安「仰せの通り、越後より江戸に出府いたす者でござる、老「さうか、若年には似合はぬ天晴劍法の達者、只今斬り込んで參つたアノ太刀筋は實に美事である、御身は何れの藩士で、如何なる望みを抱いて、江戸に參るか、苦しからずば話して聞かせ、安「ハイ、主家を名乘るは不忠の到りながら、一度賊の汚名を蒙むりし拙者、身の上を申さざれば再び疑ひを受けるであらう、依つて委細を申上ける、某事は斯樣〳〵……」と、之れ迄の逐一を述べると、老「ハヽア、越後溝口の浪人か、就ては御身に賴みがある、承知してくれるか何うだ、安「如何なる事か存ぜねど、某の身に叶ふ事ならば、何なりとも承はり申す、

○「忝ない、他でもないが、某數年工夫した武術を永く後世に傳へたく存ずれど、今日迄我心に叶ひし門人とてもない、見る通り、明日をも期し難き老人の拙者、命あるうちに、其の武術を傳へ置きたく、之れが爲めに、當八幡宮に參詣いたし、何卒勇士を授け給へと、祈念をいたす事此處一百日、滿願の當夜に當り、御身の如き勇士に出合ひしは、之れぞ八幡宮の加護と存ずる、如何に中山、我が多年工夫せし武術を學び、我が志を繼ぎ、以つて永く後世に殘してくれる心底はないか」と、いはれて安兵衛は大いに喜こんだ。

二一、豪傑大酒を好む中山安兵衛の江戸荒し

安「有難き其の仰せ、何卒御指南相願ひたく、シテ老人の御姓名は……、老「それは後に分る今、此處で名乘るにも及ぶまい、サア我が道場へ參るが宜い、近い處だ、同道しやう」白髭を垂れ、悠然として話をする体度、天晴由緒